志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）

九州電力株式会社鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

安良（やすら）遺跡

2012年3月

鹿児島県志布志市教育委員会

序　　文

本書は、九州電力株式会社鉄塔建替工事に伴い、志布志市教育委員会が実施した、安良遺跡の発掘調査報告書です。

安良遺跡では主に古墳時代と鎌倉時代の遺物・遺構が見つかり、多くの成果を収めました。

古墳時代の成果として、７世紀頃の竪穴建物跡や土器が見つかっており、約1,400年前からこの地が集落として利用されていたことが分かりました。

鎌倉時代の成果として、備前焼・常滑焼などの国内産陶器や白磁・青磁などの中国産陶磁器が見つかりました。古くから交易の拠点・要衝として繁栄してきた志布志地方の歴史的様相の一端が明らかとなる重要な資料となります。

本書が市民の皆様をはじめとする多くの市民に活用され、地域の歴史や文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたりご理解・ご協力いただいた九州電力株式会社をはじめ、各関係機関及び発掘調査に従事・協力していただいた地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成２４年３月

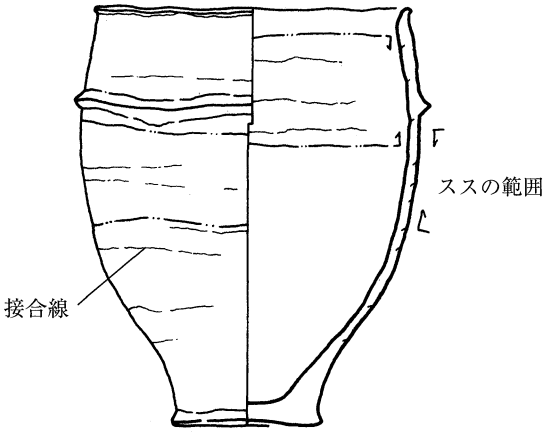
志布志市教育委員会
教育長　坪田勝秀

例　　言

1　本報告書は九州電力株式会社鉄塔建替工事に伴う安良遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は鹿児島県志布志市志布志町安楽字勢園に所在する。
3　発掘調査は九州電力株式会社の依頼を受け、志布志市教育委員会が実施した。
4　発掘調査は平成23年５月18日から７月15日まで実施し、整理作業・報告書作成は平成23年５月23日から平成24年３月21日まで実施した。
5　本書で用いた方位は全て磁北であり、レベル値は九州電力株式会社の工事計画図面に基づく、海抜絶対高である。
6　遺物番号は通し番号とし、本文・表・挿図・図版の番号は一致する。
7　挿図の縮尺は各図面に示した。
8　遺跡位置図等の地図は国土地理院発行の1：25,000地形図『志布志』、1：50,000地形図『志布志』、大日本帝国陸地測量部発行の1：50,000地形図（明治35年測量）を利用した。
9　発掘調査における図面の作成は相美伊久雄と坂元裕樹が行い、写真撮影は相美が行った。
10　遺構・遺物の実測・トレースは臨時職員の協力を得て、相美・坂元が行った。また、一部遺構図作成にデジタル技術を用いた。
11　遺物の写真撮影は鹿児島県立埋蔵文化財センターにて、西園勝彦・吉岡康弘両氏が行った。
12　本書の執筆・編集について、第５章第４節４の執筆を坂元が、その他の執筆及び編集を相美が行った。
13　出土遺物及び図面・写真の記録類は志布志市教育委員会で保管し、展示・活用する予定である。
14　発掘調査及び報告書作成の際には、以下の方々よりご指導・ご助言を頂いた。ご芳名を記すことで、謝意を表します（敬称略）。
渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部）、中村直子（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）、橋本達也（鹿児島大学総合博物館）、関明恵・東和幸（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、橋口亘（南さつま市教育委員会）、藤井大祐（鹿児島市教育委員会）

凡　　例

1　本文で用いた遺構記号は、文化庁文化財部記念物課監修『発掘調査のてびき』（2010年刊行）に準拠し、以下のとおりである。なお、遺構番号は遺構の種類ごとに、それぞれ検出された順に通し番号を与え、報告書まで固定している。
　SI：竪穴建物　　SD: 溝　　SK：土坑
2　土層と土器の色調は『新版標準土色帳』に準拠した。
3　遺物挿図の網かけについて、縄文・古墳時代土器は赤色顔料部分を、古代の黒色土器は黒色部分を示す。
4　器面にススが付着しているものについて、平面図には２点破線で（一部破線のもの有）、断面図には矢印で示した（右図参照）。
5　土器等の調整痕の表現方法は下図のとおりである。



ナデ　　ミガキ　　ケズリ　　ハケメ　　ユビオサエ/ユビオサエ後ナデ

本文目次

序文
例言・凡例
目次
第１章　調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
　第３節　試掘調査 …… 1
　第４節　本調査 …… 1
　第５節　整理・報告書作成作業 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の方法
　第１節　発掘調査の方法 …… 7
　第２節　層序 …… 9
第４章　調査の成果
　第１節　縄文・弥生時代の調査 …… 11
　第２節　古墳時代の調査 …… 11
　第３節　古代の調査 …… 24
　第４節　中世の調査 …… 25
　第５節　近世の調査 …… 32
　第６節　近代以降・時期不定の調査 …… 32
観察表 …… 41
第５章　総括
　第１節　縄文・弥生時代 …… 47
　第２節　古墳時代 …… 47
　第３節　古代 …… 49
　第４節　中世 …… 49
　第５節　近世 …… 52
　第６節　近代以降・時期不定 …… 52
写真図版 …… 53
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置及び周辺遺跡図（1：25,000） …… 4
第２図　周辺地形図（1：6,000） …… 6
第３図　周辺環境の変遷（1：60,000） …… 6
第４図　調査区位置図（1：300） …… 7
第５図　遺構配置図・出土遺物分布図 …… 8
第６図　土層柱状図 …… 9
第７図　土層断面図 …… 10
第８図　縄文・弥生時代遺物 …… 12
第９図　竪穴建物跡１・２号平・断面図・遺物分布図… 14
第10図　竪穴建物跡１・２号出土遺物(１) …… 15
第11図　竪穴建物跡１・２号出土遺物(２) …… 16
第12図　竪穴建物跡１・２号出土遺物(３) …… 17
第13図　古墳時代包含層出土遺物(１) …… 18
第14図　古墳時代包含層出土遺物(２) …… 19
第15図　古墳時代包含層出土遺物(３) …… 20
第16図　古墳時代包含層出土遺物(４) …… 21
第17図　古墳時代包含層出土遺物(５) …… 22
第18図　古代遺物 …… 23
第19図　古墳時代～古代須恵器 …… 24
第20図　中世遺物(１)　土師器坏 …… 26
第21図　中世遺物(２)　土師器皿 …… 27
第22図　中世遺物(３)　須恵器・瓦質土器・国産陶器 28
第23図　中世遺物(４)　国産陶器・滑石製品 …… 29
第24図　中世遺物(５)　輸入陶磁器・銭貨 …… 30
第25図　近世遺物 …… 31
第26図　時期不定遺構配置図 …… 32
第27図　溝状遺構１～５号及びピット平・断面図 …… 33
第28図　土坑１・２号平・断面図 …… 34
第29図　溝状遺構１～３号出土遺物 …… 36
第30図　溝状遺構４・５号・土坑2号・ピット出土遺物 … 37
第31図　土坑１号出土遺物(１) …… 38
第32図　土坑１号出土遺物(２) …… 39
第33図　土坑１号出土遺物(３)・近世・時期不定遺物 40

表目次

第１表　周辺遺跡地名表 …… 5
第２表　縄文・弥生時代土器観察表 …… 41
第３表　縄文時代石器観察表 …… 41
第４表　竪穴建物出土土器観察表 …… 41
第５表　竪穴建物出土須恵器観察表 …… 41
第６表　竪穴建物出土鉄製品観察表 …… 41
第７表　竪穴建物出土石器観察表 …… 42
第８表　竪穴建物出土磁器観察表 …… 42
第９表　古墳時代土器観察表（１） …… 42
第10表　古墳時代土器観察表（２） …… 43
第11表　古墳時代須恵器観察表 …… 43
第12表　古代土師器観察表 …… 43
第13表　古代土器・土師甕観察表 …… 43
第14表　古墳～古代須恵器観察表 …… 43
第15表　中世土師器観察表（１） …… 43
第16表　中世土師器観察表（２） …… 44
第17表　中世須恵器・陶器他　観察表 …… 44
第18表　中世輸入陶磁器観察表（１） …… 44
第19表　中世輸入陶磁器観察表（２） …… 45
第20表　中世銭貨観察表 …… 45
第21表　近世陶磁器観察表 …… 45
第22表　遺構内出土土器観察表 …… 46
第23表　遺構内出土土師器観察表 …… 46
第24表　遺構内出土磁器観察表 …… 46
第25表　遺構内出土須恵器・陶器観察表 …… 46
第26表　遺構内出土鉄製品観察表 …… 46
第27表　時期不定遺物観察表 …… 46
第28表　近代及び時期不定遺物観察表 …… 46
第29表　中世前期輸入陶磁器組成表 …… 50

写真図版目次

図版１ …… 53
　空中写真
　遺跡近景（西から）
　東壁土層断面（溝２付近）
　南壁土層断面（溝１付近）
図版２ …… 54
　西壁土層断面（土坑１付近）
　北壁土層断面（竪穴建物跡付近）
　古墳時代土器（№68）出土状況
　常滑焼（№245）出土状況
　溝状遺構１～４号検出状況（西から）
図版３ …… 55
　溝状遺構１号完掘状況（西から）
　溝状遺構２号完掘状況（西から）
　土坑１号遺物出土状況（南東から）
　古道検出状況（北から）
　土坑２号検出状況（南から）
　土坑２号完掘状況（東から）
図版４ …… 56
　竪穴建物跡１・２号検出状況（南西から）
　竪穴建物跡１・２号遺物出土状況（№29）
　竪穴建物跡１・２号埋土状況（南西から）
　竪穴建物跡１・２号完掘状況（南西から）
　竪穴建物跡１・２号完掘状況（北西から）
図版５　縄文・弥生時代遺物 …… 57
図版６　古墳時代包含層出土及び竪穴建物跡出土遺物 …… 58
図版７　竪穴建物跡出土遺物（１） …… 59
図版８　竪穴建物跡出土遺物（２） …… 60
図版９　古墳時代包含層出土遺物（１） …… 61
図版10　古墳時代包含層出土遺物（２） …… 62
図版11　古墳時代包含層出土遺物（３） …… 63
図版12　古墳時代包含層出土遺物（４） …… 64
図版13　古代・中世遺物 …… 65
図版14　古墳時代～中世須恵器 …… 66
図版15　中世遺物（１） …… 67
図版16　中世遺物（２） …… 68
図版17　中世遺物（３） …… 69
図版18　近世・時期不定遺物 …… 70
図版19　溝状遺構１～３号出土遺物 …… 71
図版20　溝状遺構４・５号及びピット１号出土遺物 …… 72
図版21　土坑１・２号及びピット４号出土遺物 …… 73
図版22　土坑１号出土備前焼 …… 74

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

志布志市教育委員会（以下、市教委）は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

平成22年５月、九電不動産株式会社は、九州電力株式会社特別高圧送電線鉄塔建設66kv 大隅志布志線一部変更工事に伴って、３ヶ所の事業対象地内における文化財の有無についての照会を市教委に行った（平成22年５月21日付）。

これを受けた市教委は遺跡地図での確認及び分布調査を実施し、その結果１ヶ所について「周知の埋蔵文化財包蔵地」である「安良遺跡」の範囲内であることが判明した。そのため市教委は、当該地における開発には遺跡保存に関する事前協議が必要である旨の「回答」を行った（平成22年５月31日付）。

平成23年10月の工事開始を予定した九州電力株式会社鹿児島支店（以下、九州電力）より、鹿児島県教育委員会（以下、県教委）へ、文化財保護法第93条第１項に基づいて「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の「届出」がなされた（平成22年11月２日付）。

これを受けて、市教委は平成22年12月20日から翌年１月５日まで試掘調査を実施した。その結果、縄文～近世の遺物が認められ、その試掘調査の所見を「届出」に添付した。その後、県教委より九州電力へ、工事着手前の発掘調査が必要である旨の「通知」がなされた（平成23年１月21日付）。

その後協議の結果、記録保存を目的とした発掘調査を平成23年度に実施することが決定し、九州電力と市教委との間で業務委託契約が締結された（平成23年４月19日付）。

第２節　調査体制

１　平成22年度（試掘調査）

事業主体	九州電力株式会社鹿児島支店	
調査主体	志布志市教育委員会	
調査責任者	志布志市教育委員会	
	教育長	坪田　勝秀
調査事務局	生涯学習課長	津曲　兼隆
	生涯学習課	
	文化財管理監	米元　史郎
	文化財管理室長	
	兼指定文化財係長	竹田　孝志
	埋蔵文化財係長	上田　義明
	主幹	村田　有子
	主任主査	出口順一朗
	主査	相美伊久雄
調査担当	主査	大窪　祥晃

２　平成23年度（本調査及び整理・報告書作成作業）

事業主体	九州電力株式会社鹿児島支店	
調査主体	志布志市教育委員会	
調査責任者	志布志市教育委員会	
	教育長	坪田　勝秀
調査事務局	生涯学習課長	米元　史郎
	文化財管理室長	
	兼指定文化財係長	竹田　孝志
	埋蔵文化財係長	上田　義明
	主幹	村田　有子
	主任主査	出口順一朗
	主任主査	大窪　祥晃
調査担当	主査	相美伊久雄
	埋蔵文化財調査員	坂元　裕樹
	臨時職員	迫　さとみ
		杉尾木の実

第３節　試掘調査

試掘調査は平成22年12月20日～平成23年１月５日に実施した（作業員実動３日・延作業員数15人）。調査は対象地に３×２ｍのトレンチを１ヶ所設定し、人力で掘り下げを行った。なお、進入路が確保できず、重機は用いなかった。

表土からアカホヤ相当層上面まで満遍なく遺物が出土し、コンテナケース４箱分に至った。ただし、縄文～近世の遺物が混在する状況であった。そのため、一括取上げを行った。なお、アカホヤ相当層上面にて精査を行ったが、遺構は検出できなかった。その後、いわゆる「チョコ層」相当層まで掘り下げを行ったが、遺構・遺物は確認できず、そして掘削深度が２ｍに達したため、それ以上の調査は断念した。

同一包含層から縄文～近世の遺物が出土するという調査結果から、調査対象地は地形的に東側からの流れ込みによって形成された可能性が高いと判断された。

第４節　本調査

平成23年５月２～12日において、物品賃貸借の入札・契約、事務所設置用地の賃貸借契約、外業作業員の雇用手続きなど、調査開始のための準備を実施した。

発掘作業は平成23年５月18日～７月15日（作業員実動28日）に実施した。延べ作業員人数は225名、調査範囲は120㎡である。

調査対象地は竹や雑木が生い茂る荒蕪地のため、表土（Ⅰa層）には竹の根がとても多く、人力による掘り下げは困難を極めることが予想された。そのため、Ⅰa層下位の竹の根が減るレベルまで重機で掘り下げ、それ以下は人力で掘り下げた。

試掘調査時には表土とアカホヤ相当層の間には単一の包含層（Ⅰb層）が設定されていたが、Ⅰb層の掘り下げを行っている過程で、その下部に黄褐色粒を多く含む土が認められたことから、新たに「Ⅰc層」を設定した。Ⅰb層とⅠc層の違いは遺物の出土状況にも表れており、Ⅰb層出土遺物は破片が小さく、摩滅しているものが多く、一方Ⅰc層出土遺物は破片が大きく、摩滅しているものが少ないという傾向が認められた。

Ⅰc層を掘り下げた時点で、調査区西側と北東側に池田降下軽石を含む層の存在が明らかになったため、この層を「Ⅱ層」とし、アカホヤ相当層は「Ⅲ層」となった。

Ⅲ層（一部Ⅱ層）上面での遺構検出において、試掘トレンチが溝状遺構内に位置していることが判明した。アカホヤ相当層上面まで縄文～近世の遺物が混在して出土する理由が、溝状遺構の埋土を掘り下げていたためであることが分かり、試掘調査時の判断は誤りであったことが判明した。

南壁際に土層観察用も兼ねて、幅80cmの下層確認トレンチを設定し、地表面下２ｍまで掘り下げた。しかし、試掘調査同様遺構･遺物は確認できなかった。また、東･西･北壁際には幅80cmの土層観察用トレンチを設定した。７月15日に重機により埋戻しを行い、事業者側に現場の引き渡しを行った。

なお、例年より早く梅雨入りしたこと（５月23日）、そして調査区が送電線鉄塔の真下ということで、大雨・落雷等の気象情報に注意を払った。さらに、調査期間後半には梅雨明けしたことで（６月28日）、気温が上がり、加えて調査区が竹林の中にあって風通しが悪いこともあり、適宜休息をとる等、熱中症予防に努めた。

発掘作業終了後、文化財保護法第108条及び遺失物法第４条第１項に基づいて、「埋蔵物発見届」(平成23年７月25日付）を志布志警察署長へ、「発掘調査実施報告書」･「埋蔵文化財保管証」（平成23年７月25日付）を県教委に提出するなど、発掘調査に係る諸手続きを実施した。

発掘作業の具体的経過は、日誌抄を週毎に集約して記載する。

（５月18～20日） 九州電力担当者との現地協議・調査区設定（18日）、調査区内外の環境整備・重機による表土剥ぎ（19日）、Ⅰb層掘下げ。

（５月23～27日） Ⅰb層掘下げ、硬化面検出・写真撮影、遺物取上（１～304）

（５月30日～６月３日） 28・29日に台風通過するも被害なし。Ⅰb層掘下げ、Ⅰc層掘下げ（１日～）、遺物取上（305～1399）。

（６月６～10日） Ⅰc層掘下げ、土坑(SK) １検出・堀下げ、Ⅱ･Ⅲ層検出後精査、竪穴建物(SK)･溝状遺構(SD) １～４検出、遺物取上（1400～1853）。

（６月13～17日） Ⅰc層掘下げ、SK １・SD １～３完掘・写真撮影・実測、SI･SD ４掘下げ、遺物取上（1854～2059）。15～17日雨天中止。

（６月20～24日） 20・21日雨天中止、SD ４・ピット完掘・写真撮影、SK ２・SD ５検出、SI掘下げ、南壁下層確認トレンチ掘下げ、遺物取上（2061～2260）。

（６月27～30日） SD ５・ピット完掘・実測・写真撮影、SK ２掘下げ、南壁下層確認トレンチ完掘、南壁土層断面・実測、東壁確認トレンチ完掘、遺物取上（2261～2290）。

（７月４～８日） SK ２完掘・写真撮影、西壁下層確認トレンチ完掘、東・西壁土層断面実測・写真撮影、SI掘下げ・貼床確認、Ⅱ層掘下げ、遺物取上（2291～2488）。

（７月10～15日） SK ２実測、SI堀方完掘・写真撮影・実測、北壁下層確認トレンチ完掘、北壁土層断面写真撮影・実測、遺物取上（2491～2703）。器材撤収（13日）、調査区埋戻し（14日）、事務所設置用借地ロータリー作業（15日）。

第５節　整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業について、一部（遺物洗浄・注記）を発掘作業と並行して５月25日より、志布志埋蔵文化財収蔵整理作業室（以下､志布志作業室）で開始した。

発掘作業終了後、志布志作業室にて本格的な整理・報告書作成作業に入り､平成24年１月にかけて､選別､接合、実測・トレース、遺構製図、写真撮影、原稿執筆、編集などを行い、１月31日の印刷製本に係る契約後、本書の刊行をもって、全ての業務を終了した。

以下、整理・報告書作成業務の具体的経過を月毎に記す。

（５・６月） 洗浄、注記。

（７月） 洗浄、注記、分類･選別、土器接合、図面整理。

（８・９月） 分類・選別、台帳登録、土器接合。

（10月） 報告書掲載遺物抽出、実測、原稿執筆。

（11・12月） 実測・トレース、レイアウト。

（１月） トレース、レイアウト、原稿執筆、遺構製図、編集、契約。

（２・３月） 校正、遺物収納。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

志布志市は鹿児島県の最東部に位置し、宮崎県都城市及び串間市と県境をなす。北は曽於市、南西は大崎町と接し、南は太平洋に向け湾口を開く志布志湾に面する。

本市の地形は東から志布志湾に向かって緩やかに傾斜し、海岸近くで急崖となり、わずかな沖積平野を経て海岸線となる。この海岸線は西側に旧期砂丘・新期砂丘に二分される砂丘海岸が続くのに対し、東側は日南層群で構成される岩礁海岸となる。市の北東部には日南層群が構成する急峻な山岳地帯がある。

その西側には入戸火砕流が広く分布し、いわゆるシラス台地を形成し、志布志市の主体をなす。このシラス台地は南流する前川・安楽川・菱田川など大小の河川による浸食作用によって細かく刻まれ、大小の狭長な台地となっており、前述の三河川の流域には高位・中位・低位の三段の段丘が認められる。

この地域の地質は古いほうから、日南層群－阿多鳥浜火砕流－夏井層－阿多（夏井）火砕流－旧期ローム層－入戸火砕流－新期火山灰層となる。日南層群は主に頁岩・砂岩の細互層から成り、年代は漸新世～前期中新世とされている。阿多鳥浜火砕流は夏井海岸の一部に認められるもので、23～25万年前とされる。夏井層は下部の貝や植物の化石を含むシルト層と上部の礫層からなる。阿多（夏井）火砕流は黒色を呈する溶結度の低い均質な凝灰岩で、年代は8.5～10.5万年前とされる。入戸火砕流は海岸に沿った地域では海抜40m程のシラス台地を形成する。下部には大隅降下軽石層が存在する。

安良遺跡は安楽川河口から約２km上流東岸の河岸段丘上に位置する。この段丘は、志布志町内で最も広い平坦面をもつ町原台地の西側末端部に５～20mの比高差で一段低くなっている中位段丘である。この中位段丘は長さ約２km、幅約500mで、南北に細長く広がり、上面はほぼ平坦で標高20～30mを測る。

この段丘上には遺跡の立地が多く、古代から集落が形成されていたと考えられる。一方、高位段丘である町原台地は畑地として利用されてきたが、近年宅地化が進んでいる（第３図参照）。

第２節　歴史的環境

安良遺跡は昭和40年代に道路の拡張工事で発見された遺跡で、縄文土器・石製土堀具・土師器等が見つかっている。

本遺跡が所在する志布志市には現在約500ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が認められている。戦後、志布志町の故瀬戸口望氏を中心に分布調査・発掘調査が活発に行われており、学史上重要な遺跡が多い。近年では主に有明町において農道整備に伴う発掘調査が行われ、弥生・古墳時代の様相が明らかになりつつある。なお、本市は現在の行政区分では鹿児島県に属するが、過去は日向国に属しており、この地域の歴史・文化を考える上で薩摩・大隅だけでなく、日向地域の影響も考慮する必要がある。

旧石器時代

ナイフ形石器・角錐状石器等が出土した志布志町中須Ｂ遺跡・松山町蕨野Ｂ遺跡、細石器が出土した志布志町道重遺跡、有明町和田上遺跡があるものの、調査事例は少ない。

縄文時代

志布志町では瀬戸口氏等による調査によって、「縄文銀座」と呼ばれるほど多数の遺跡が見つかっている。

草創期　学史上重要な志布志町東黒土田遺跡がある。隆帯文土器や舟形配石炉、貯蔵穴が見つかっている。特に貯蔵穴から出土した堅果類は日本最古である。同町鎌石橋遺跡でも隆帯文土器が出土している。

早期　前半期の集石や連穴土坑が多数見つかった志布志町倉園Ｂ遺跡、塞ノ神Ａ式壺形土器等の良好な資料が出土した同町夏井土光遺跡、連穴土坑の断ち割り調査を行い「シミ状痕跡」を初めて検出した有明町下堀遺跡など、遺跡数が多い。

前期　曽畑式が出土した志布志町別府石踊遺跡があるが、調査事例は少ない。

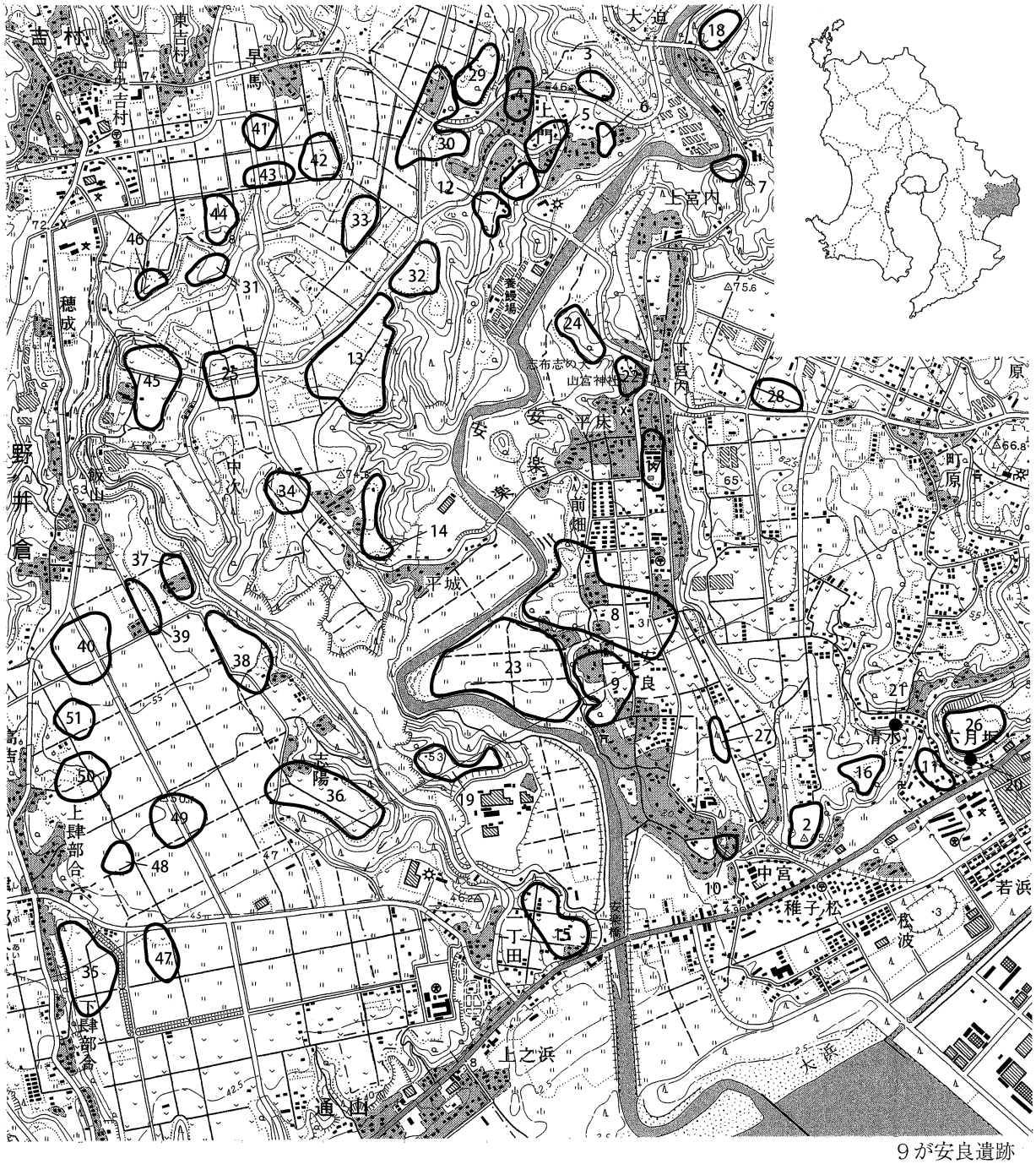
中期　この時期も調査事例は少ないものの、春日式期の竪穴建物が見つかった松山町前谷遺跡、船元式が出土した志布志町野久尾遺跡など著名な遺跡がある。

後期　志布志町の中原遺跡と片野洞穴が有名である。中原遺跡では在地系の宮之迫式・指宿式と瀬戸内系の中津式・福田ＫⅡ式・宿毛式の良好な資料が多数出土している。片野洞穴では西平式～御領式期の動物骨や貝殻、釣針やかんざし等の骨角器が出土している。この他、後期のほぼ全ての型式が出土した同町家野遺跡、独鈷石が見つかった出口Ａ・Ｂ遺跡がある。

晩期　黒川式干河原段階の良好な資料が出土した志布志町小迫遺跡がある。

弥生時代

縄文時代に比べると調査事例は少ないものの、重要な遺跡が松山町に存在する。それは京ノ峯遺跡で、中期後半の円形・方形周溝墓が見つかっており、近畿・瀬戸内地方の影響が考えられている。また、県内で唯一の発見例である中広銅鉾が有明町土橋遺跡で見つかっている。中期後半山ノ口Ⅱ式期の竪穴建物の検出例が多く、松山町山ノ田遺跡・前谷Ｂ遺跡、志布志町柳遺跡、有明町長田遺跡・本村遺跡がある。このほか、志布志町夏井土光



第１図　遺跡位置及び周辺遺跡図（１：25,000）

遺跡では柱状片刃石斧が出土している。

古墳時代

集落遺跡は有明町において調査事例が多い。仕明遺跡では中津野～東原式期の、長田遺跡では笹貫式期の竪穴建物が見つかっている。なお、安良遺跡と同時期の笹貫式新段階の資料が見つかっている遺跡は有明町上苑Ａ遺跡・中牟田遺跡、そして本遺跡のすぐ北に位置する宮脇遺跡がある。

古墳は有明町原田古墳・原田地下式横穴墓・馬場地下式横穴墓群、志布志町飯盛山古墳・小牧１号墳・六月坂横穴墓があるものの、詳細な調査は行われていない。六月坂横穴墓は明治42年旧制志布志中学校敷地整地の際発見されたもので、終末期に位置づけられる須恵器が見つかっている。

古代

志布志町水ヶ迫横穴墓で須恵器の蔵骨器が見つかって

第１表　周辺遺跡地名表

	遺跡番号（旧番号）	遺跡名	所在地	縄文	弥生	古墳	古代	中世
1	15-110（68-28）	大久保Ａ	志布志町安楽字大久保	○	○			
2	15-111（68-29）	別府	志布志町安楽字別府	○	○			
3	15-139（68-59）	山角Ａ	志布志町安楽字山角	○				
4	15-140（68-60）	山角Ｂ	志布志町安楽字山角	○	○			
5	15-141（68-61）	炭床	志布志町安楽字炭床	○	○	○		
6	15-142（68-62）	上重	志布志町安楽字上重	○				
7	15-190（68-113）	百堂穴	志布志町安楽字岩戸	○				
8	15-191（68-114）	宮脇	志布志町安楽字宮脇ほか	○		○	○	
9	15-192（68-115）	安良	志布志町安楽字勢園	○		○	○	○
10	15-193（68-116）	鳥井下	志布志町安楽字鳥居下	○				
11	15-194（68-117）	船磯	志布志町安楽字船磯ほか	○				
12	15-209（68-132）	大久保Ｂ	志布志町安楽字大久保ほか		○			
13	15-210（68-133）	高牧	志布志町安楽字高牧		○			
14	15-211（68-134）	二重堀Ａ	志布志町安楽字二重堀		○			
15	15-212（68-135）	権現原	志布志町安楽字権現原		○			
16	15-213（68-136）	別府上	志布志町安楽字別府上				○	
17	15-221（68-144）	宮内	志布志町安楽字宮内		○		○	
18	15-225（68-148）	大渡	志布志町安楽字大渡	○	○			
19	15-235（68-159）	小牧古墳群	志布志町安楽字小牧			○		
20	15-236（68-160）	六月坂横穴墓	志布志町志布志字水ヶ迫			○		
21	15-237（68-161）	水ヶ迫横穴墓	志布志町志布志字水ヶ迫				○	
22	15-238（68-162）	山宮古墳	志布志町安楽字宮下				○	○
23	15-242（68-168）	水神松	志布志町安楽字水神松			○		
24	15-250（68-176）	安楽城跡	志布志町安楽字前原					○
25	15-254（68-180）	金ヶ迫Ａ	志布志町安楽字金ヶ迫		○			
26	15-265（68-194）	外堀	志布志町志布志字外堀	○				
27	15-266（68-195）	八ヶ代	志布志町安楽字八ヶ代		○	○		
28	15-281（68-210）	宮之上	志布志町安楽字宮之上				○	
29	15-296（ - ）	上原	志布志町安楽字上原		○	○		
30	15-297（ - ）	大久保Ｃ	志布志町安楽字大久保		○			
31	15-298（ - ）	金ヶ迫Ｂ	志布志町安楽字金ヶ迫		○		○	
32	15-299（ - ）	七本松Ａ	志布志町安楽字七本松		○			
33	15-300（ - ）	七本松Ｂ	志布志町安楽字七本松		○			
34	15-301（ - ）	二重堀Ｂ	志布志町安楽字二重堀		○		○	
35	15-383（69-82）	大代	有明町野井倉字大代ほか	○			○	
36	15-385（69-84）	次五	有明町野井倉字次五ほか				○	
37	15-388（69-87）	東	有明町野井倉字東ほか		○			
38	15-389（69-88）	横堀	有明町野井倉字横堀ほか	○	○	○		
39	15-390（69-89）	下段Ｃ	有明町野井倉字下段ほか	○	○			
40	15-391（69-90）	下段Ｂ	有明町野井倉字下段ほか		○			
41	15-397（69-96）	早馬Ａ	有明町野井倉字早馬		○			
42	15-398（69-97）	早馬Ｂ	有明町野井倉字早馬		○			
43	15-399（69-98）	早馬Ｃ	有明町野井倉字早馬		○			
44	15-400（69-99）	吉原	有明町野井倉字吉原		○		○	
45	15-402（69-101）	中次Ｂ	有明町野井倉字中次		○			
46	15-403（69-102）	前原	有明町野井倉字前原		○			
47	15-459（69-158）	鎌迫	有明町野井倉字鎌迫ほか		○			
48	15-460（69-159）	上苑上	有明町野井倉字上苑上				○	
49	15-461（69-160）	甚堀	有明町野井倉字甚堀ほか		○			
50	15-462（69-161）	上苑Ｂ	有明町野井倉字上苑ほか				○	
51	15-463（69-162）	下段Ａ	有明町野井倉字下段				○	

いること以外、目立った調査事例はない。

中世

国指定史跡である志布志城跡が有名である。志布志城とは内城・松尾城・高城・新城の四城の総称である。

志布志城は文治５（1189）年頃の救仁院氏の居城に始まって以来、数々の領主に移り変わっており、中世の約400年間に武士興亡の歴史が繰り広げられた場所であった。保存整備目的で継続的に調査が行われており、中世後期の中国産陶磁器や東南アジア産陶器が出土している。

市内にはこの他、建久（1190～1198）年間に地頭弁済使安楽平九郎為成の居城とされる志布志町安楽城跡、文治４（1188）年に平重頼によって築かれたとされる松山城跡、南北朝期（1359年）に救仁郷氏の居城とされる有明町蓬原城跡などが存在する。

中世山城以外の調査事例は少なく、有明町長田遺跡・仕明遺跡で中世墓が見つかっている。長田遺跡例は玉縁口縁の白磁碗が副葬されている。本遺跡から約１km北には安楽山宮神社があり、明治26年境内から青白磁四耳壺の蔵骨器や鏡・太刀・青白磁合子などが見つかっている。

この地域は中世において日向国諸県郡救仁院・救仁郷とされた。また志布志の名が史料で確かめられるのは、正和５（1316）年のことで、「日向方島津御庄**志布志津**大沢水宝満寺敷地…」（『沙弥蓮正打渡状案』）とあり、万寿三（1026）年平季基が開いた島津庄・日向諸県郡一帯の港であったと考えられている。

近世

日向国諸県郡志布志郷とされ、東を秋月藩と接することから陸海ともにきわめて重要な郷であった。現在の志布志小学校に地頭仮屋がおかれ、その周辺には武家屋敷が建ち並ぶ「麓」を形成していた。藩米等の集積・積出港であった前川河口には津口番所が置かれていた。藩政末期には琉球を通しての密貿易が行われ、その商人であった中山宗五郎の屋敷は密貿易屋敷と呼ばれていた。これら地頭仮屋跡・津口番所跡・密貿易屋敷跡は発掘調査が行われ、陶磁器類が出土している。

近代

太平洋戦争末期、アメリカ軍の南九州上陸作戦（オリンピック作戦）を予想した日本軍は志布志湾沿岸に洞窟式の地下陣地を造った。その現存している一つが、志布志町権現島水際陣地跡である。また、安楽川を挟んで本遺跡の対岸にある野井倉台地には戦争末期に飛行場（野井倉飛行場）が建設されている。なお、地域住民の話によると、本遺跡北側に陸軍の兵舎があったということである。

（参考文献）※発掘調査報告書は割愛した。

志布志町誌編集委員会　1972『志布志町誌』上巻

志布志町教育委員会　1985『志布志の埋蔵文化財』

大木公彦・内村公大　2012『夏井海岸の地形・地質調査報告書』志布志市教育委員会

第２図　周辺地形図（１：6,000）

（明治35年）　　（平成12年）

第３図　周辺環境の変遷（１：60,000）

第３章　調査の方法

第１節　発掘調査の方法

１　発掘作業の方法

調査範囲は新設鉄塔の基礎となる直径4.5mの逆Ｔ基礎４脚全てが範囲に含まれるように設定した。ただし、九州電力側と協議の結果、西側は既設鉄塔の土台への影響を考慮し３m控えたことにより、12×10mの範囲となった（第４図）。

調査区の基準軸は、既設鉄塔と新設鉄塔の中心を結ぶ直線を東西軸とし、これに直行する軸を南北軸とした。レベルは、九州電力が新設鉄塔の中心に設置した杭（海抜21.9m）から引用した。

発掘作業はまず竹払いを行った後、竹の根が著しいＩａ層を重機により除去し、Ｉａ層最下部から人力（鋤簾・山鍬）により掘り下げを行った。

包含層（Ｉｂ・Ｉｃ層）から出土した遺物について、小片は一括取上げを行い、それ以外の遺物は必要に応じて写真撮影を行い、その後平板測量により取上げた。試掘調査結果から、縄文～近世の遺物が混在することが分かっており、その出土状況を図示する目的で平板測量を用いた。第５図から、縄文～近世の遺物が混在していることが分かる。遺物の写真撮影は大型の破片で、時期比定できるものを主な対象とした。

出土遺物のうち平板取上げを行ったものは、包含層・遺構合わせて2,708点で、一括取上げ分を含めると5,000点以上（コンテナケース18箱分）になる。

遺構検出はⅢ層及び一部残存しているⅡ層上面において行った。

２　遺構の調査方法

検出された遺構には竪穴建物(SI)、溝状遺構(SD)、土坑(SK)、古道、ピットがある（第５図）。これらの遺構は検出状況の写真撮影後、出土遺物の取上げ、土層断面実測・撮影、完掘、完掘状況実測・撮影を行った。

掘り下げは埋土の違いを比較しながら、移植ゴテで行った。出土遺物は、指先程の小片は一括取上げを行い、それ以外は平板取上げを行った。ただし、竪穴建物に関しては小片でも特徴的なものは平板取上げを行った。

竪穴建物・古道・土坑１号は個別に実測を行い、溝状遺構・土坑２号・ピットは調査区内に格子状に設定した実測基線を用いた。

調査中及び終了後、遺構の検出層や埋土状況、遺構内出土遺物、土層断面等の情報から、遺構の形成時期や性格等の検討を行った。

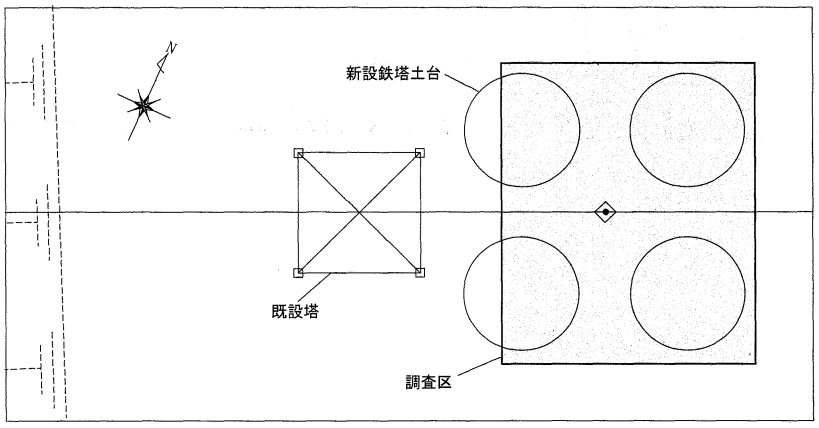
３　整理作業の方法

土器等の洗浄はブラシを用い、鉄器等の金属製品は筆で土の除去を行い、乾燥剤とともにポリ袋に保存した。

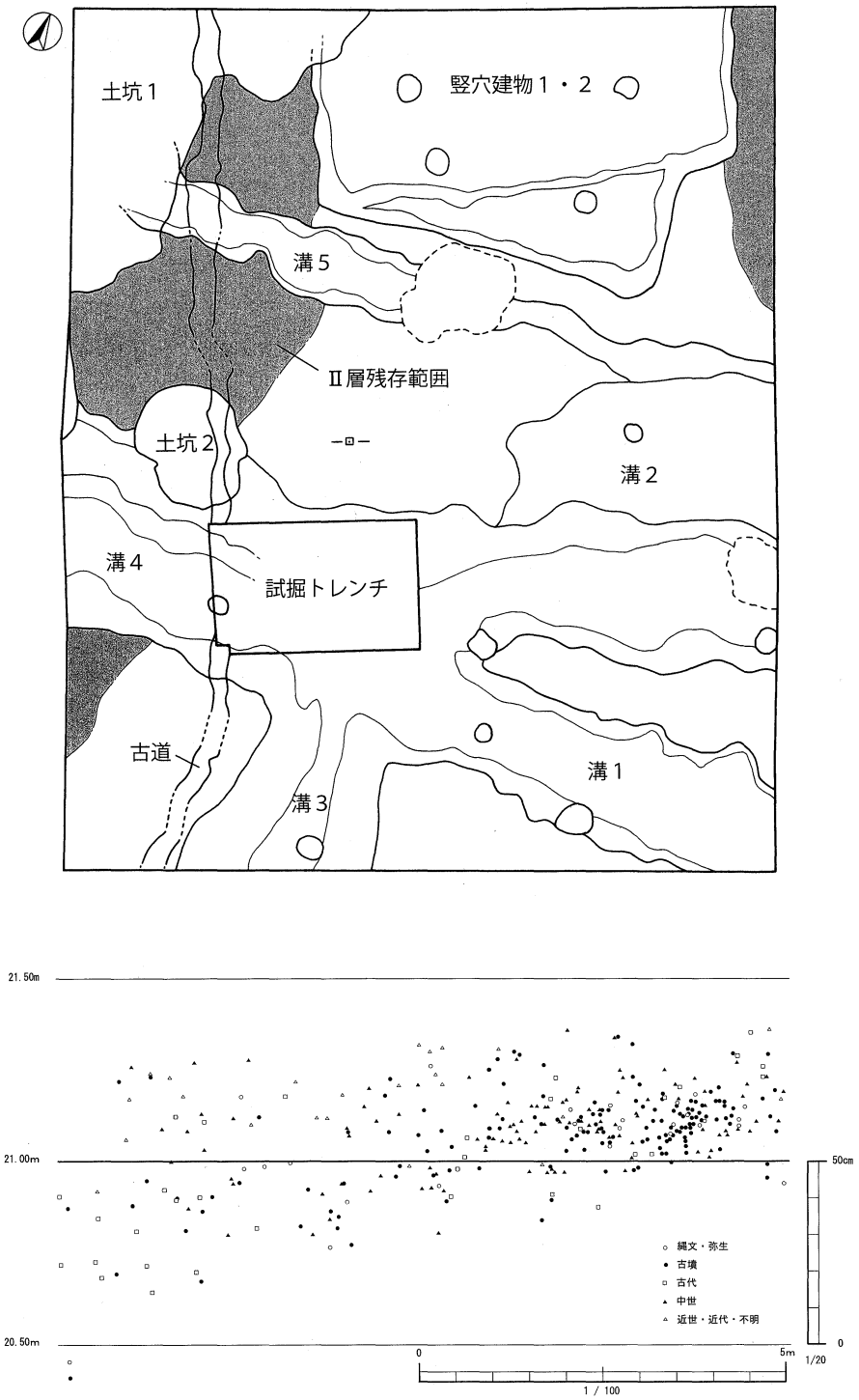
注記は遺跡名を表す「YSR」を頭に、包含層出土遺物は続けて「層」「取上番号」の順で記入した。遺構出土遺物は「YSR」に続けて「遺構記号」「取上番号」の順で記入した。なお、一括取上げを行った遺物の中で、特徴のない小片は注記を省略した。

接合は縄文･弥生･古墳時代土器、須恵器、古代土師器、中世土師器、陶器、磁器等に分類した後行った。そのなかでも、最も出土量の多い古墳時代土器は器種ごと、加えて類似する胎土ごとに細分した後、接合を行った。時間的制約から、遺構内出土遺物と比較的大型で器形の分かる遺物を優先した。また、遺構間や遺構と包含層間の接合も試みた。

接合後、実測のための抽出を行った。小片であっても各類の中で少数のものや時期比定できるものは抽出した。一方、各類の中で数量が多いもの（古墳時代土器や土師器）は器形が分かるものを優先した。分類の詳細については時代ごとに述べる。



第４図　調査区位置図（１：300）



第５図　遺構配置図・出土遺物分布図（南壁側からの見通し）

第２節　層序

基本層序は第６図に示した。なお、土層断面図（第７図）から、地形が北西側に傾斜していることが分かる。以下、各層について説明する。

Ⅰa層：黄灰～灰黄褐色（2.5Y5/1～10YR4/2）の砂質が強いシルト質土で、締まりはない。層厚は約40cm。表土である。周辺住民によると20年程前まで畑地として利用されていたということであるが、現況は竹林であり、竹根が著しく入り込んでいた。

Ⅰb層：褐灰色（10YR5/1）のやや砂質を帯びるシルト質土で、Ⅰａ層より締まりがある。層厚は約20cm。縄文～近代の遺物を含む。近世の遺物は主に本層に含まれる。本層上面において、古道が検出された。

旧耕作土または畑地開発に伴う整地層と判断した。摩滅した土器の小片が多数出土しているためである。太平洋戦争時の銃弾が認められることから、近代以前には形成されていたと考えられる。

Ⅰc層：黒褐色（10YR3/1）のやや砂質を帯びるシルト質土で、締まりはない。下部にⅢ層土が混ざる。径５～10cm程の円礫を含む。層厚は約25cm。西壁側には、Ⅰc層に比べると砂質の無い層（Ⅰc′層）が存在する。

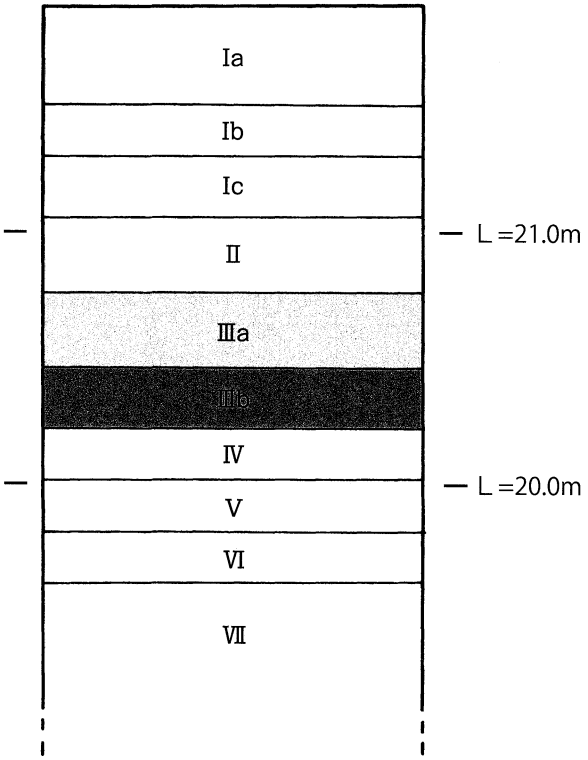
当初、通常の遺物包含層と捉えていた。しかし、土層断面の検討の結果、本層に締まりがないこと、溝状遺構の埋土との違いが認められなかったこと、そして本層がⅡ層を掘り込んでいること等から、本層が溝状遺構の埋土そのものである可能性も考えられた。ただし、調査面積が狭いために、断定できなかった。

Ⅱ層：黒褐色（7.5YR3/1）のシルト質土で、締まりがある。径２～３cmの池田降下軽石を含む。層厚は約30cm。調査区の西側と北東部のみ残存している。縄文後期前半の遺物を含む。本層上面において土坑１号を検出した。

Ⅲ層：色調や硬さによりａ・ｂ層に細分できる。アカホヤ火山灰相当層である。試掘調査時のⅡ層。

Ⅲa層：褐色（7.5YR3/3）のシルト質土で、調査区南東部において残存しない箇所がある。層厚は約30cm。Ⅱ層及び本層上面において溝状遺構と古墳時代の竪穴建物を検出した。

Ⅲb層：明黄褐色（10YR6/6）のシルト質土で、かなり硬質である。径２cm弱の黄橙色軽石を含む。層厚は約25cm。



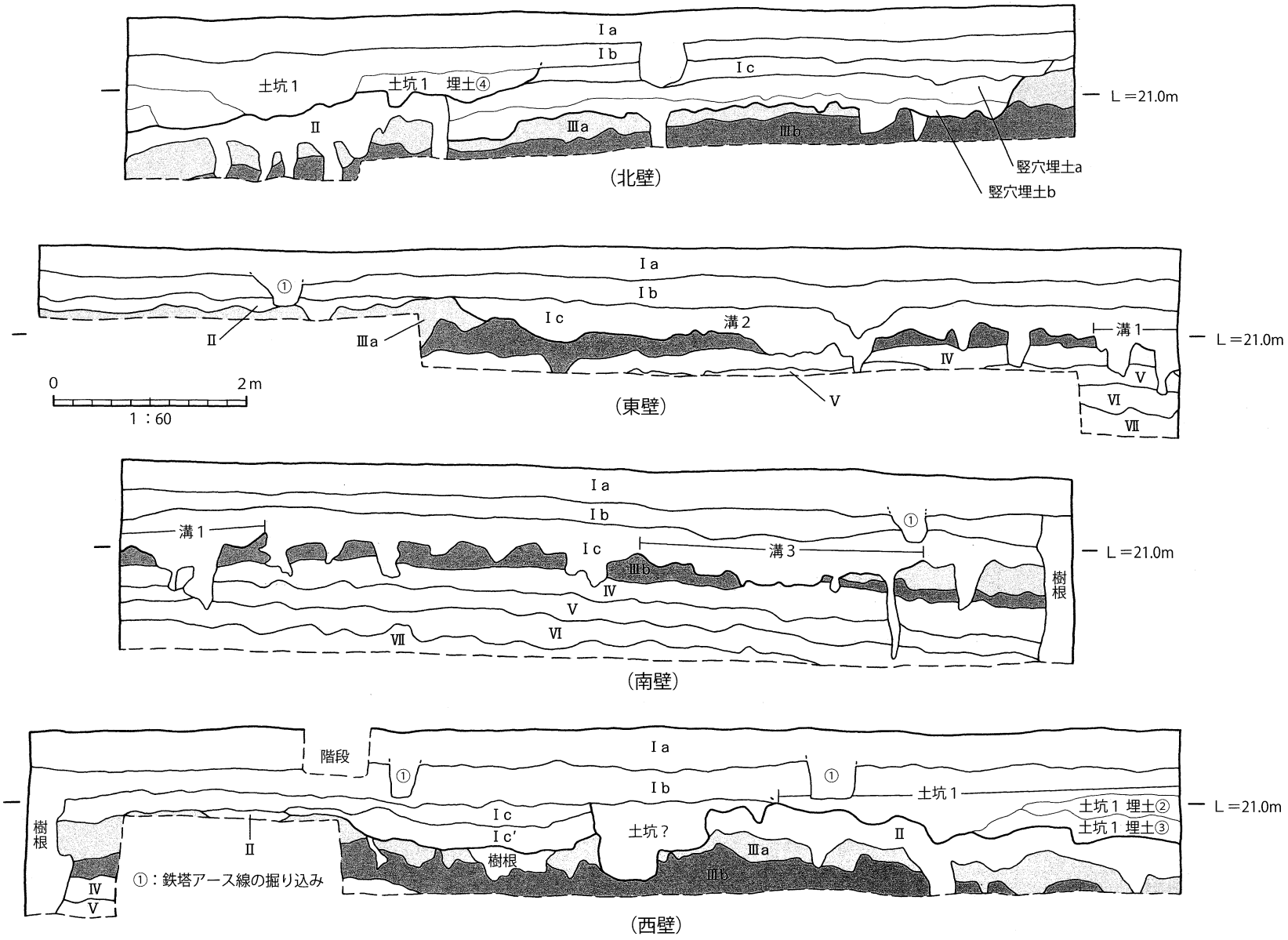
第６図　土層柱状図

Ⅳ層：褐～黒褐色（10YR4/6～10YR3/1）のシルト質土で、かなり硬質である。径２cm弱の黄橙色パミスを若干含む。層厚は約20cm。試掘調査時のⅢ層。

Ⅴ層：褐色（10YR4/6）のシルト質土で、粘性が強い。層厚は約20cm。試掘調査時のⅣ層。

Ⅵ層：橙～にぶい橙色（7.5YR6/6～6/4）のシルト質土。層厚は約20cm。試掘調査時のⅤ層。

Ⅶ層：明黄褐色（10YR7/6～6/6）の砂質土で、径２～５cmの礫を含む。段丘砂礫層である。上位はやや粘性が認められるが、下位ほど砂質が増し、川砂のようになる。層厚は50cm以上。試掘調査時のⅥ層。


Ⅰa
Ⅰb
Ⅰc
土坑1
土坑1 埋土④
Ⅱ
Ⅲa
Ⅲb
L＝21.0m
竪穴埋土a
竪穴埋土b
(北壁)
①
溝2
溝1
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
0
2m
1：60
(東壁)
溝3
樹根
(南壁)
階段
土坑1
土坑1 埋土②
土坑1 埋土③
土坑？
Ⅰc′
①：鉄塔アース線の掘り込み
(西壁)

第７図　土層断面図

第４章　調査の成果

第１節　縄文・弥生時代の調査

１　調査の概要

縄文または弥生時代と判断できる遺構は確認できなかった。

縄文時代の遺物のほとんどがＩｂ・Ｉｃ層から出土しており、他時期のものと混在している。調査区にわずかに残存していたⅡ層からは１点のみ出土している。

弥生時代の遺物はＩｃ層から極少量出土しており、他時期のものと混在している。なお、古墳時代初頭に比定できる可能性があるものもここで扱う。

２　縄文時代土器（第８図１～13）

形態及び文様により、６類に細分した。１類は後期前半、２類は後期後半、３～６類は晩期に比定できる。

１類（１）

外面に凹線文を施し、内外面に貝殻条痕が残るもの。

２類（２～４・９）

内外面ともにミガキまたは丁寧なナデ調整を行い、器壁が厚手のもの。２・３ともに端部が肥厚する口縁部である。２は３～４条の沈線文を巡らせ､内面に段をもつ。３は肥厚部に凹点文を施し、内面に段をもたない。４は小平底を呈する。

３類（５・６・10）

内外面にナデ調整または板状工具によるナデ調整を行うもの深鉢形土器である。５は端部に突起が付く。

４類（７・８）

内外面ともにミガキ調整を行う浅鉢形土器である。７は屈曲部以下にススが付着する。８は沈線内に赤色顔料が認められる。

５類（11・13）

内外面ともにナデ調整または板状工具によるナデ調整を行う浅鉢形土器である。

６類（12）

外面に編布の圧痕をもち、内面はミガキ調整を行うもの。補修孔が認められる。

３　縄文時代石器（第８図14～16）

縄文時代の石器は石製土堀具、磨製石斧、磨石、剥片が認められた。

石製土堀具（14）

８点確認し、１点図示した。短冊形とラケット形が認められる。石材は頁岩（６点）と安山岩（２点）である。

磨製石斧（15）

３点確認し、１点図示した。全て頁岩製である。15は敲打により調整され、刃部を丁寧に磨いている。基部中央はやや磨滅しており、装着痕と考えられる。

磨石（16）

砂岩製で、敲打痕は認められない。

剥片

黒曜石製で、１点出土した。三船産と推定される。

４　弥生時代遺物（第８図17～19）

弥生時代の遺物は、土器が４点のみ認められた。そのうち、中期のものが２点、終末期～古墳時代初頭のものが２点である。形態により、３類に細分した。

１類（17）

２点確認し、１点図示した。「へ」字状を呈する壺の口縁部で、端部内面にわずかな段を有する。

２類（18）

「く」字状に外反する甕の口縁部である。外面には胴部との境に段が認められる。１点のみ確認した。

３類（19）

甕の脚台で、脚台内面天井部は丸い。脚端部内面に粘土片が付着している。１点のみ確認した。

第２節　古墳時代の調査

１　調査の概要

遺構はⅡ層及びⅢａ層上面において、竪穴建物（SI）が２軒重複して検出された。

遺物は主にＩｂ・Ｉｃ層及び竪穴建物内から出土している。包含層出土遺物は他時期のものと混在している。

２　竪穴建物（SI）１・２号（第９図）

検出　調査区北壁際において、Ⅱ層及びⅢａ層上面で検出した。北半分は調査区外に延びている。検出時の平面形は6.0×4.0mの隅丸方形を呈しており、東側に三角形状の張り出し部をもつ。竪穴西壁の一部は土坑１号によって切られている。

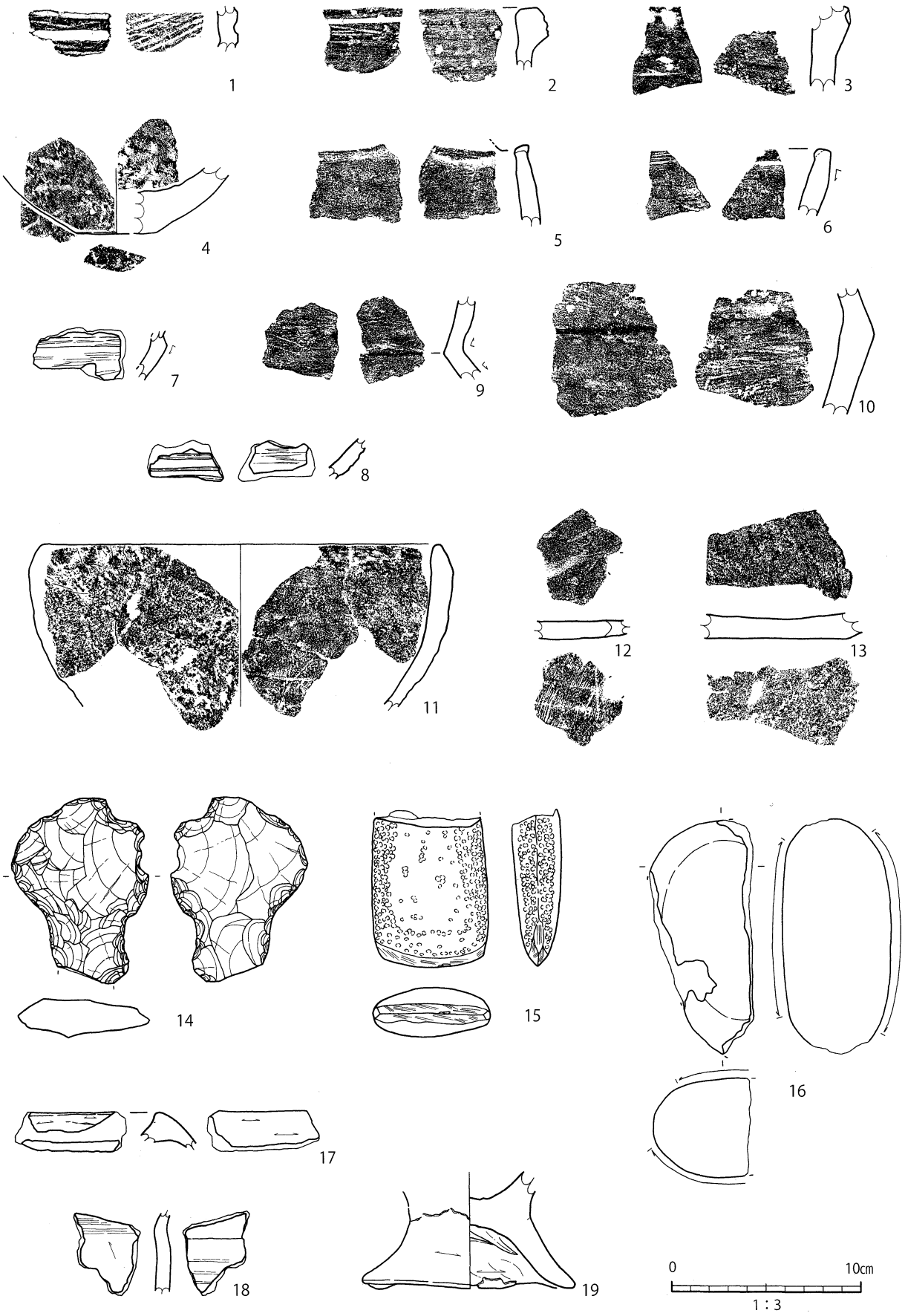
この平面形から２軒の重複が想定できたため、東西を通るベルト（C-C′）を基準に、２本の直行するベルトを竪穴建物の中心を通ると予想される部分（B-B′）と切り合いが予想される部分（A-A′）に設定して掘り下げを行った。

埋土　竪穴埋土は２層（ａ・ｂ）に分けられ、埋土ａは竪穴廃絶後の埋没土、埋土ｂは貼床である。

埋土ａ：黒褐色（10YR2/2）のシルト質土。池田降下軽石やⅢ層土を若干含む。層厚は約10～15cm。

埋土ｂ：黒褐色（10YR2/2）のシルト質土で、締まっている。ブロック状のⅡ・Ⅲ層土を含む。上面が硬化している箇所がある。層厚は約10cm。

硬化面　掘り下げを行うと、竪穴中央付近において、アバタ状の凸凹をもち、移植ゴテでは容易に削れないほど硬化した面を検出した。この硬化面の広がりを把握す



第８図　縄文・弥生時代遺物

るために検出したレベルで精査したが、残存していたのは竪穴の中央付近のみであった。この硬化面を床面（生活面）と捉え、この面とほぼ同じレベルを床面の下場とした（一点破線）。なお、床面は検出面からの深さ約15cmを測るが、西半はほぼ検出面と同じレベルとなる。

竪穴の切り合い　重複した竪穴の切り合い関係は埋土から把握できなかったものの、硬化面の広がりから東側の張り出し部が古い竪穴（SI 1）、その他の部分が新しい竪穴（SI 2）と判断した。

掘方　硬化面の範囲を実測後、貼床の掘り下げを行い、掘方を検出した。掘方の基盤層はⅢ層で、検出面からの深さは20～30cmである。掘方は2段になっており、深い方がSI 1の掘方である。なお、この掘方から推定できる竪穴の規模はともに一辺約5.0mである。

柱穴　柱穴は硬化面を含む床面では確認できず、貼床除去後に掘方床面において4基検出した。柱穴の直径は約40cmで、検出面からの深さは約30cmを測り、基盤層はⅢb層である。埋土は黒褐色(10YR3/2)のシルト質土で、締まりがなく、Ⅱ・Ⅲ層土を含む。位置関係から、P 1・P 2がSI 1に、P 3・P 4がSI 2に伴うと考えられる。なお、竪穴外に柱穴は確認できなかった。

生活施設　炉や焼土・炭化物の広がりは認められなかった。竪穴の検出時に、竪穴の南壁中央付近に径20cm大の被熱した礫が並んでいたことから、カマドの可能性も想定し、特に注意して調査を行った。しかし、焼土や炭化物は認められなかった。

なお、この礫集中箇所と竪穴中央付近のベルトの土壌については、動植物遺存体などの微細遺物の抽出を目的にサンプリングを行っている。ただし、時間的制約があり分析までは至らなかった。

遺物　遺物は大型のものや小片でも特徴的なものは平板測量で取上げ、それ以外は竪穴埋土一括として取上げた。また、貼床出土遺物は別に取り扱った。

遺物は平板取上げを行ったもので564点を数え、一括取上げを含めると1500点以上になる。その全てに目を通し、器種が判断できるものについては分類したが、出土遺物のほとんどは無文の胴部小片であった。

埋土a出土遺物はSI 1・SI 2の分別が困難ため一括して扱うが、そのほとんどはSI 2のものと考えられる。一方、貼床出土遺物、特に硬化面より下位で出土したものはSI 1のものである可能性が高い。

竪穴内出土遺物（第10～12図20～60）

土器、須恵器、石器、鉄製品のほか、縄文土器、そして樹根等の要因でⅠc層から落ち込んだと考えられる中世須恵器・磁器が認められ、41点図示した。

なお、貼床出土遺物は20・38・43、床面直上出土遺物は21・29・30である。

Ⅰc層出土として取り上げた遺物の中で、出土レベルから判断すると竪穴内出土遺物の可能性が考えられるものがあった。ここでは後述する包含層出土遺物として報告するが、遺物分布図（第9図）には参考のために掲載した（「△」ドット）。以下、包含層出土の遺物分類に準じて報告を行う。

甕（第10・11図20～35）

口縁部1類（26）

直行するもの。35点確認し、1点図示した。26は突帯下面に貼付時の指頭痕が残る。粘土帯幅は1.5cm。

口縁部2類

内湾するもの。2点確認したが、図化しなかった。

口縁部3類（23～25）

口縁端部でやや外反するもの。17点確認し、3点図示した。

口縁部4類（20～22・27）

口縁端部外面に粘土紐を貼付し、肥厚させるもの。8点確認し、4点図示した。

20は全形が復元できたもので、内傾する口縁の端部に粘土紐を貼付する。外面の突帯上位には細かい擦痕が残るヨコナデ調整を行う。突帯は刻みがなく、下面に指頭痕がわずかに残る。器面には接合痕が目立ち、粘土帯幅は1.5～2.0cmである。

21は強く内湾する口縁の端部に粘土紐を貼付するもので、一見壺形を呈する。外面はミガキ調整を行うが、接合痕が目立つ。粘土帯幅は1.0～1.5cmである。薄手の作りである（器壁厚0.7～1.0cm）。

22は突帯に太めの刻み（2.0×1.0cm）を施す。突帯下面に指頭痕が残る。粘土帯幅は1.0～2.0cm。

口縁部5類（28）

口縁端部外面に幅広の粘土紐を貼付し、そこに刻みを施すもの。4点確認し、1点図示した。28は「×」字状の刻みを施し、刻目に布目痕がみられる。

底部

全て平底で、器形には張り出しをもつものともたないものがある。

底部1類（33～35）

底面に木葉痕が認められないもの。26点確認し、3点図示した。

底部2類（29～32）

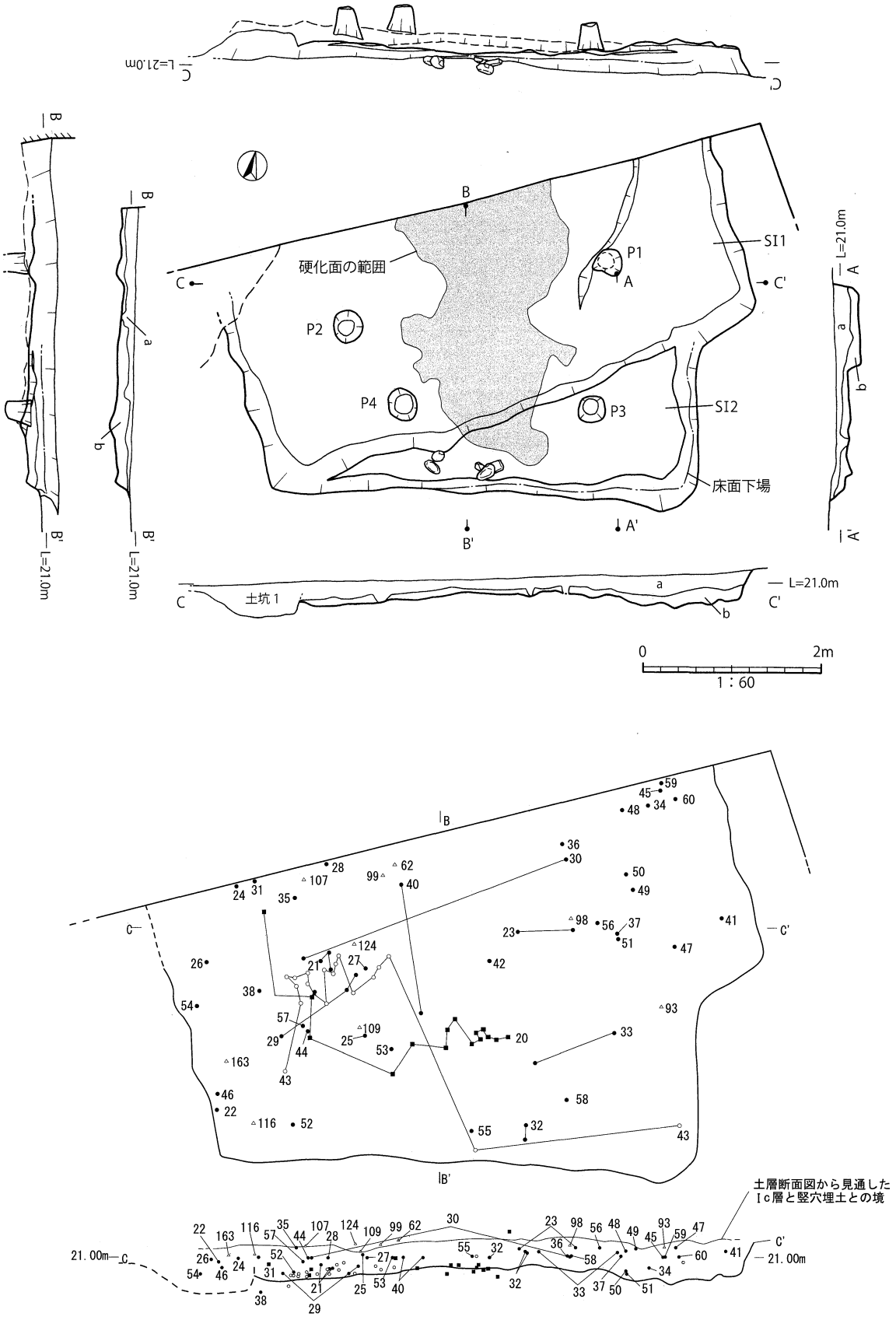
底面に木葉痕が残るもの。15点確認し、4点図示した。葉の細脈が確認できるほど明瞭に残るもの（30～32）とナデ消すものがある。

甑（第11図36・37）

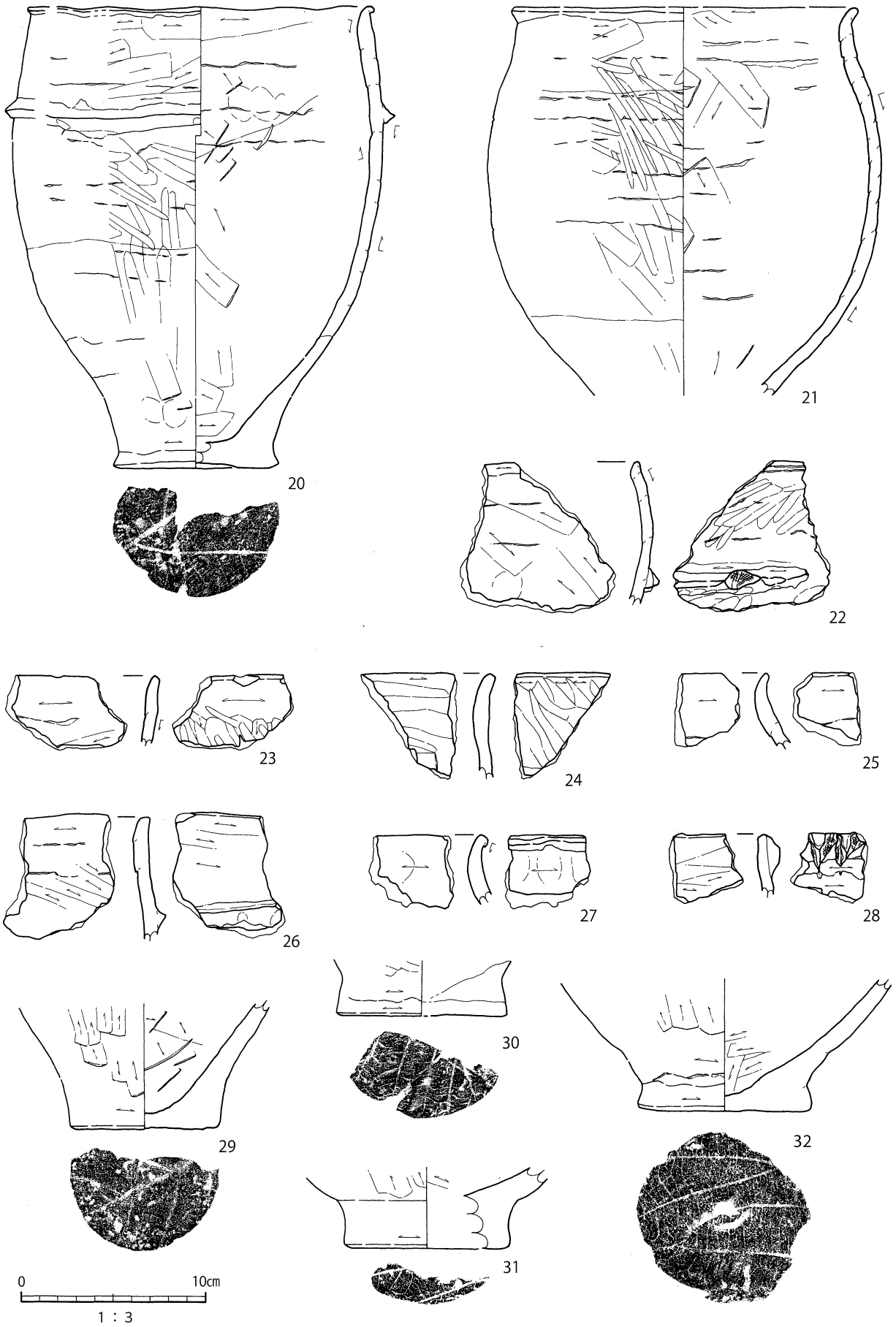
2点確認した。ともに筒抜け形である。

壺（第11図38）

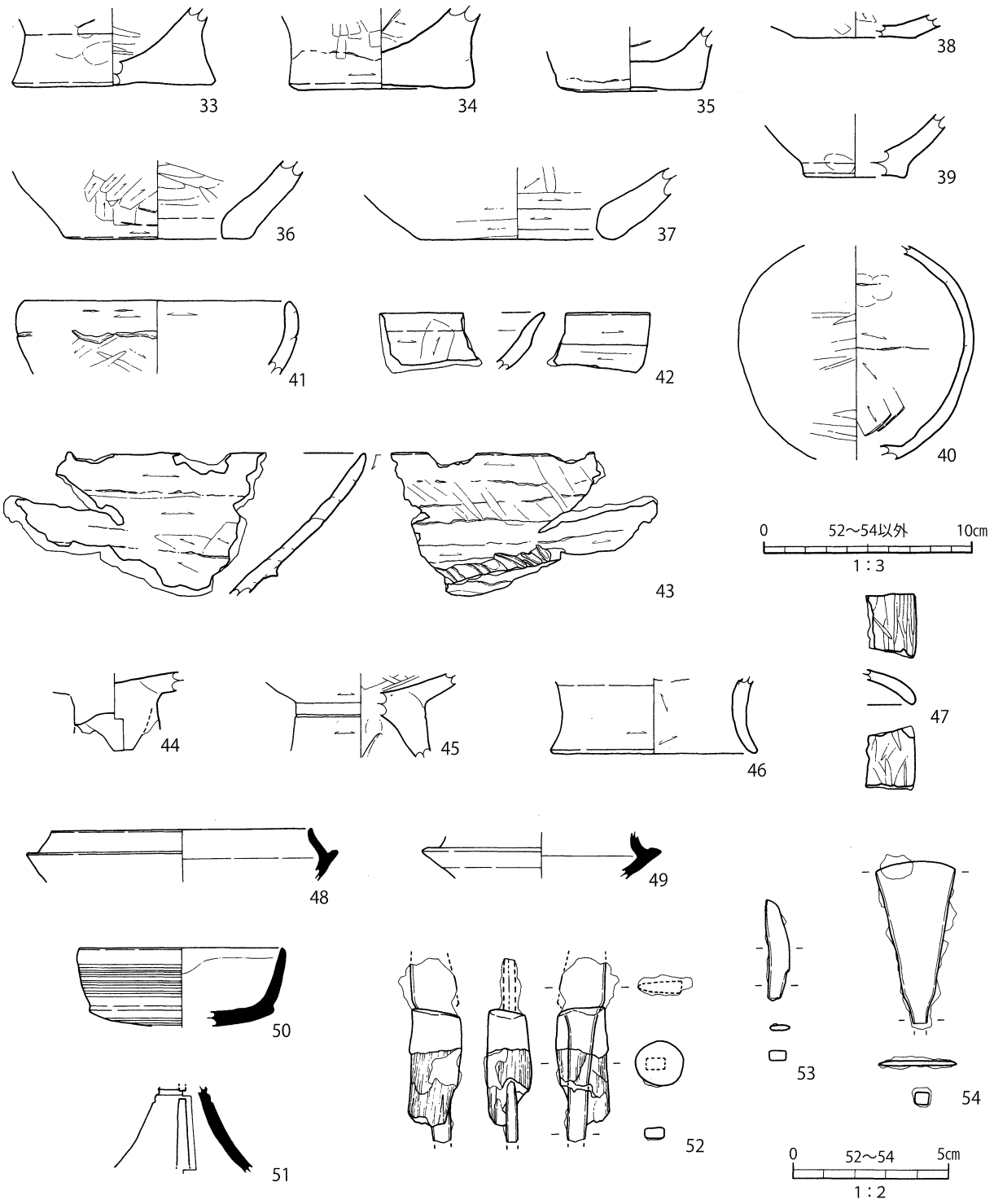
平底を呈するもので、1点確認した。



第９図　竪穴建物跡１・２号平・断面見通し図及び遺物分布図



第10図　竪穴建物跡１・２号出土遺物（１）



第11図　竪穴建物跡１・２号出土遺物（２）

鉢（第11図39）

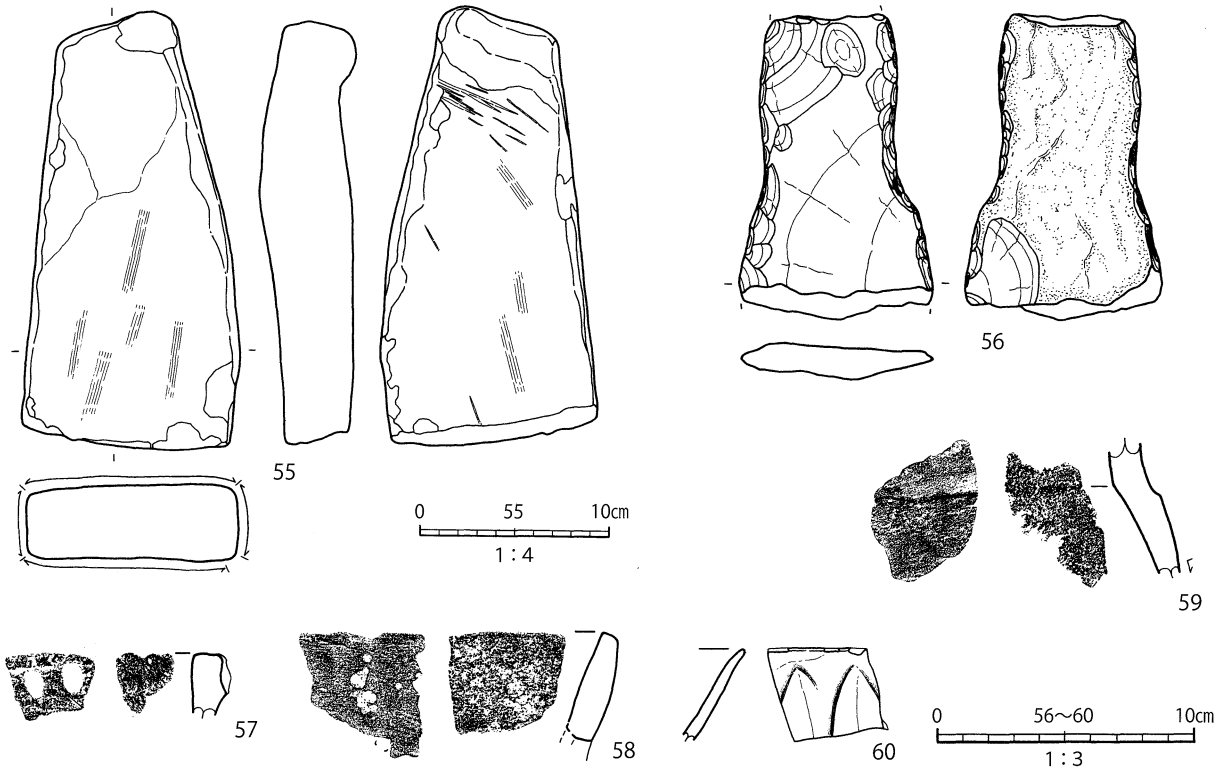
大きさや形態から、鉢と判断した。１点確認した。

坩（第11図40）

球形の胴部をもつもので、１点確認した。

坏（第11図41・42）

12点確認し、２点図示した。なお、高坏坏部の可能性があるものも含んでいる。



第12図　竪穴建物跡１・２号出土遺物（３）

台付鉢（第11図43）

甕の可能性もあるが、器形の傾きから台付鉢と判断した。１点のみ確認した。薄手の作りで器壁厚0.6cm。器面には接合痕が目立ち、粘土帯幅は1.0～1.5cm。

高坏（第11図44）

４点確認し、１点図示した。44は脚部の「充填用円錐塊」である。

脚台（第11図45・46）

高坏または台付鉢の脚台と考えられるものである。19点確認し、２点図示した。

蓋（第11図47）

器形的に坏と類似するが、器高の浅いものを蓋と捉えた。２点確認し、１点図示した。

須恵器（第11図48～51）

15点確認し、４点図示した。48・49は坏身で、48は立ち上がりがやや短く内傾し、端部は丸みをもつ。50は無蓋高坏で、坏部内面に自然釉がかかる。51は長脚二段透しの高坏脚部である。

鉄製品（第11図52～54）

３点確認した。52は刀子で、刃部が欠損している。幅1.5cmの鋲が装着されている。柄は木製である。53は小型刀子の刃部と判断した。長頸鏃の可能性もある。54は方頭鏃で、関は緩やかである。

石器（第12図55・56）

２点確認した。55は鉄器用の砥石である。四面に磨面が認められ、裏面には線状痕が残る。56はラケット形を呈する石製土堀具である。縄文時代の可能性も考えられるが、南九州では古墳時代にも存在していることから、ここでは古墳時代のものとして扱う。

縄文土器２類（第12図57～59）

19点確認し、３点図示した。内外面ともにミガキ調整を行うもの。57は肥厚部に幅広の刻みを施す。

輸入磁器（第12図60）

白磁・青磁の２点確認した。60は蓮弁文を施す龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。白磁は白磁碗Ⅸ類である。

２　包含層出土遺物

本遺跡において、包含層出土遺物の中で最も出土量が多いのは古墳時代のものである。土器（甕・壺・甑・高坏・坏・台付鉢・蓋）と須恵器が認められたものの、出土遺物の多くは無文の胴部片で、器種不明のものである。分類は口縁部・底部・突帯部といった特徴のあるものを中心に進めた。

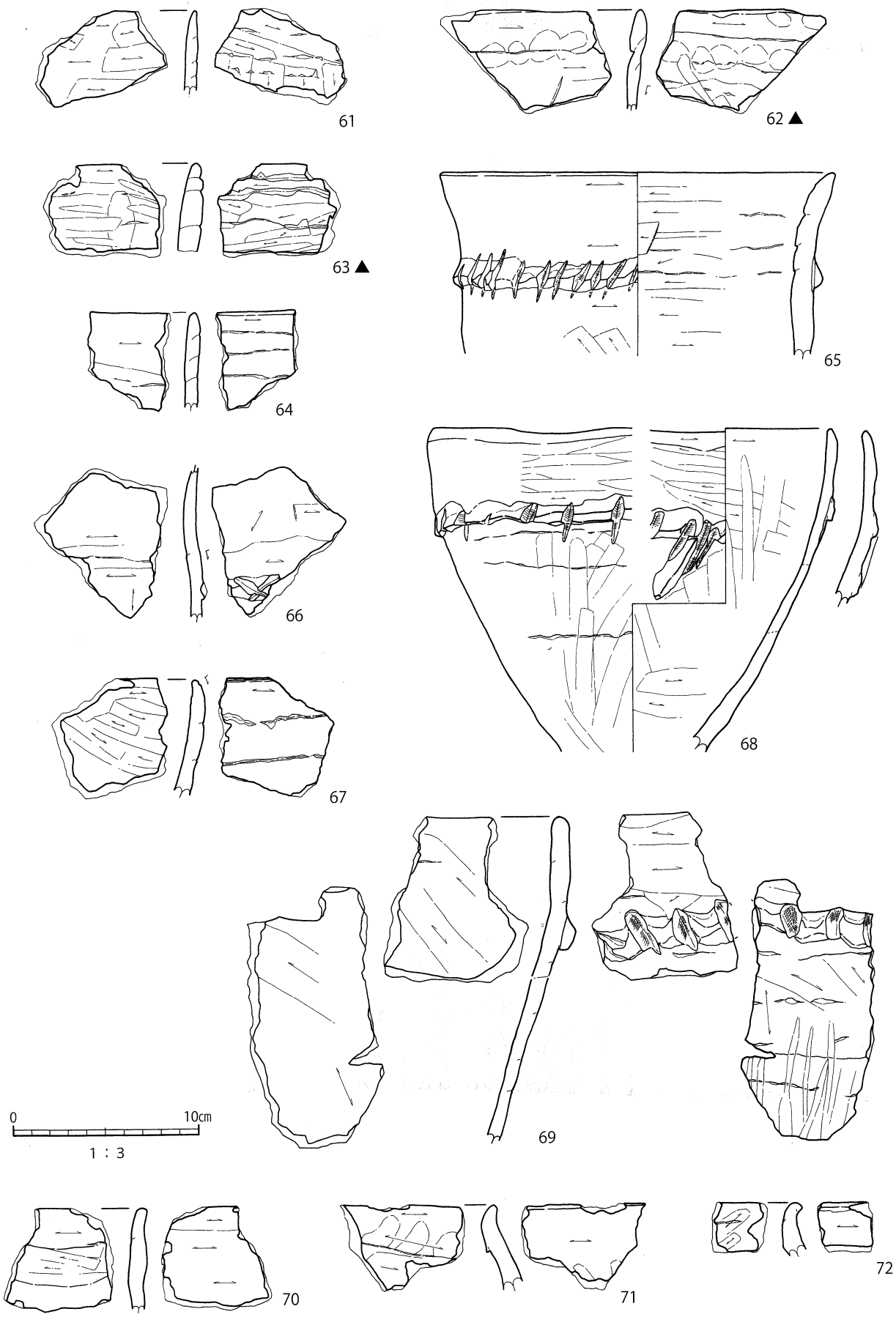
なお、竪穴建物内出土の可能性が考えられる遺物には、報告書番号横に「▲」印を付した。

甕

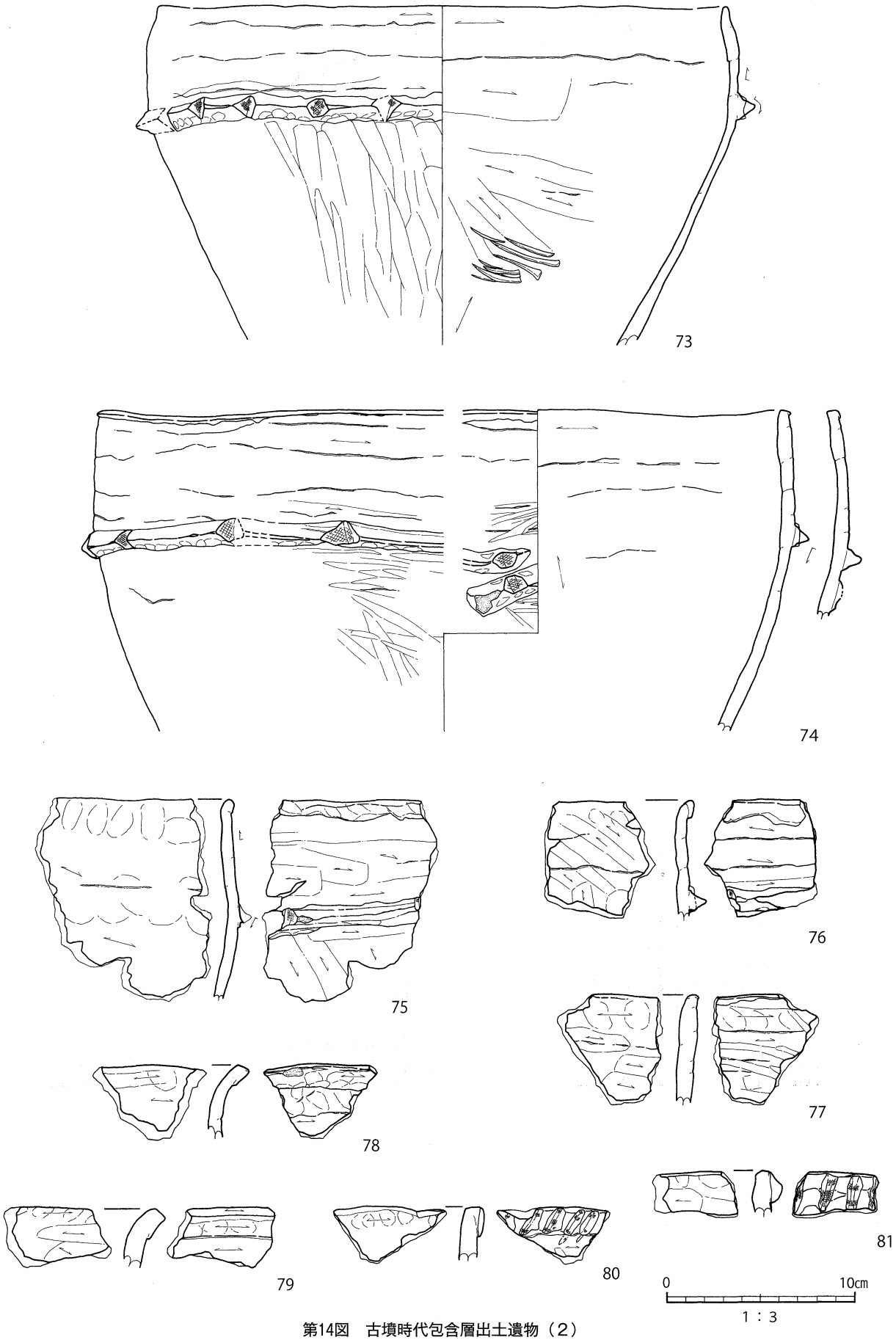
最も出土量が多く、ここでは口縁～胴部と底部に分けて説明する。

甕口縁部（第13・14図61～81）

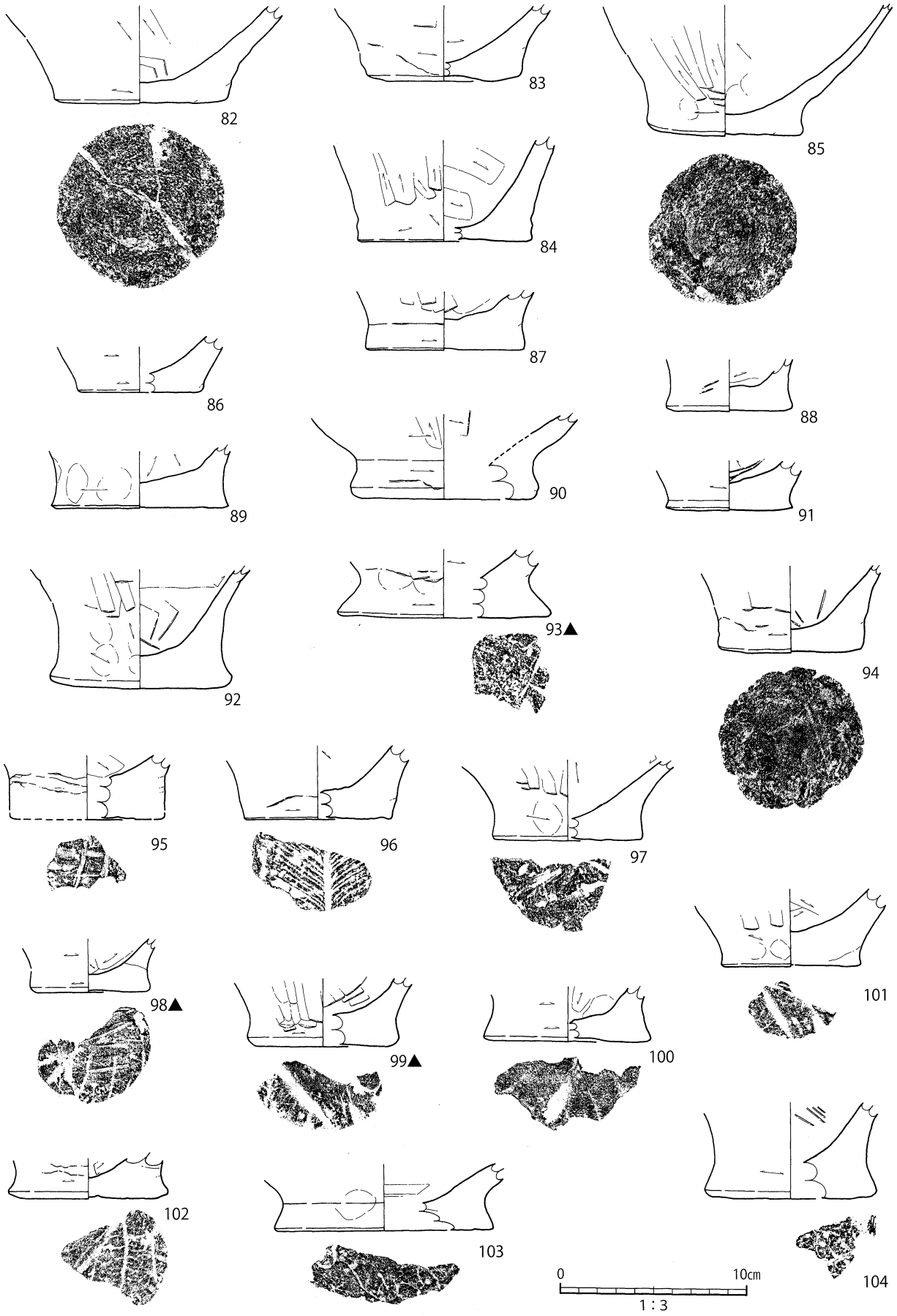
形態により、以下の５類に細分した。なお、甑の口縁部が含まれている可能性がある。



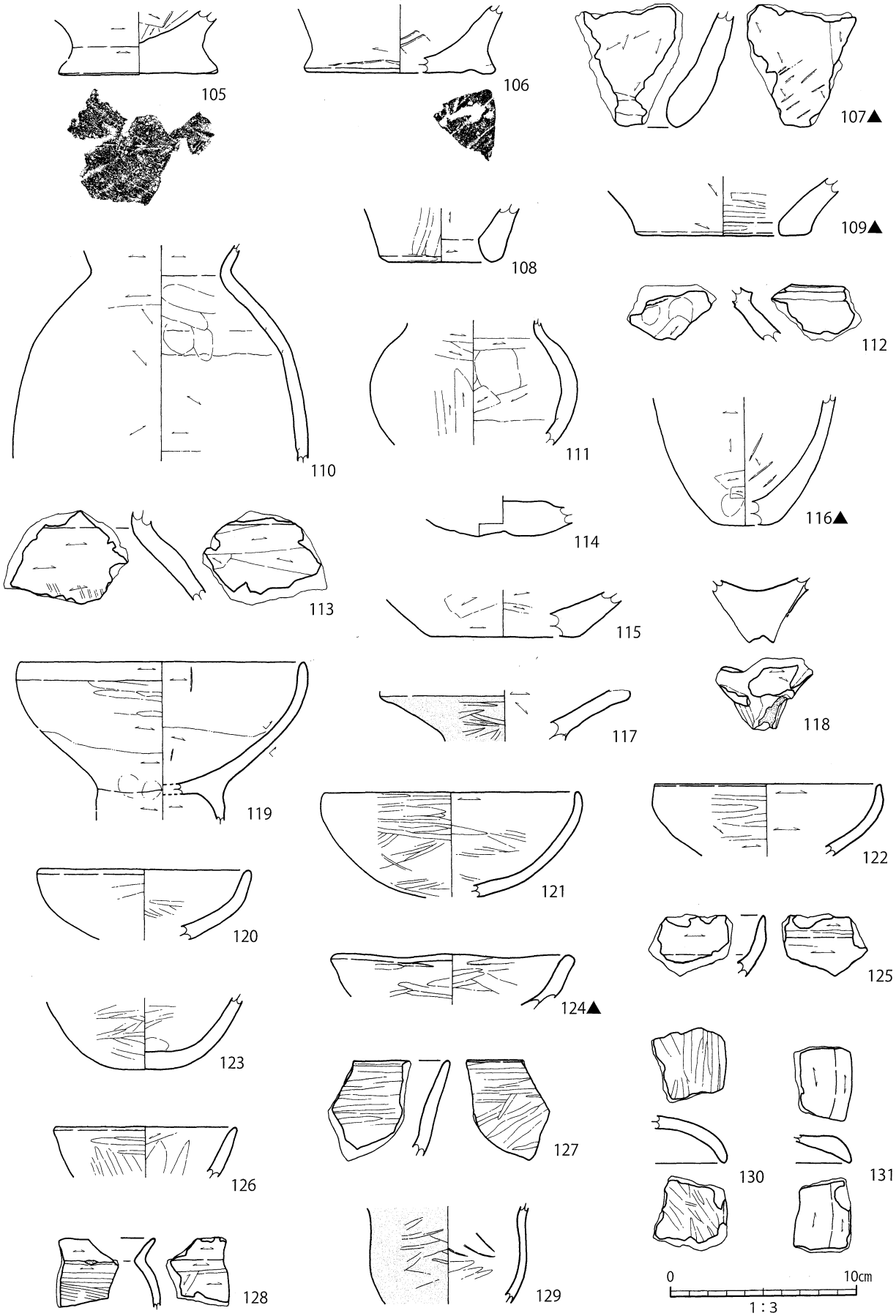
第13図　古墳時代包含層出土遺物（1）



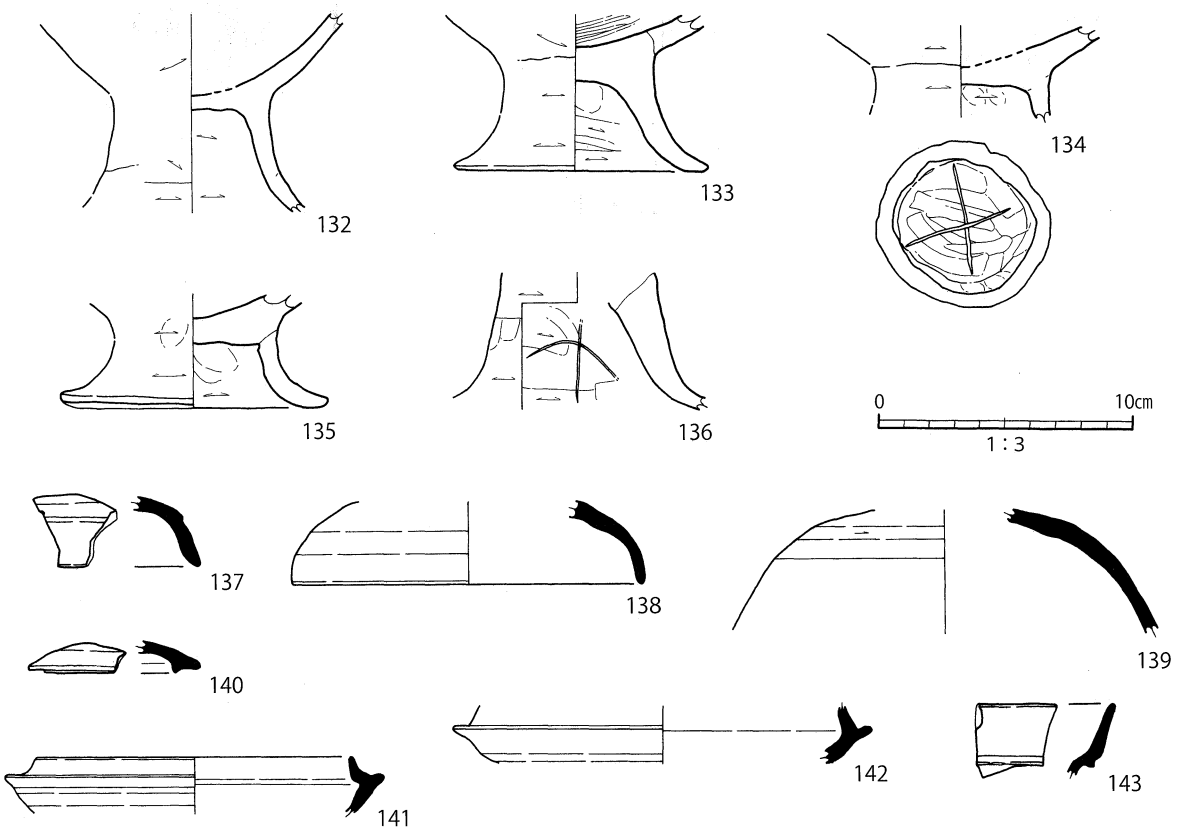
第14図　古墳時代包含層出土遺物（2）



第15図　古墳時代包含層出土遺物（3）



第16図　古墳時代包含層出土遺物（4）



第17図　古墳時代包含層出土遺物（５）

全体的な傾向として、器面に粘土帯接合痕が目立つものが多い。胴部の外面はミガキ調整または丁寧なナデ調整を行うことが多い。突帯に施す刻みには布目痕または縦位の筋状痕が認められる。外面色調の傾向として、橙色系と黄橙色系があり、前者が多い。

１類（61～66）

直行するもの。94点確認し、６点図示した。

61～64は外面に接合痕が目立つもので、63は沈線状を呈する。粘土帯幅は61（1.0cm）、62（1.5cm）、63（0.8～2.0cm）、64（1.0cm）である。65は突帯の刻み間隔が1.0cmで、細長い刻目（2.5×0.5cm）の中に縦位の筋状痕が認められる。粘土帯幅は1.5cm。

２類（67～69）

内湾するもの。10点確認し、３点図示した。

68は突帯の始点と終点の合流点に粘土紐を貼付して垂下状にしている。刻み間隔は2.0cmで、細長い刻目（2.5×0.6cm）の中に縦位の筋状痕が認められる。

69は刻み間隔は2.0cmで、刻目はやや太く（3.0×1.0cm）、布目痕がみられる。なお、粘土帯幅は67（2.0cm）、69（1.8cm）である。

３類（70～73）

口縁端部でやや外反するもの。24点確認し、４点図示した。73は断面三角形の突帯を巡らせるもので、突帯上面のみヨコナデ調整を行うため、下面には指頭痕が残る。刻み間隔は4.0cmで、刻目は太く（1.2×1.0cm）、布目痕がみられる。粘土帯幅は2.0cm。大きさの割には薄手である（器壁厚0.5cm）。

４類（74～79）

口縁端部外面に粘土紐を貼付し、肥厚させるもの。肥厚部が幅広のものもある。28点確認し、６点図示した。74は73と同じく突帯下面に指頭痕が残る。刻み間隔は６～10cmで、太めの刻目（1.5×1.0cm）の中に布目痕がみられる。口縁部外面はヨコナデ調整を行い、細かい筋状の擦痕がみられる。粘土帯幅は1.5cm。大きさの割には薄手である（器壁厚0.8cm）。

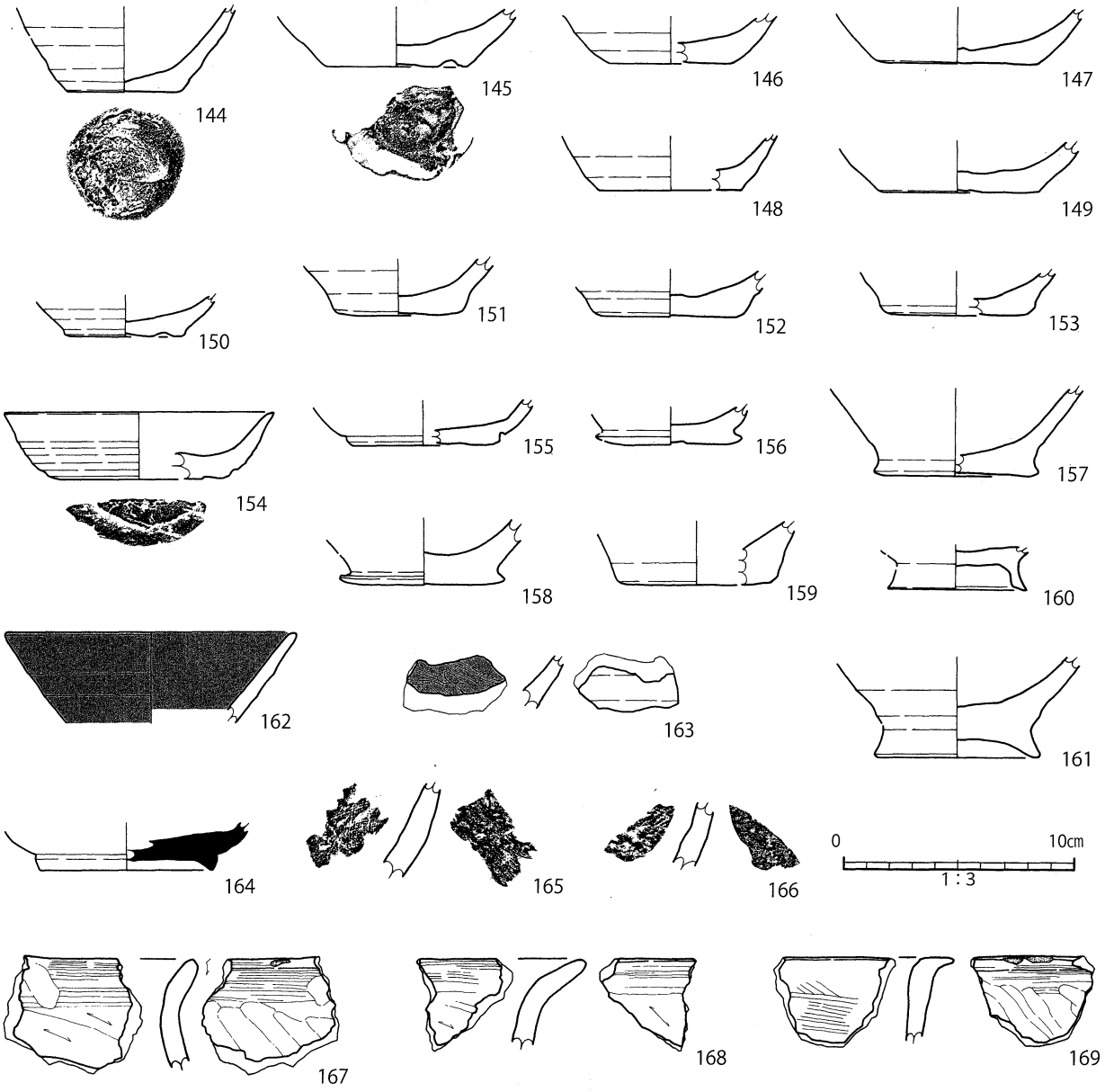
75は刻み間隔7.0cmで、粘土帯幅は1.5cm。76の粘土帯幅は1.5～2.0cm、77は0.7～1.5cmである。

５類（80・81）

口縁端部外面に幅広の粘土紐を貼付し、肥厚させ、そこに刻みを施すもの。２点確認した。80・81ともに刻目の中に布目痕をもつ。

甕底部（第15・16図82～106）

全て平底であり、脚台は認められない。底面の木葉痕の有無により、２類に細分した。器形には張り出しをもつものともたないものがある。外面はタテケズリまたはタテナデ調整を行うものが多い。なお、縄文後期土器の



第18図　古代遺物

底部である可能性も考えられるが、器面調整や成形技法などから古墳時代のものと判断した。

1類（82～92）

底面に木葉痕が認められないもの。82点確認し、11点図示した。82・85は底面に接合痕が環状に残る。

2類（93～106）

底面に木葉痕が残るもの。60点確認し、14点図示した。葉の細脈が確認できるほど明瞭に残るもの（101・102・106）や、ナデ調整により不明瞭なものがある。樹種について、96はオオタニワタリであるが、他は判断できなかった。なお、103は葉の縁に丸味のある鋸歯をもつ。

甑（第16図107～109）

６点確認し、３点図示した。全て筒抜け形である。

壺（第16図110～116）

24点確認し、７点図示した。110・111は無文で、112は頸部に突帯を施す。やや丸みのある平底である。

高坏（第16図117～119）

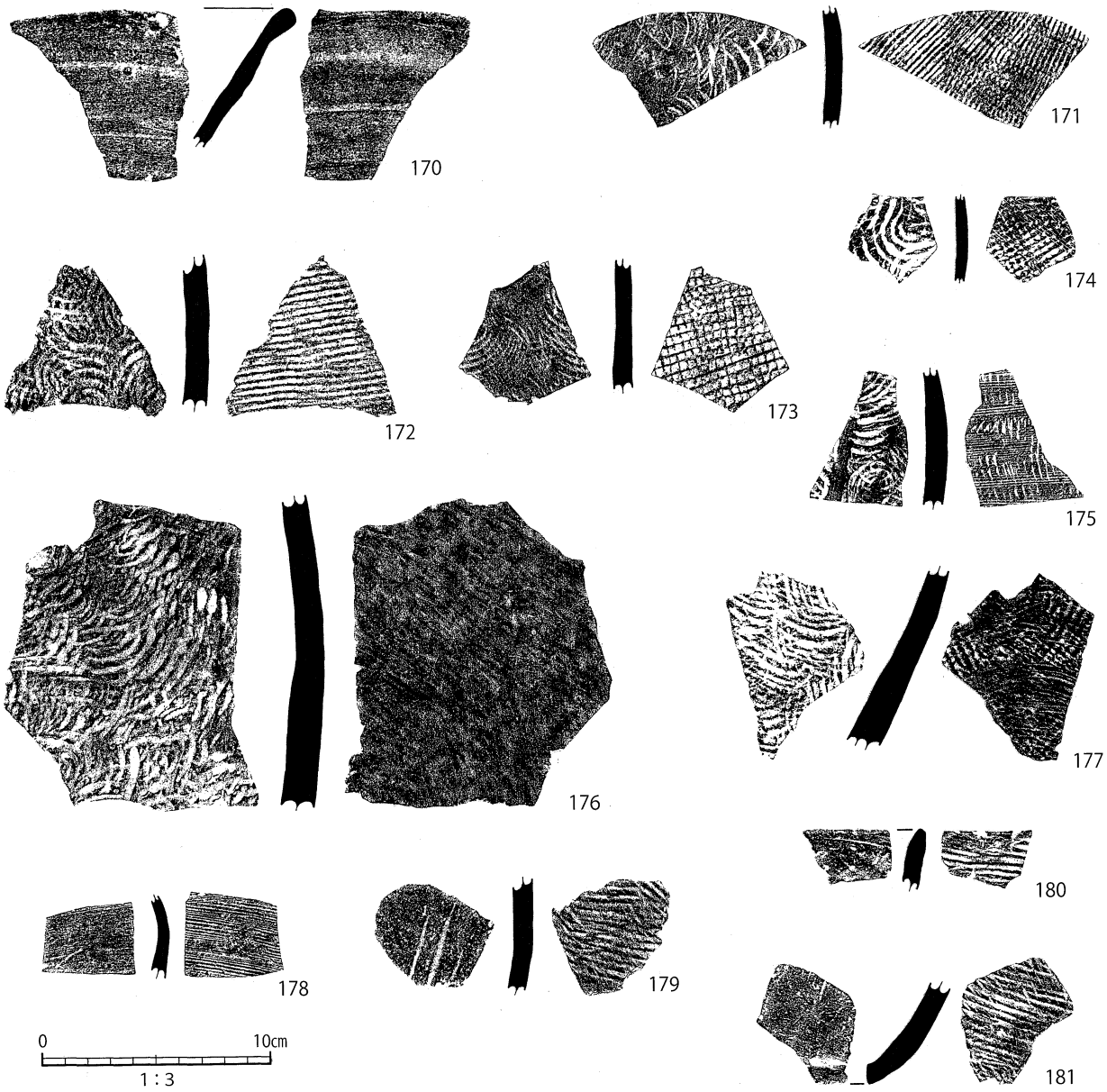
10点確認し、３点図示した。117は接合痕で剥離していることから、屈曲するタイプと考えられる。118は高坏脚部の「充填用円錐塊」である。

坏（第16図120～129）

98点確認し、10点図示した。坏としたが、高坏の坏部の可能性があるものも含んでいる。椀形を呈するものや深めのもの（127・129）、屈曲するもの（128）がある。

蓋（第16図130・131）

７点確認し、２点図示した。器形的に坏と類似するが、



第19図　古墳時代～古代須恵器

器高の浅いものを蓋と捉えた。

脚台（第17図132～136）

高坏または台付鉢の脚部と考えられるものである。50点確認し、５点図示した。134・135は脚台内面に「×」字状の細沈線を施す。

須恵器（第17図137～143）

坏蓋・坏身・はそう等29点確認し、７点図示した。

137～140は坏蓋である。137は口縁部と天井部の境に沈線をもち、口縁端部は内傾する。138は口縁部と天井部に稜はなく、口縁端部を丸く仕上げる。140は口縁端部にかえりをもつ。141・142は坏身で、141は立ち上がりが短い。坏蓋・坏身ともに口径が大きめである。

第３節　古代の調査

１　調査の概要

確実に古代と判断できる遺構は検出できなかった。遺物は主にＩｂ・Ｉｃ層から出土しているが、他時期のものと混在している。土師器（坏・椀・黒色土器・甕）、須恵器、製塩土器が認められた。

２　遺物

土師器坏（第18図144～159）

62点確認し、16点図示した。小片や摩滅しているものが多く、全形が把握できるものはほとんど認められない。底部形態により、以下の３類に細分した。

１類(144～147):底部から丸味をもって立ち上がるもの。

2類（148～155）：底端部をナデることにより、段をもって立ち上がるもの。

3類（156～159）：いわゆる「充実高台」をもつもの。

胎土について、軟質で粉っぽいものと焼き締まって堅緻なものがあり、前者が多い。色調について、灰白～浅黄橙色系が多く、赤褐～橙色系が少ない。

土師器椀（第18図160・161）

８点確認し、２点図示した。高台を有するものを椀として扱った。160は高台端部に面を有し、中央がやや凹み、外端部で接地する。堅緻な胎土である。

黒色土器（第18図162・163）

12点確認し、２点図示した。162は内外面ともに黒色を呈する黒色土器Ｂ類である。内外面ともに摩滅しており、調整は不明である。163は内面が黒色を呈し、ミガキ調整を行う黒色土器Ａ類である。

須恵器（第18図164）

断面三角形状の低い高台が底端部に付く椀である。１点確認した。

製塩土器（第18図165・166）

９点確認し、２点図示した。内面に布痕が認められる。残りが悪く、全て指先ほどの小片である。確認された破片は同一個体の可能性が高い。

土師甕（第18図167～169）

７点確認し、３点図示した。「く」字状に外反するものと端部が「Ｌ」字状に屈曲するものがある。口縁部は短めである。

古墳時代～古代須恵器（第19図170～181）

ここでは古墳～古代に属するが、確実な時期の比定が出来なかった須恵器を一括して扱う。36点確認し、12点図示した。甕または壺と思われる。

外面は平行タタキ・格子目タタキをそのまま残すものやタタキ後にスリケシ調整やカキ目調整を行うものがある。内面は同心円タタキのものと同心円タタキ後スリケシ調整を行うものがある。

179～181は橙色を呈する赤焼きの須恵器で、同一個体の可能性が考えられる。181は器種不明で、天地が逆の可能性もある。

第４節　中世の調査

１　調査の概要

確実に中世と判断できる遺構は検出できなかった。包含層からの出土遺物はＩｂ・Ｉｃ層において主に出土しているが、他時期の遺物と混在している。土師器（杯・皿）、須恵器、瓦質土器、国産陶器、輸入陶磁器、滑石製品、銭貨が認められた。なお、遺物の分類において参考にした文献は第５章に示している。

２　遺物

土師器（第20図182～228）

基本的に底部切り離し技法が糸切りのものを扱う。ただし、小片や摩滅しているものが多く、それらは器形により判断した。なお、隣接する都城盆地では中世においてヘラ切り技法が再出現するとの指摘があることから（桒畑2004）、底部切り離し技法がヘラ切りのものも、器形から中世と考えられるものはここで扱う。

土師器坏（182～197）

31点確認し、16点図示した。口縁から底部まで残存するものは口径の大きなものから掲載し、口縁部が欠損しているものは底径の大きなものから掲載した。

器高は３cm前後となるが、口径は12cm前後（183～185）／11cm前後（186～188）に区分できる。

器形は口縁部が直線的に外傾するものと、内湾気味に立ち上がるものが認められる。

底部外面は糸切り痕を残すものやナデ調整を行うものがあり、この他板状圧痕がみられるもの（190）や筋状の沈線がみられるもの（189）がある。

土師器皿（198～228）

125点確認し、31点図示した。坏同様、口径の大きなものから掲載した。

器高は２cm以下となる。口径は10～6.2cmと幅があり、10cm以上（198）／９cm前後（199～202）／8.5cm前後（203～210）／8.1cm前後（211～217）／7.5cm前後（218～221・223・224）／７cm以下（225～228）の６つに区分できる。

器形は見込みが平坦で厚いものや見込みが極端に凹むもの（199・209・219・220・224）、口縁から見込みまでの深さがとても浅いものなどが認められる。

底部外面は糸切り離し後にナデ調整を行うものやヘラ切り離しのもの（211・212）、板状圧痕がみられるもの（221）がある。また、切り離し後持ち運んだ際に付いたと思われる指頭痕が底外面に残るものもある。

223・227は底外端部に切り離し時にはみ出た粘土が付着している。215・224はススが付着していることから、燈明皿と考えられる。

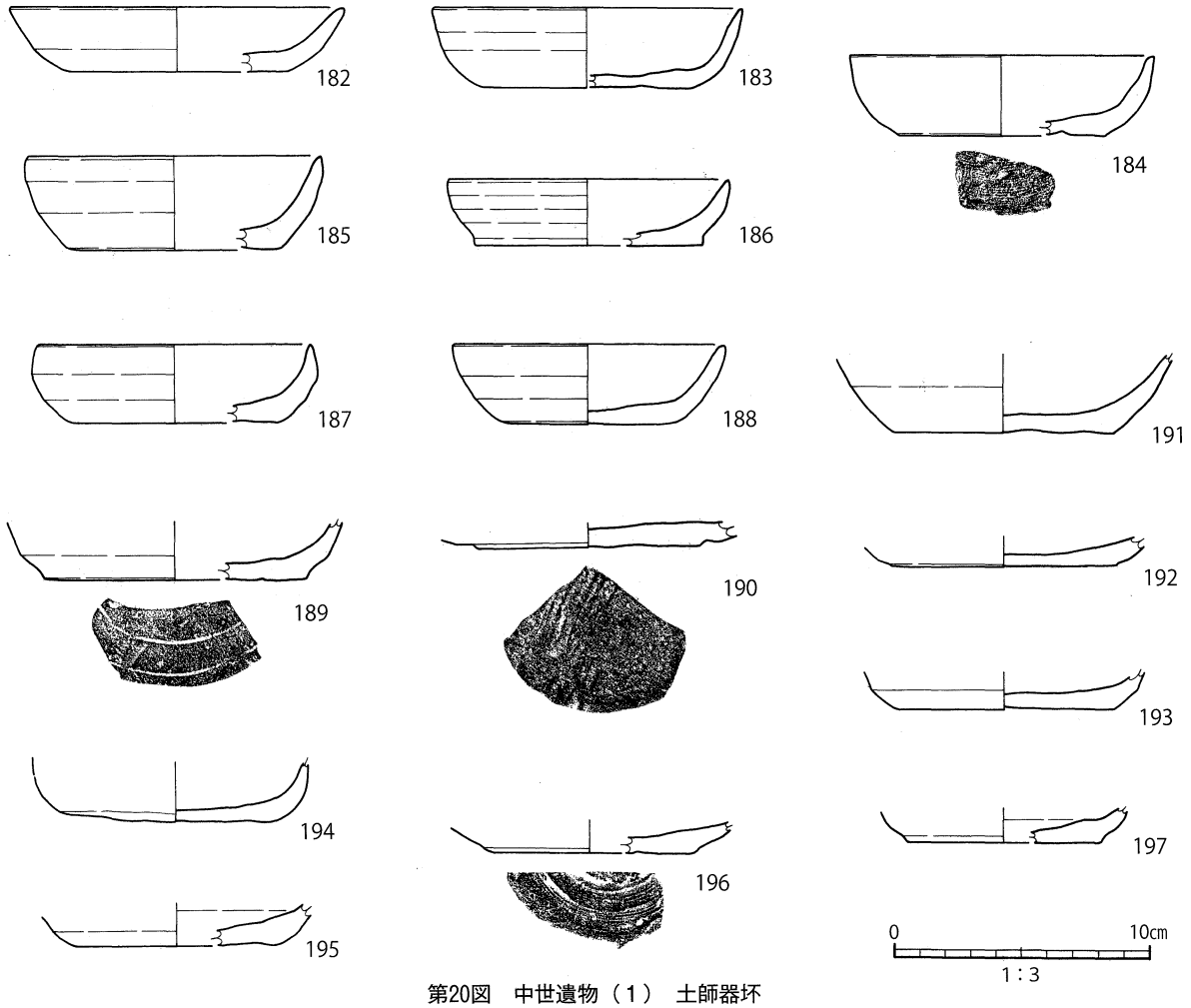
東播系須恵器（第22図229～234）

27点確認し、６点図示した。全て片口鉢であり、口縁部形態により、端部がわずかに肥厚し丸味をもつもの（229～231）と緩やかに外反し、肥厚帯が目立ち端部内面に稜を有するものの２つに分類できる。重ね焼きにより、口縁部縁帯部分のみが灰黒色を呈し、229～231・233は自然釉がかかる。

底部外面は糸切り痕が残り、内面は使用により平滑である（234）。232は瓦質である。

樺番城窯須恵器（第22図235・236・238）

27点確認し、２点図示した。外面は正格子目タタキ痕が残る。内面はハケメ調整が行われ、238は粗いハケメ調整である。235・238は瓦質である。



第20図　中世遺物（１）　土師器坏

須恵器（第22図237・239）

７点確認し、２点図示した。237は格子目タタキ後にナデ調整を行う。239は内外面に自然釉がかかる。

瓦質土器（第22図240）

５点確認し、１点図示した。板状の三足が付く深鉢と考えられるもので、脚が剥離している。

陶器（第22図241）

産地不明の国産陶器で、底部外面に糸切り痕が残る。

備前焼（第22図242・243）

65点確認し、２点図示した。242は甕の口縁部で、細長い玉縁を呈し、外面上下縁には稜線をもつ。頸部は長めである。243は櫛描波状文を施す壺の肩部である。

瀬戸・美濃焼（第22図244）

２点確認し、１点図示した。口縁端部を外に折り曲げた折縁深皿で、器面全体に灰釉がかかる。

常滑焼（第23図245～251）

52点確認し、７点図示した。245～248・251は甕である。口縁部は断面「N」字状を呈するもので、縁帯幅は約３cmである。口縁～肩部には暗黄緑色の自然釉がかかり、248は縞状の斑となっている。内面には接合痕が目立つものが多い。肩・胴部に押印文を施すものもある。249は胴部に沈線を施す三筋文壺である。250は片口鉢で、口縁端部がやや凹む。

なお、251は他に比べて長石類の白色鉱物を多量に含み、異質である。

滑石製品（第23図252）

４点確認し（再加工品含む）、１点図示した。

252は断面不等辺台形を呈する鍔が巡る、滑石製石鍋である。外面にはノミ状工具痕が残る。

輸入陶磁器（第24図253～288）

白磁・青磁・青白磁・青花・陶器が認められた。

白磁碗Ⅳ類（253～255）

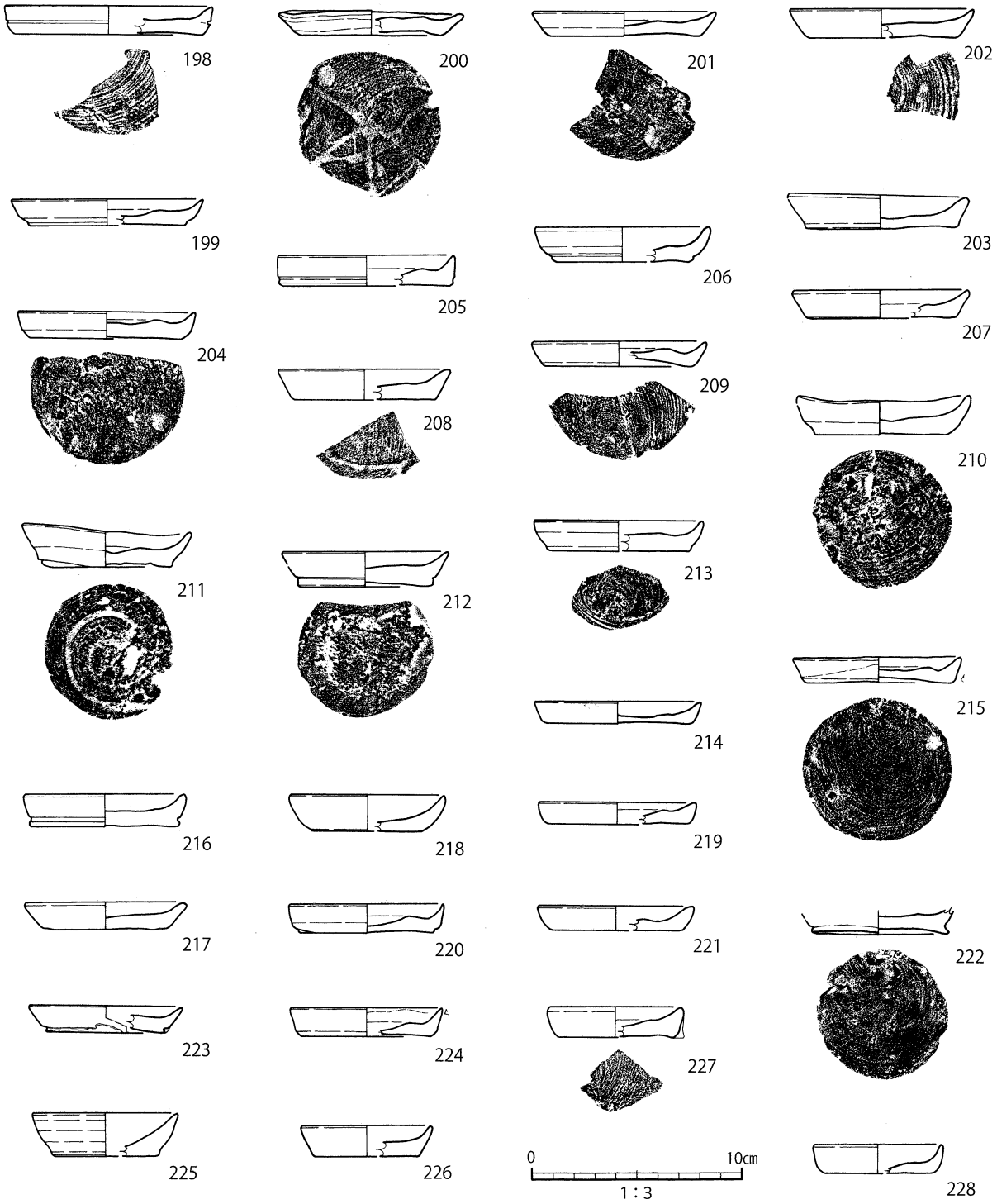
９点確認し、３点図示した。玉縁の口縁部を有するものである。体部外面下半は露胎となる（255）。高台は幅広で、底部の器肉も厚い。

白磁碗Ⅴ－４類（256）

２点確認し、１点図示した。口縁端部が水平にやや外反し、嘴状を呈し、内面に櫛目文を施すものである。

白磁碗Ⅸ類（257～259）

17点確認し、３点図示した。口縁部周辺の釉を掻き取



第21図　中世遺物（２）　土師器皿

り、口禿げとなるものである。口縁端部は外反する。

白磁碗Ⅸ - １類（260）

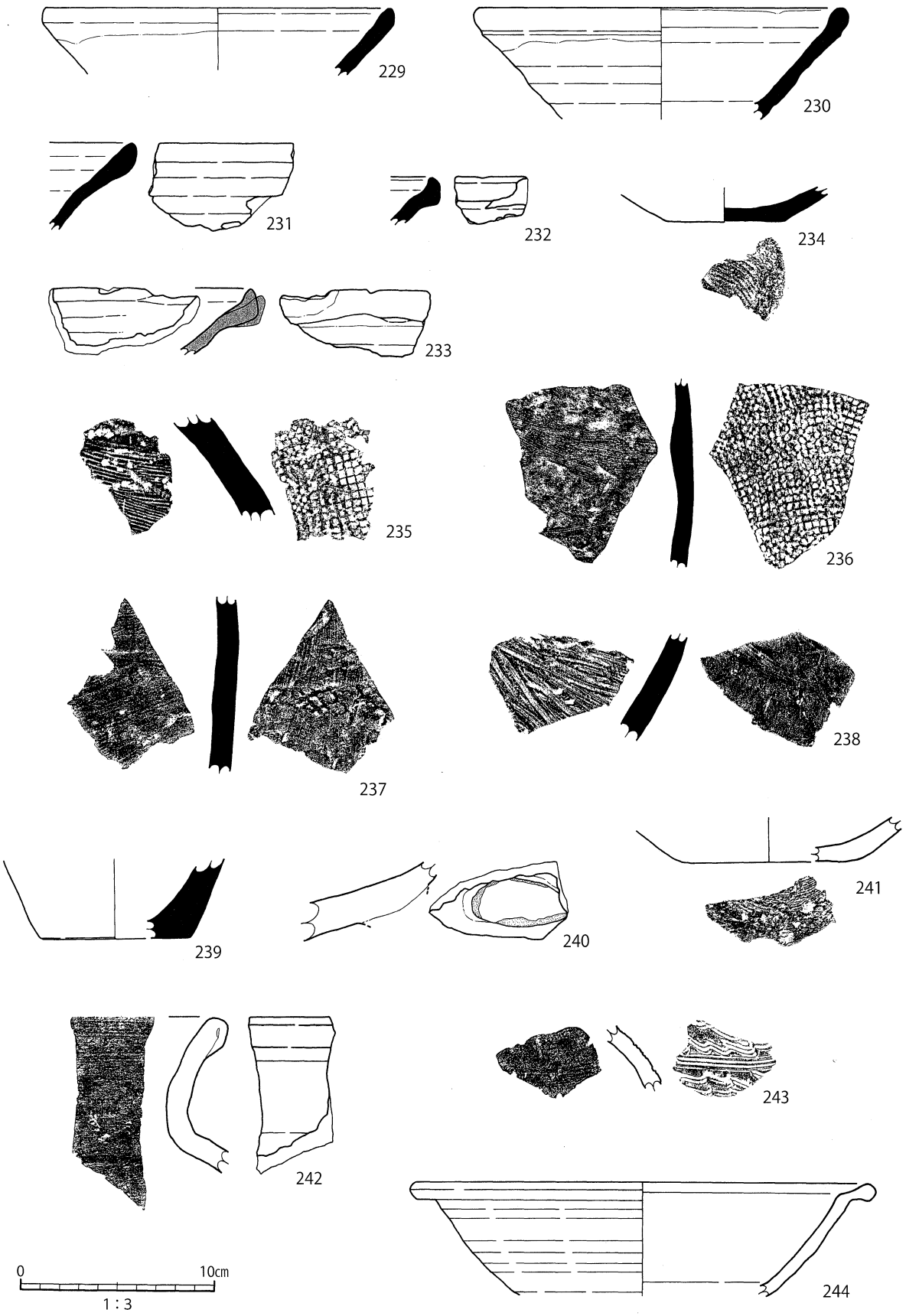
１点確認した。口禿げ碗の底部である。内面見込みに圏線を持ち、その径は高台径より小さく段状となる。高台内面中心が凸状に膨らむ。高台まで全面施釉される。

白磁皿Ⅸ - １類（261・262）

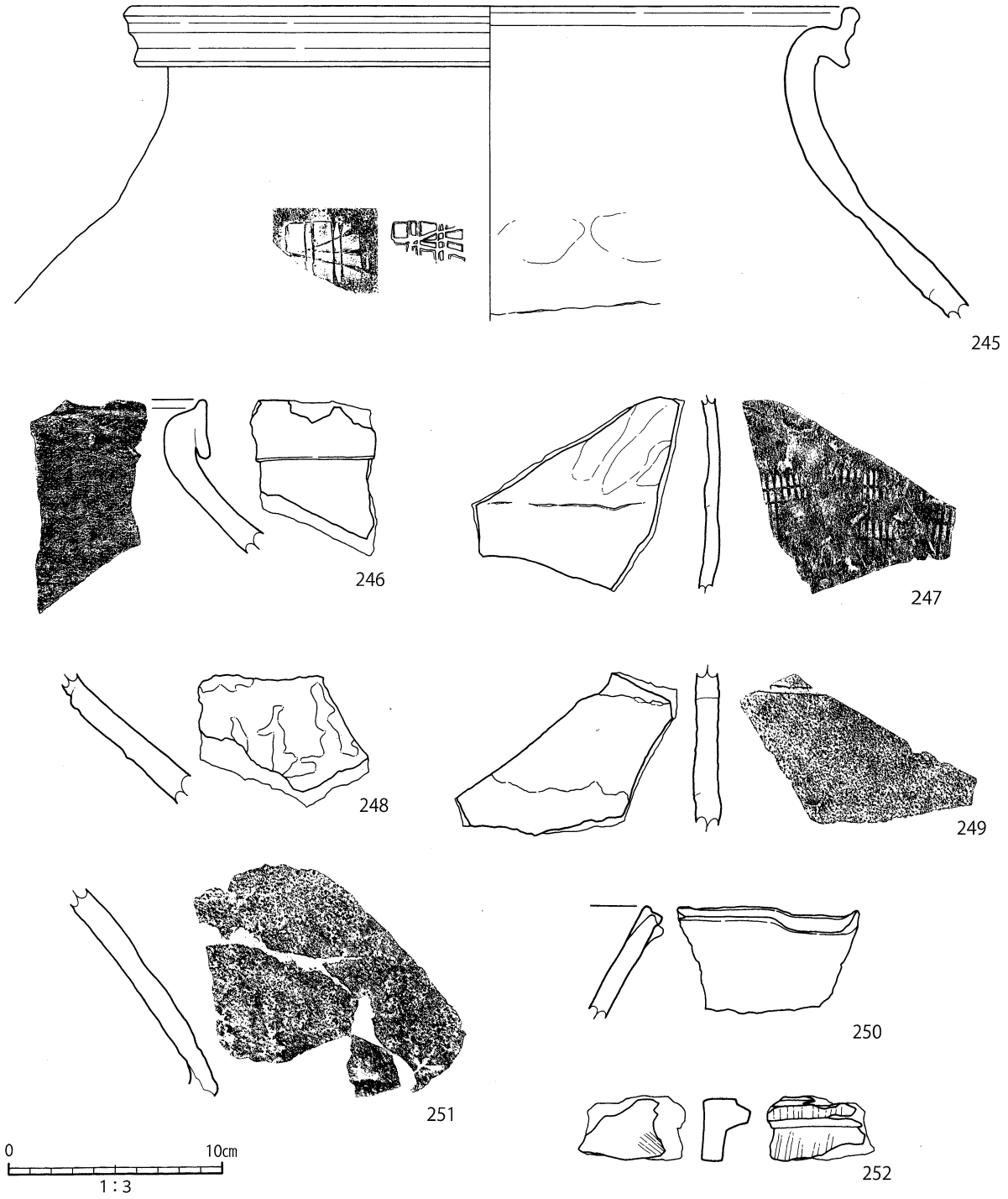
４点確認し、２点図示した。口縁端部が口禿げとなる皿の底部である。平底となり、全面施釉される。

白磁壺（263）

壺類の肩部と考えられる。１点確認した。



第22図　中世遺物（3）　須恵器・瓦質土器・国産陶器



第23図　中世遺物（4）　国産陶器・滑石製品

森田分類D群（264）

小形の皿と思われるもので、焼成は軟質である。1点確認した。

明代白磁（265）

稜花皿と思われ、内面にヘラ書きの文様を施す。

龍泉窯系青磁碗Ⅰ－1類（266）

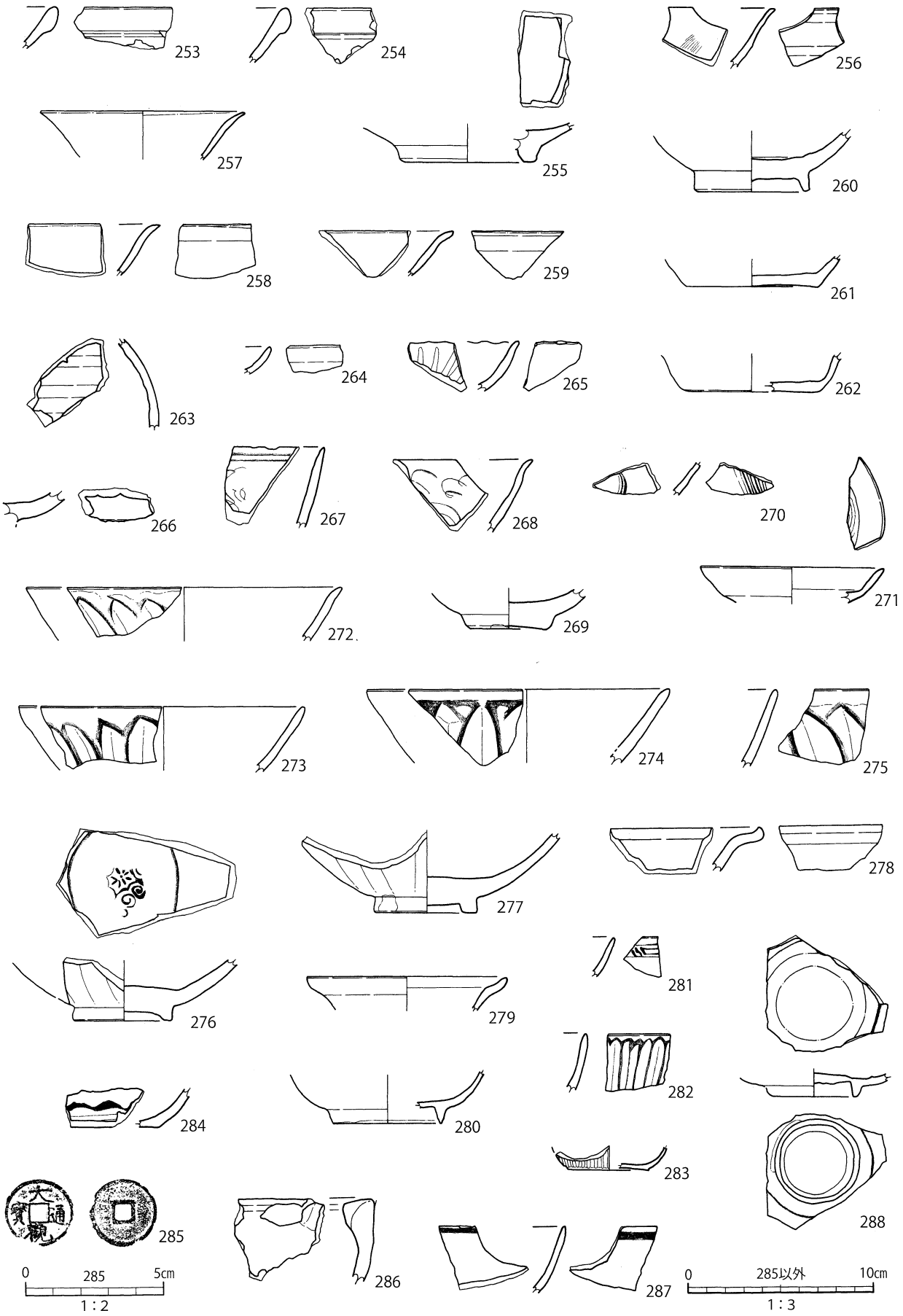
内外面無文のものである。1点確認した。

龍泉窯系青磁碗Ⅰ－4類（267・268）

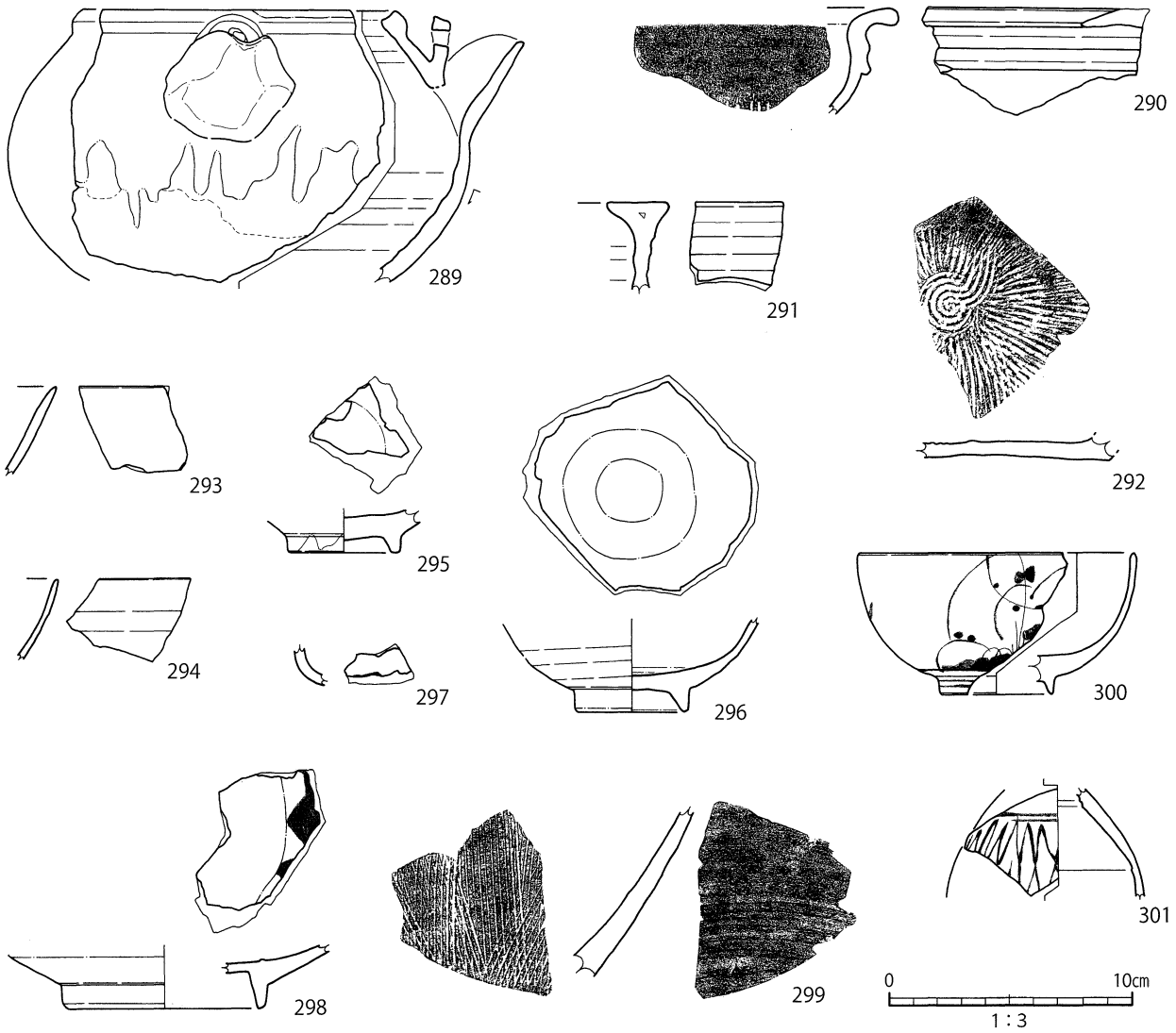
8点確認し、2点図示した。内面に飛雲文または花文をもつものである。口縁端部が外反するものもある。

龍泉窯系青磁碗Ⅰ－6類（270）

1点確認した。体部外面に縦の櫛目を入れ、内面に櫛目文または花文を施す。



第24図　中世遺物（5）　輸入陶磁器・銭貨



第25図　近世遺物

龍泉窯系青磁小碗Ⅰ - 1′a類（269）

１点確認した。内外面ともに無文で、高台内部の刳りを行わず、ベタ底状となる。

龍泉窯系青磁皿Ⅰ - ２類（271）

１点確認した。体部中位で屈曲し、口縁部が直行するもので、端部は丸味をもつ。内面見込みに櫛目文を施す。

龍泉窯系青磁碗Ⅱ類（272 ～277）

55点確認し、６点図示した。体部外面に蓮弁文を施すものである。口縁端部が直行するもの（273 ～275）とやや外反するもの（272）がある。高台は太い断面四角形となり、底部は肉厚である。高台畳付～内面は露胎となる。

272 ～275・277は弁の中心に稜を成すことからｂ類に、276は内面見込みに幾何学花文を施すことからｃ類に比定される。

龍泉窯系青磁坏Ⅲ - ２類（279・280）

２点確認した。体部下位は丸味を持ち、内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反し、上端は平坦面をなる。高台断面は細く尖り気味で、端部付近の釉が掻き取られる。

龍泉窯系青磁坏Ⅲ - ３a類（278）

２点確認した。端部が横に長く屈折し、さらに端部をつまみ上げるもの。

龍泉窯系青磁碗上田Ｃ類（281）

口縁部外面に雷文帯を有するもの。１点確認した。

龍泉窯系青磁碗上田Ｂ - Ⅳ類（282）

２点確認し、１点図示した。ヘラ先による細線の線描連弁文をもつもの。

青白磁合子（283）

型造りによる合子身である。側面に菊座状の文様を浮き出すもので、露胎となる。１点確認した。

陶器盤１類（284）

黄釉盤の底部で、外面は露胎となり、内面見込みには

鉄絵が施される。１点のみ確認した。

陶器（285）

内面が肥厚する口縁部で、注口が認められる。内外面ともに露胎となる。盤または鉢の口縁部と思われる。１点確認した。

漳州窯系青花（287・288）

９点確認し、２点図示した。288は見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、高台脇～畳付に砂粒が付着している。

銭貨（第24図285）

１点確認した。285は初鋳1107年（北宋）の「大観通寶」である。

第５節　近世の調査

１　調査の概要

明確に近世と判断できる遺構は検出できなかった。遺物はＩｂ・Ｉｃ層から出土しており、特にＩｂ層が多い。その多くが薩摩焼陶磁器・肥前系陶磁器である。

２　遺物

薩摩焼苗代川系陶器（第25図289～292）

甕・鉢・擂鉢・植木鉢・土瓶・土瓶蓋・山茶家など、34点確認し、４点図示した。

289は山茶家で、胴部下半にススが付着する。鉄釉が胴部下位までかかる。290・292は擂鉢で、290は口縁部を外側に折り曲げて肥厚させ、２条の低い突帯を巡らせる。291は「Ｔ」字状を呈する甕の口縁部である。

薩摩焼山元窯陶器（第25図293・294）

13点確認し、２点図示した。全て碗で、飴釉と鉄砂釉が認められる。

薩摩焼加治木・姶良系陶器（第25図295・296）

２点確認した。295は白化粧土に透明釉がかかるもので、見込みは露胎する。296は高台外面まで施釉され、見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。

肥前系陶器（第25図297～299）

10点確認し、３点図示した。297は唐津焼の徳利と考えられ、藁灰釉がかかる。298は鉢で、白化粧土に透明釉がかかり、見込みは露胎する。299は唐津焼の擂鉢である。

肥前染付（第25図300・301）

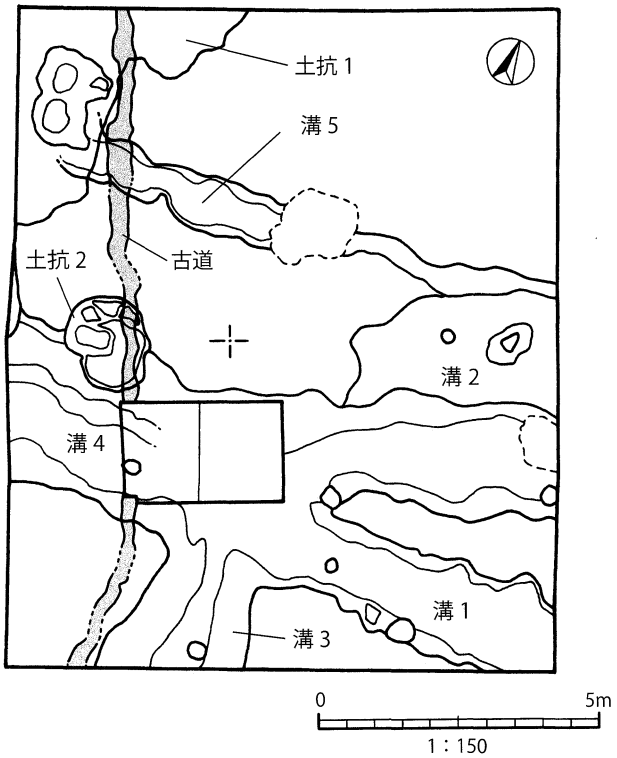
15点確認し、２点図示した。301は一重編目文が施される徳利である。

第６節　近代以降・時期不定の調査

１　調査の概要

ここでは近代以降及び明確に時期が判断できなかった遺構・遺物の調査成果を示す。近代以降と判断できる遺構として、古道が検出された。遺物は、主にＩｂ層から磁器や太平洋戦争時の銃弾が出土している。

確実な時期が判断できなかった遺構として、溝状遺構



第26図　時期不定遺構配置図

(SD)、土坑（SK)、ピットが検出された（第26図)。遺物はＩｂ・Ｉｃ層から出土している。

２　遺構

古道（第26図）

Ｉｂ層上面において、南北方向に延びる硬化した面を検出した。Ｉｂ層が硬化しており、硬化部は幅30～50cm、厚さ約５cmを測る。なお、南側ほど硬化が弱い。硬化面直上の海抜高は約21.2mである。

溝状遺構（SD）１～５号（第27図）

Ｉｃ層を掘り下げた後、Ⅲａ層上面において検出した。１～５号として報告しているが、それぞれ切り合い関係は認められず、埋土も同じであるため、同一の溝と考えられる。枝分かれした箇所に便宜上与えた番号である。

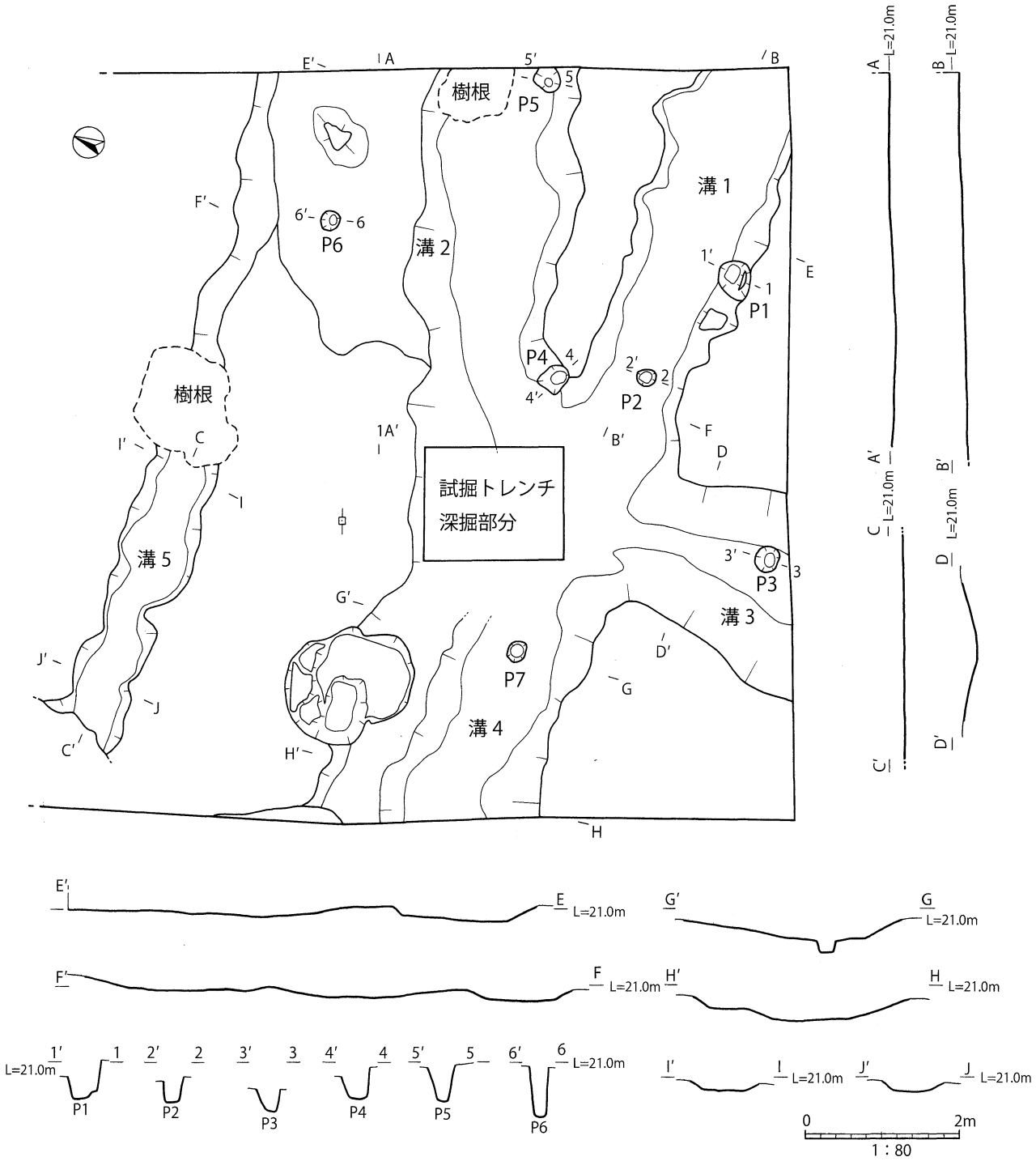
東西方向に延びており、SD３のみ南へ延びる。また西に向かって緩やかに傾斜している。幅はSD２が最も長く、約4.6mを測り、SD１は約1.6m、SD３は約2.0m、SD４は約2.6m、SD５は約1.0mとなる。検出面からの深さは、0.1～0.3mを測る。底面はⅢｂ層（一部西側はⅢａ層）で、硬化面は認められなかった。

溝状遺構内遺物（第29・30図302～349）

遺構検出面より下位のレベルから出土した遺物について溝状遺構内出土遺物として扱った。遺物組成はＩｃ層出土遺物の組成と違いはない。また、Ｉｂ・Ｉｃ層出土遺物と接合する。

SD１出土遺物（302～310）

縄文土器・古墳時代土器・須恵器、古代～中世土師器、



第27図　溝状遺構１～５号及びピット平・断面図

瓦質土器、滑石製品、鉄製品、軽石、礫等51点認められ、９点図示した。

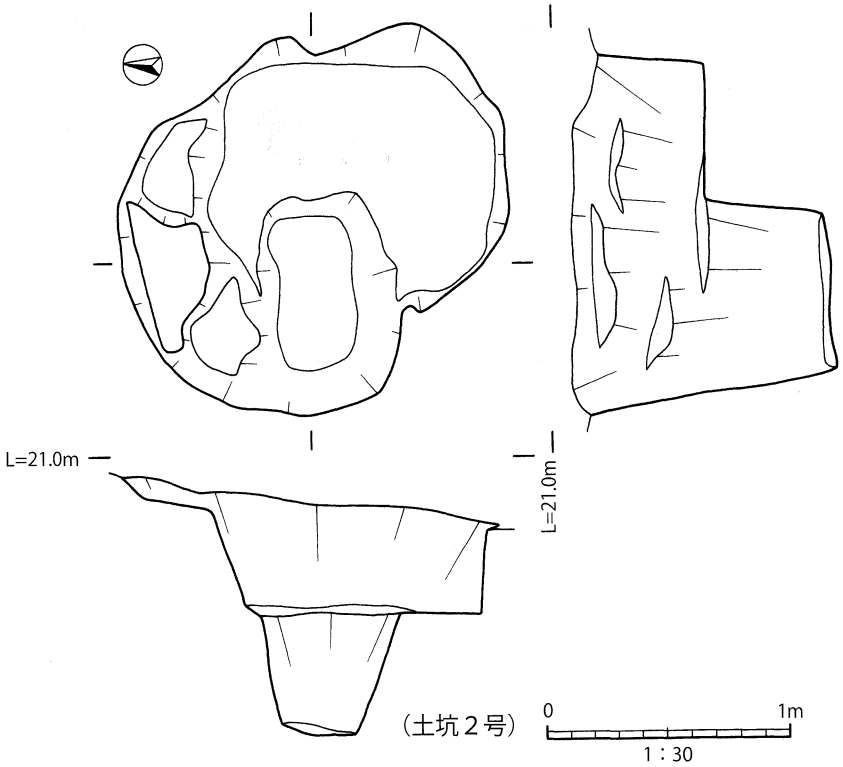
302は縄文土器３類。303～305は古墳時代土器で、304は底面に木葉痕が残る。307は古代土師器坏、308は中世土師器椀。309・310は釘である。

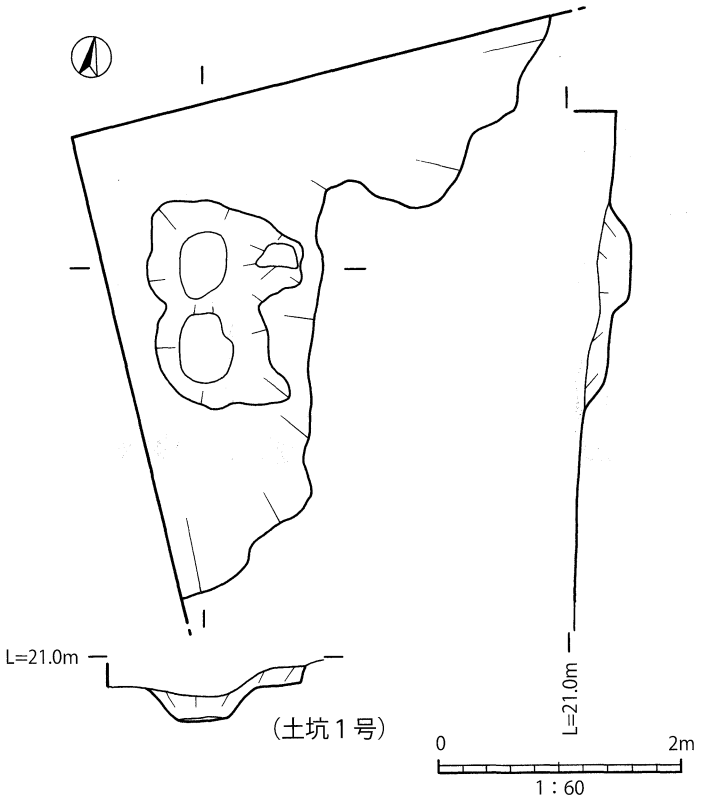
SD ２出土遺物（311～320）

古墳時代土器・須恵器、古代～中世土師器坏、中世東播系須恵器・備前焼、中世青磁・白磁等が45点認められ、10点図示した。311～315は古墳時代土器で、311～313は甕、314は坏、315は高坏（台付鉢）である。316は古代土師器坏。317は中世土師器皿で、底面に指頭痕残る。318は東播系須恵器の片口鉢の底部で、内面は使用により平滑である。319は口禿げの白磁皿Ⅸ類。320は備前焼の擂鉢で、スリメは９条/2.5cmである。

SD ３出土遺物（321～327）

縄文土器、古墳時代土器・須恵器、中世土師器・常滑焼・





第28図　土坑１・２号平・断面図

備前焼・白磁等24点認められ、７点図示した。

321は縄文土器３類。322・323・326は古墳時代甕、325は高坏または台付鉢である。326は外面に成形時の粘土貼付痕が、底面に接合痕が環状に残る。324は中世土師器坏、327は備前焼の三筋文壺である。

SD ４出土遺物（328 ～342）

縄文土器、古墳時代土器・須恵器、古代～中世土師器、製塩土器、中世須恵器・青磁・白磁等79点認められ、15点図示した。328・329は縄文土器２類で、329は内面に段をもつ。330 ～333は古墳時代土器で、330・331は甕、332は坏である。333は器種不明だが、胎土に頁岩等の小礫を含む。334・335は古墳時代須恵器で、334は立ち上がりが内傾し、端部が丸い坏身である。

336 ～338は古代土師器椀で、堅緻な胎土である。339 ～342は古代土師器坏で、339・340は「充実高台」をもつもの。341は堅緻な胎土で、342は赤褐～橙色系の色調を呈する。

SD ５出土遺物（343 ～349）

古墳時代土器・須恵器、古代～中世土師器坏、墨書土器、中世常滑焼・白磁、鉄製品、礫等33点認められ、７点図示した。343・344は古墳時代須恵器の坏身で、343は立ち上がりが短く内傾し、端部が丸い。345は古代土師器坏、347は墨書土器である。346は口禿げの白磁皿Ⅸ類。348は中世土師器皿で、底面に指頭痕残る。349は常滑焼甕で、断面「N」字状を呈する口縁部である。縁帯幅は約３㎝で、２条の凹線が巡る。縁帯と内面に粘土を貼付した痕跡があり、焼成前に入ったひび割れを補修した痕跡と考えられる。

土坑（SK）２号（第28図）

溝状遺構４号の埋土を掘り下げた後、その底面で検出した。埋土

は黒褐色（10YR3/1）のシルト質土で、締まりがなくやわらかい。Ⅲ～Ⅵ層土が若干混る。溝埋土との判別は困難であった。埋土中にⅡ層土を含まないことから、溝によりⅡ層が削平された後形成されたと考えられる。

平面形は1.7×1.5mの楕円形で、西側には0.9m×0.6mの楕円形の掘り込みがあり、検出面からの深さは1.1mを測る。基盤層はⅥ層である。

土坑２号内出土遺物（第30図350～355）

古墳時代土器・須恵器、古代土師器坏・椀、黒色土器Ｂ類、製塩土器、赤化礫など23点認められ、６点図示した。350・354・355は古墳時代のもので、350は甕の口縁部、354は口縁端部内面に内傾する段をもつ須恵器の坏蓋である。351～353は古代のもので、351は土師器坏、352は土師器椀、353は製塩土器である。

ピット１～７号（第27図）

溝状遺構の埋土を掘り下げた後、溝の底面で検出した。埋土は黒褐色（10YR3/1）のシルト質土で、締まりがなく、Ⅲ層土がわずかに混る。埋土にⅡ層土を含まないことから、溝によりⅡ層が削平された後形成されたと考えられる。基盤層は全てⅢｂ層である。

ピット内出土遺物（第30図356～358）

357は古代の土師器坏で、色調は赤褐～橙色系である。358は古墳時代の坏で、底面に細沈線が施される。

土坑（SK）１号

Ⅱ層上面において検出したが、Ⅰｂ層を掘り下げる過程で径５～20cm大の円礫が集中するなど、周囲に比べて異質であった。土層断面からⅠｂ層を掘り込んで形成されていることが看取された。埋土掘り下げ時に、異臭があった。調査区外に広がっているために全形は不明だが、残存部は4.0×3.7mの不定形である。中央には1.7×1.3mの掘り込みがあり、検出面からの深さは0.5mを測り、基盤層はⅡ層である。なお、土層断面の検討結果から、北東側と南側はほぼ床面で検出したことが分かった。

埋土は以下の４つに細分できる。**埋土①**：褐灰色（10YR3/1）の砂質土で、締まりがない。Ⅰｂ層と判別が難しい。**埋土②**：径５～20cm大の円礫の集中箇所。**埋土③**：褐灰～黒褐色（10YR4/1～3/1）のやや砂質を帯びたシルト質土。埋土①とⅡ層土が混在した感じである。**埋土④**：灰黄褐色（10YR4/2）のやや砂質を帯びたシルト質土で、かなり締まっている。Ⅱ層土や黄橙色を呈するブロック状の土を含む。

土坑１号内出土遺物（第31～33図359～378）

古墳時代土器・須恵器、古代～中世土師器、中世須恵器・常滑焼・備前焼・青磁・白磁、鉄製品など132点確認し、20点図示した。特に、備前焼甕の破片（78点）が積み重なって出土した。

359は古墳時代の甕、360は古墳～古代須恵器。361～363は古代土師器坏で、361は堅緻な胎土である。364・365は中世土師器Ⅲ、367は口禿げの白磁碗Ⅸ類、368は東播系須恵器の片口鉢。366は時期不明の釘。369は押印文を施す常滑焼の甕である。

370～378は備前焼の甕である。玉縁状の口縁を呈し、やや扁平なもの（370・375・376）とやや丸味をもつもの（371・372・374・377）がある。丸味をもつものは青灰色を呈する。頸部は短く、逆「ハ」字状に開き、外面はハケメ調整である。377は器面や断面に黒色物質が付着している。ひび割れ補修のための漆の可能性がある。

３　包含層出土遺物（第33図379～388）

焙烙（379）

中～近世と考えられる焙烙の把手である。１点のみ確認した。

土錘（380）

古墳時代以降と考えられる管状土錘である。１点のみ確認した。

坩堝（381）

外面には金属溶解物が付着する（２点破線部）。また、内外面に赤色の付着物（１点破斜線部）と内面に緑青（斜線部）がみられる。断面にも金属溶解物が付着しており、使用中ひび割れたと考えられる。

鞴羽口（382）

４点確認し、１点図示した。382は吹き口部分であり、先端に黒色ガラス質の滓が熔着している。磁力反応は認められない。

鉄滓（383・385・386）

15点確認し、特徴的なものを３点図示した。383は流動滓、385は碗形滓、386は再結合滓である。386は鉄片に滓や不純物が熔着している。全て磁力反応があり、特に386は強い。

鉄製品（384）

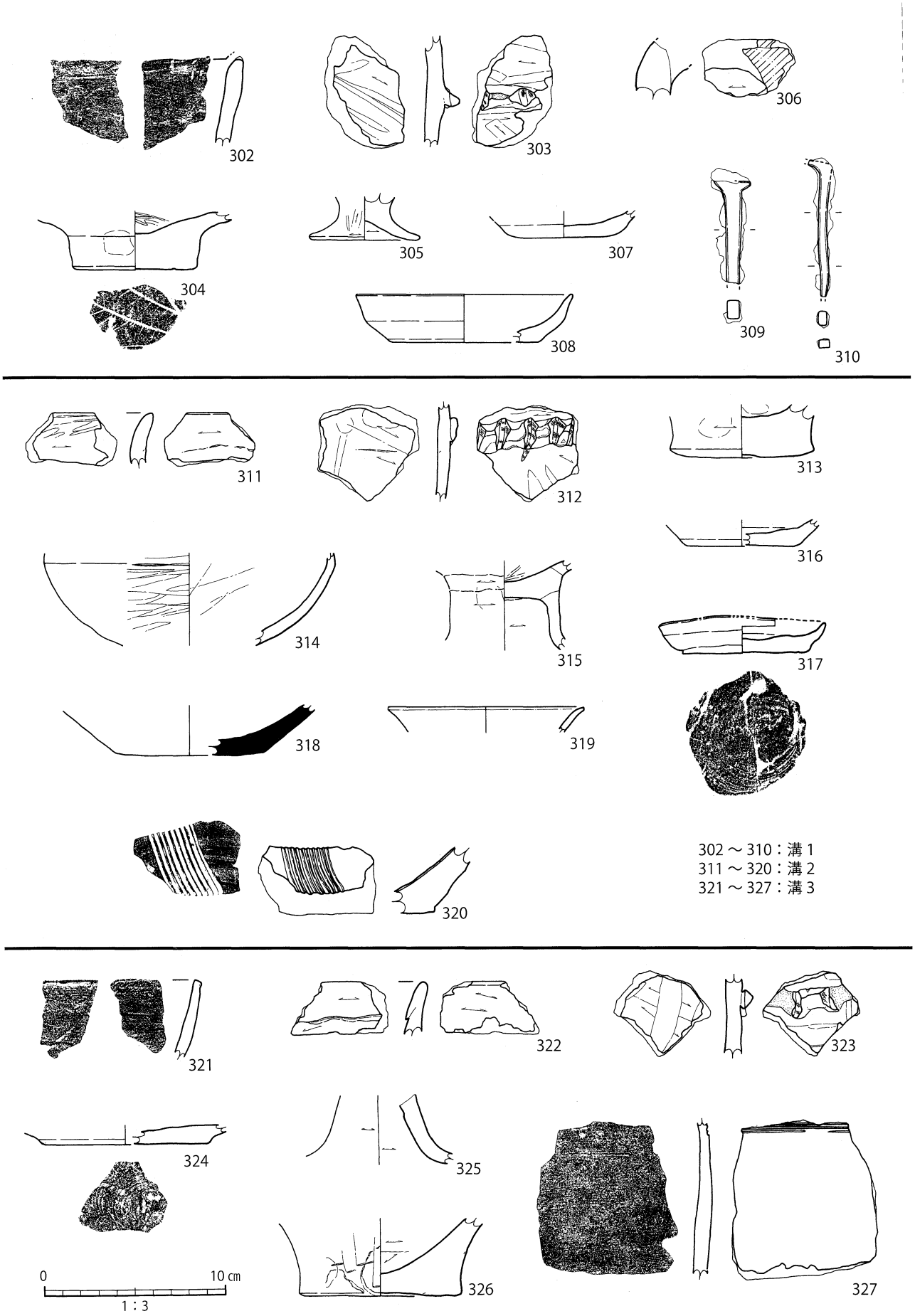
釘の欠損品など、10点確認したが、残りが悪いものが多く、１点のみ図示した。384は鉤状のもので、上端が環状を呈する。

砥石（387）

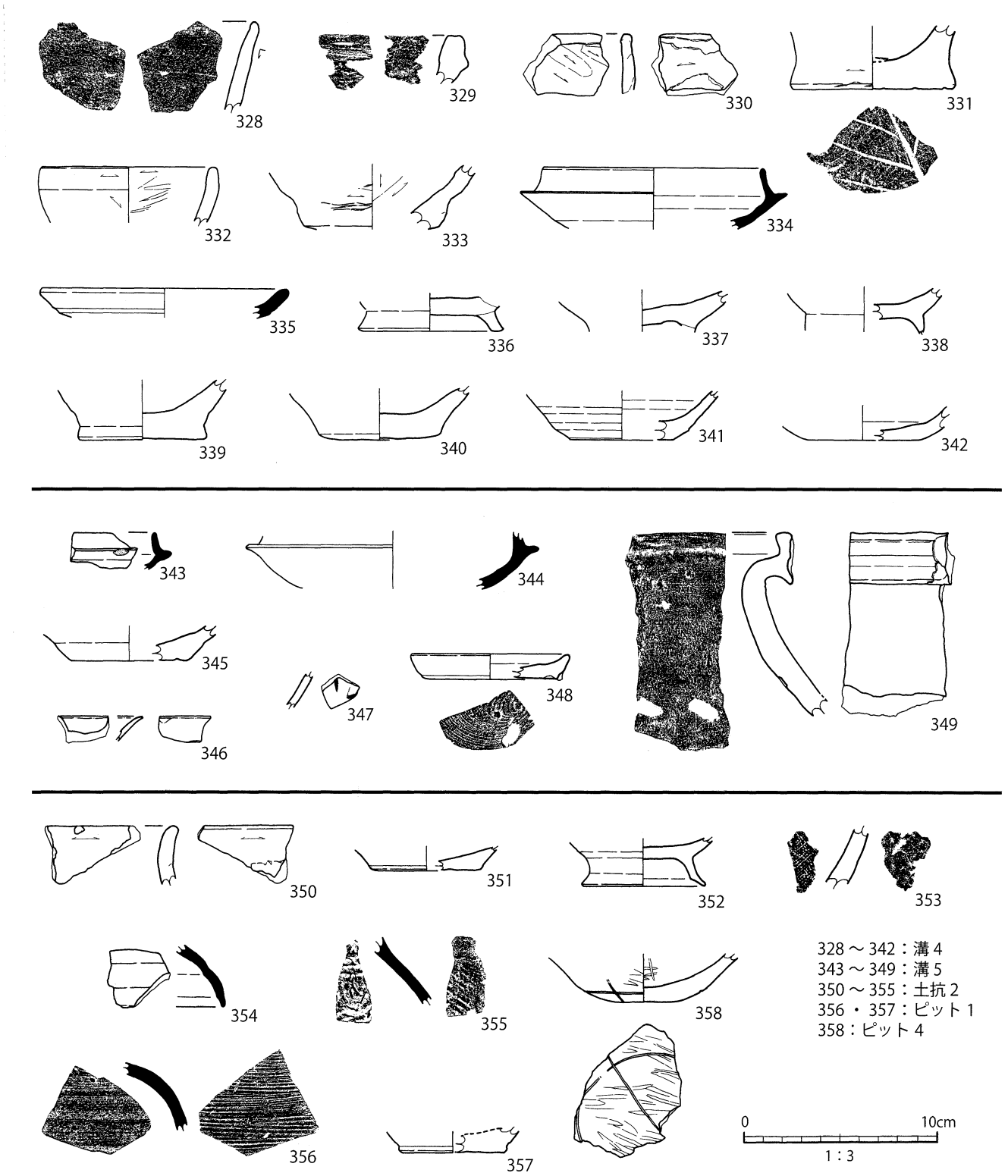
３点確認し、１点図示した。387は４面利用しており、内３面には研磨時の線状痕が認められる。

弾丸（388）

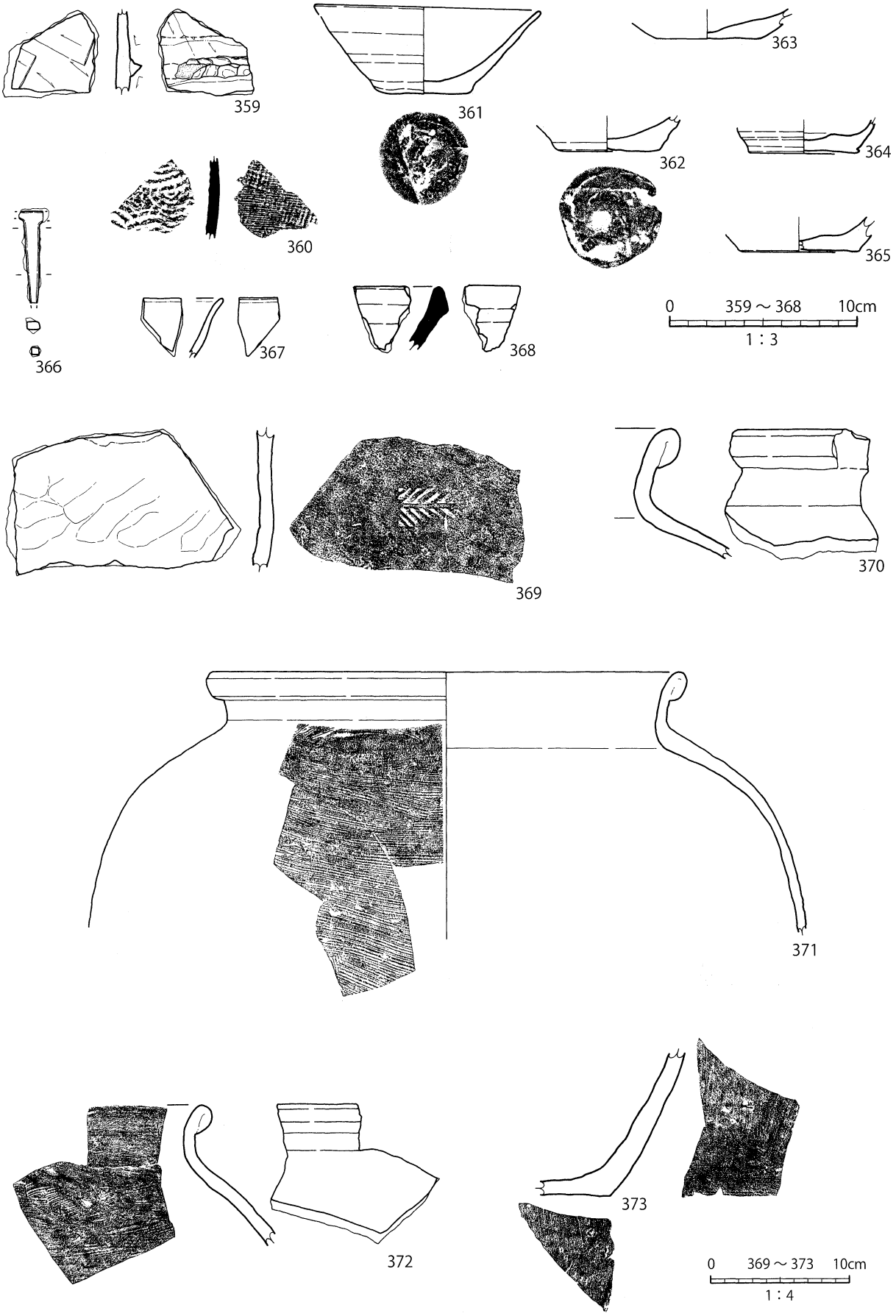
アメリカ軍の航空機に装備された「12.7mm重機関銃」の弾丸である。表面には施条痕が認められる。２点確認し、１点図示した。



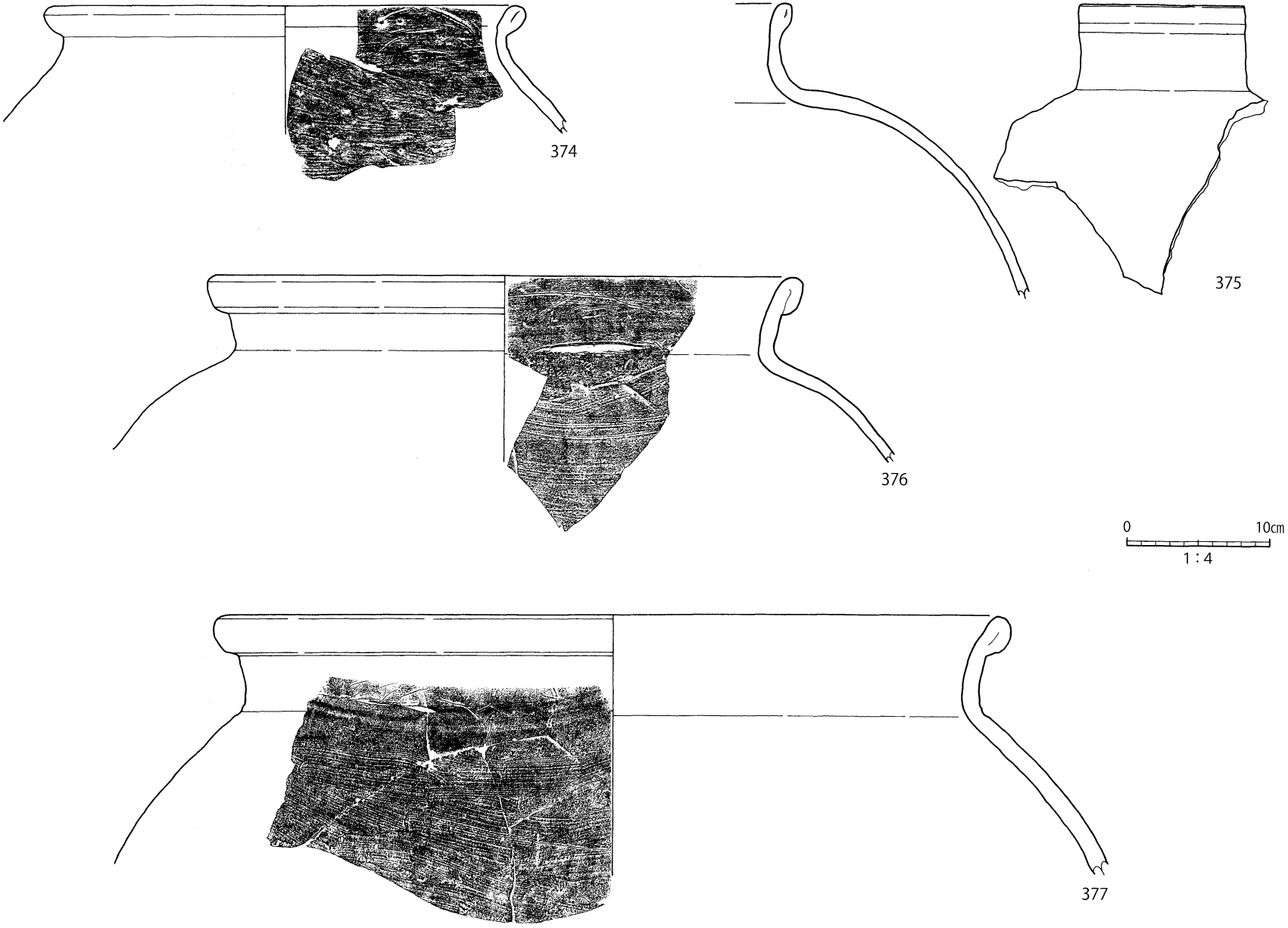
第29図　溝状遺構１～３号出土遺物



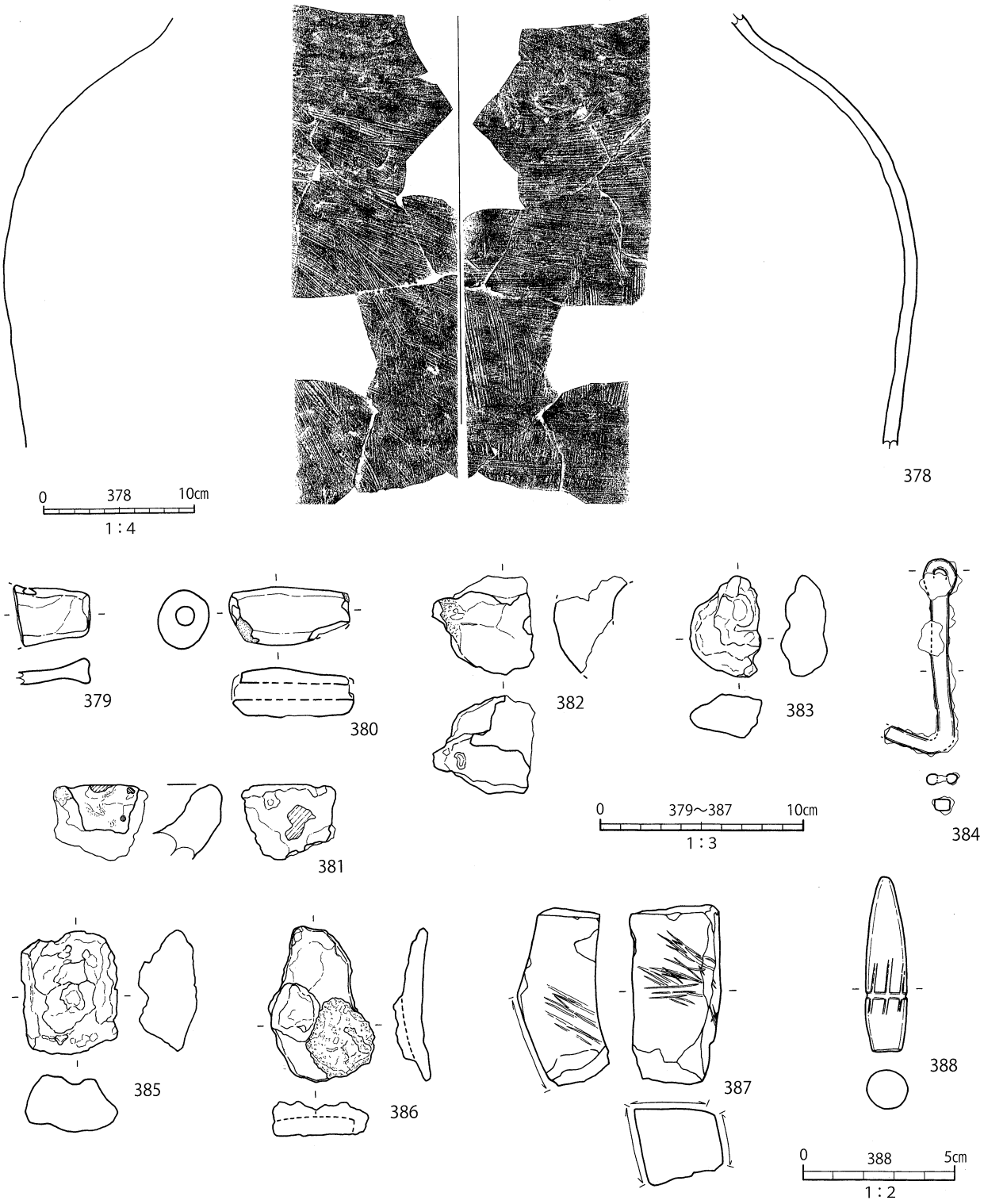
第30図　溝状遺構４・５号・土坑２号・ピット出土遺物



第31図　土坑１号出土遺物（１）



第32図　土坑１号出土遺物（２）



第33図　土坑１号出土遺物（３）・近世・時期不定遺物

第2表　縄文・弥生時代土器観察表

挿図	No	取上No	層	時期	分類	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	石／長	角／輝	雲母	風化礫	クサレ礫	円レキ	他	備考
8	1	2387	2	縄文	1	ヨコ貝殻条痕後ナデ	ナナメ貝殻条痕	明赤褐(5YR5/6)	にぶい赤褐(5YR5/4)	○	−	−	−	−	−	−	
	2	1795	1c	縄文	2	ヨコミガキ	ヨコミガキ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	○	○	−	−	−	−	−	
	3	1782	1c	縄文	2	ヨコミガキ	ヨコナデ	黒褐(5YR3/1)	黒褐(5YR3/1)	○	○	−	−	△	−	−	
	4	1639	1c	縄文	2	タテ・ナナメミガキ	ナデ	赤褐(2.5YR4/6)	にぶい赤褐(5YR5/4)	○	△	−	−	△	−	−	
	5	1891	1c	縄文	3	丁寧なヨコナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	灰黄褐(10YR5/2)	△	−	−	−	−	−	△	
	6	1892	1c	縄文	3	板状工具ナデ	ヨコナデ	橙(7.5YR7/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	−	○	−	−	△	−	−	
	7	377	1b	縄文	4	ヨコミガキ	ヨコミガキ	褐灰(10YR4/1)	褐灰(10YR6/1)	○	−	−	−	−	−	−	
	8	−	1c	縄文	4	ヨコミガキ	ヨコミガキ	黒褐(10YR3/1)	褐灰(10YR5/1)	○	△	−	−	−	−	−	沈線内赤色顔料
	9	1016	1c	縄文	2	ヨコミガキ	ヨコミガキ	灰褐(7.5YR4/2)	灰褐(7.5YR4/2)	○	−	−	−	−	−	◎	
	10	1775	1c	縄文	3	板状工具ヨコナデ	板状工具ヨコナデ	橙(7.5YR7/6)	黒褐(10YR3/1)	○	−	−	−	−	−	○	
	11	979	1c	縄文	5	粗いヨコナデ	ユビオサエ後ヨコナデ	黒(7.5YR2/1)	明赤褐(2.5YR5/6)	○	△	−	−	−	−	−	口径 21.2 cm
	11	1061	1c	縄文	5	粗いヨコナデ	ユビオサエ後ヨコナデ	黒(7.5YR2/1)	明赤褐(2.5YR5/6)	○	△	−	−	−	−	−	口径 21.2 cm
	11	1290	1c	縄文	5	粗いヨコナデ	ユビオサエ後ヨコナデ	黒(7.5YR2/1)	明赤褐(2.5YR5/6)	○	△	−	−	−	−	−	口径 21.2 cm
	11	1299	1c	縄文	5	粗いヨコナデ	ユビオサエ後ヨコナデ	黒(7.5YR2/1)	明赤褐(2.5YR5/6)	○	△	−	−	−	−	−	口径 21.2 cm
	11	1403	1c	縄文	5	粗いヨコナデ	ユビオサエ後ヨコナデ	黒(7.5YR2/1)	明赤褐(2.5YR5/6)	○	△	−	−	−	−	−	口径 21.2 cm
	11	1480	1c	縄文	5	粗いヨコナデ	ユビオサエ後ヨコナデ	黒(7.5YR2/1)	明赤褐(2.5YR5/6)	○	△	−	−	−	−	−	口径 21.2 cm
	12	−	試掘T	縄文	6	編布圧痕	ミガキ	橙(7.5YR7/6)	褐灰(10YR4/1)	○	○	−	△	−	−	−	補修孔有り
	13	1750	1c	縄文	5	ナデ	板状工具ナデ	橙(5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	○	−	−	−	−	−	○	
	17	1654	1c	弥生	1	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	−	−	−	−	−	−	−	
	18	1117	1c	弥生	2	ヨコハケメ	ヨコハケメ／ナナメナデ	橙(2.5YR6/6)	黄橙(7.5YR8/8)	△	△	−	○	−	−	−	
	19	1279　1487 1634　1711	1c	弥生	3	ヨコナデ	胴：ナデ 脚：ユビオサエ後ヨコナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(5YR7/6)	△	○	−	△	−	−	−	底径 11.3 cm

第3表　縄文時代石器観察表

挿図	No	取上No	層	時代	分類	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
8	14	−	1a	縄文	石器	土掘具	安山岩	9.8	7.0	2.1	138.3	刃部欠損
	15	1133	1c	縄文	石器	磨製石斧	頁岩	8.4	6.2	2.7	220.9	基部欠損
	16	250	1b	縄文	石器	磨石	砂岩	12.5	5.5	5.3	573.5	

第4表　竪穴建物出土土器観察表

挿図	No	取上No	埋土層	分類器種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	内面色調	石／長	角／輝	雲母	風化礫	クサレ礫	円レキ	他	備考
10	20	821　2235　2423 2466　2475　2540 2541　2542　2544 2570　2593　2642 2680　2682　2683	1b ① ②	甕	ヨコナデ ／タテ・ナナメミガキ ／ユビオサエ後ヨコナデ	ヨコナデ ／ユビオサエ後 ナナメ工具ナデ ／タテナデ	木葉痕後ナデ	黄橙(10YR8/6)	橙(5YR7/6)	△	−	−	○	○	○	−	口径 18.6 cm 底径 9.0 cm
	21	2427　2428 2429	① 床面	甕	タテ・ナナメミガキ	タテ・ナナメ工具ナデ	−	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)	○	△	−	−	○	−	○	口径 18.6 cm
	22	2081	①	甕	ナナメミガキ／ヨコナデ	ナナメ工具ナデ	−	黒(7.5YR2/1)	にぶい褐(7.5YR5/4)	○	○	−	−	−	−	−	
	23	1665　2184	①	甕	ヨコナデ後タテヘラケズリ 後タテミガキ	ヨコナデ後ナナメナデ	−	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	○	−	−	−	○	−	−	
	24	2450	①	甕	ヨコナデ後タテミガキ	ヨコナデ後ヨコミガキ	−	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/6)	○	−	−	−	△	−	−	
	25	2065	①	甕	ヨコナデ	ヨコナデ	−	浅黄橙(7.5YR8/4)	橙(5YR7/8)	△	−	−	−	○	△	−	
	26	2328	①	甕	ヨコナデ	ヨコナデ／工具ナナメナデ	−	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	△	−	−	−	−	○	−	
	27	2237	①	甕	ユビオサエ後ヨコナデ	ユビオサエ後ヨコナデ	−	橙(2.5YR6/6)	橙(2.5YR6/6)	△	−	−	−	△	−	−	
	28	2448	①	甕	ヨコナデ	工具ナナメナデ	−	浅黄橙(7.5YR8/6)	黄橙(10YR8/6)	△	−	−	△	○	−	−	
	29	2419　2425 2498	①② 床面	甕	タテケズリ・タテナデ	ヘラ状工具ナデ	木葉痕後ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/4)	○	△	−	−	○	−	−	底径 8.0 cm
	30	932　2195 2496	1b① 床面 ②	甕	ヨコミガキ／ヨコナデ	−	木葉痕	浅黄橙(7.5YR8/6)	−	○	−	−	−	△	−	−	底径 9.2 cm
	31	2359	①	甕	タテケズリ／ヨコナデ	ヨコナデ	木葉痕	黄橙(7.5YR8/8)	黒褐(2.5Y3/1)	○	−	−	○	△	−	−	底径 9.0 cm
	32	1670　1671	①	甕	タテケズリ／ヨコナデ	ヨコナデ	木葉痕	橙(5YR6/6)	にぶい黄褐(10YR5/3)	○	○	−	△	−	−	−	底径 9.3 cm
11	33	1672　2602	①	甕	工具タテナデ ／ユビオサエ後ナデ	ミガキ	ケズリ	浅黄橙(10YR8/4)	褐灰(10YR6/1)	○	○	−	−	−	−	−	底径 10.0 cm
	34	2610	①	甕	ヨコナデ後タテミガキ	ユビオサエ後工具ヨコナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい橙(5YR6/4)	○	△	−	−	−	−	−	底径 9.0 cm
	35	2091	①	甕	ヨコナデ	工具ナデ	ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	◎	△	−	−	△	−	−	底径 7.2 cm
	36	2020	①	甑	タテケズリ／ヨコナデ	ミガキ	−	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	○	−	−	−	○	−	○	底径 9.2 cm
	37	2624	①	甑	ヨコケズリ	ナナメナデ	−	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	○	−	−	○	−	−	−	底径 9.4 cm
	38	2595	②	壺	ナデ後タテミガキ	ヘラ状工具ナデ	ナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	○	−	−	△	△	−	−	底径 6.0 cm
	39	−	①	鉢	丁寧なナデ ／ユビオサエ後ナデ	ナデ	ナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)	△	−	−	△	△	−	−	底径 5.0 cm
	40	1514　2059 2363	1c ①	坩	ミガキ	ユビオサエ／工具ナデ	−	浅黄橙(7.5YR8/6)	灰(N4/)	○	−	−	−	△	−	−	
	41	2026	①	坏	ヨコナデ／ケズリ	ヨコナデ	−	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	△	△	−	△	−	−	−	口径 13.0 cm
	42	2367	①	坏	ヨコナデ／ヨコケズリ	ヨコナデ後一部タテナデ	−	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	△	○	−	−	−	−	○	
	43	2007　2236　2421 2424　2430　2432 2453　2454　2471 2504　2509　2510 2511　2512　2513 2514　2549　2553 2574	① ②	台付鉢	ヨコナデ後タテミガキ	ヨコナデ ／ヨコナデ後ナナメナデ	−	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	△	△	−	−	○	△	−	
	44	2192	①	高坏	−	−	−	黄橙(7.5YR8/8)	黄橙(7.5YR8/8)	△	○	−	−	−	△	−	
	45	2526	①	高坏／ 台付鉢	ヨコナデ	ミガキ	ユビオサエ ／ヘラ状工具ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)	黒(N2/)	○	−	−	○	△	−	−	
	46	2468	①	高坏／ 台付鉢	ヨコナデ	タテ・ヨコナデ	−	黄橙(7.5YR8/8)	黄橙(7.5YR8/8)	△	△	−	−	○	−	−	脚径 10.0 cm
	47	2154	①	蓋	ミガキ	ミガキ	−	黄橙(10YR8/6)	浅黄橙(10YR8/4)	△	−	−	−	△	−	−	
12	57	2465	①	縄文2	ナデ	ヨコナデ	−	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	○	△	−	−	−	−	−	
	58	2374	①	縄文2	ヨコミガキ	摩滅により不明	−	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	○	△	−	−	−	−	−	補修孔有り
	59	2228	①	縄文2	ヨコミガキ	ナデ	−	黒褐(7.5YR3/1)	黒褐(10YR3/1)	○	△	−	○	−	−	−	

第5表　竪穴建物出土須恵器観察表

挿図	No	取上No	埋土	時代	器種	時期	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	備考
11	48	2015	①	古墳	坏身	TK10 型式	回転ナデ	回転ナデ	青灰(5B5/1)	青灰(5B5/1)	口径 12.8 cm
	49	2050	①	古墳	坏身	TK209 型式	回転ナデ	回転ナデ	青灰(5B5/1)	青灰(5B5/1)	
	50	2617	②	古墳	無蓋高坏	TK209 ～ 217 型式	カキメ／回転ナデ	回転ナデ	灰(N5/)	灰(N6/)	内面に自然釉　口径 9.8 cm
	51	2689	②	古墳	高坏	TK209 ～ 217 型式	回転ナデ	回転ナデ	灰(N4/)	灰(N5/)	

第6表　竪穴建物出土鉄製品観察表

挿図	No	取上No	埋土	時代	分類	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
11	52	2414	①	古墳	鉄製品	刀子	6.0	1.6	1.5	13.1	
	53	2214	①	古墳	鉄製品	刀子	3.3	0.7	0.2	1.3	
	54	2497	①	古墳	鉄製品	方頭鏃	5.5	2.6	0.4	12.0	

第７表　竪穴建物出土石器観察表

挿図	No	取上No	埋土	時代	分類	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
12	55	2706	①	古墳	石器	砥石	砂岩	23.3	11.3	5.0	2063.6	
	56	1664	①	古墳	石器	土掘具	凝灰岩	12.0	7.6	1.7	189.6	

第８表　竪穴建物出土磁器観察表

挿図	報No	取上No	層	種別	分類	時期	胎土色調	釉薬色調	施釉部位	備考
12	60	2525	①	青磁	龍泉窯系青磁碗Ⅱ類	大宰府Ｅ期	灰白色	緑色	残存部施釉	

第９表　古墳時代土器観察表（１）

挿図	No	取上No	層	器種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	内面色調	石／長	角／輝	雲母	風化礫	クサレ礫	円レキ	他	備考
13	61	640	1b	甕	ヨコナデ／タテケズリ	ヨコナデ	－	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	○	－	－	－	△	－	△	
	62	1252	1c	甕	ユビオサエ後ヨコナデ／ナデ後タテミガキ	ユビオサエ後ヨコナデ	－	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/6)	○	－	－	－	△	－	－	
	63	1134	1c	甕	丁寧なナデ	ユビオサエ後ヨコミガキ	－	にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい褐(7.5YR5/4)	○	－	－	△	－	－	－	
	64	906	1b	甕	ヨコナデ／ナデ	ヨコナデ	－	橙(5YR6/8)	橙(5YR7/6)	○	○	－	－	－	－	－	
	65	901　1087	1b	甕	ヨコナデ／タテケズリ後ナデ	ヨコケズリ／ヨコナデ	－	にぶい褐(7.5YR6/3)	浅黄橙(7.5YR8/4)	○	○	－	○	△	－	－	口径 21.2 cm
	66	1094	1c	甕	ヨコナデ／ナデ	ヨコナデ／タテナデ	－	浅黄橙(10YR8/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	○	△	－	△	－	－	－	
	67	1755	1c	甕	ナデ	ヘラ状工具ナデ	－	褐灰(7.5YR4/1)	にぶい橙(7.5YR7/4)	○	△	－	△	－	－	－	
	68	1049　1191 1323　1652	1c	甕	ヨコミガキ／タテミガキ	ヨコナデ後丁寧なタテナデ	－	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)	△	－	－	○	△	－	－	口径 21.2 cm
	69	1199　1424　1535 1618　1619　1936	1c SD3	甕	ヨコナデ／ナデ後タテミガキ	ナナメナデ	－	黒褐(5YR3/1)	橙(5YR7/6)	○	○	－	－	△	－	－	
	70	2206	1c	甕	ヨコナデ	ヨコナデ／ヨコヘラケズリ	－	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/6)	△	○	－	－	△	－	－	
	71	－	試掘T	甕	ヨコナデ／タテミガキ	ユビオサエ後ヨコナデ	－	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	○	△	－	－	△	－	－	
	72	－	1c	甕	ヨコナデ	ナナメナデ	－	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	△	○	－	－	△	－	－	
14	73	1190	1c	甕	ヨコナデ／タテミガキ	ヨコナデ／ナナメナデ	－	橙(2.5YR6/8)	橙(2.5YR6/8)	△	－	－	○	△	－	－	口径 30.6 cm
	74	779　902　904 1085　1181　1182 1183　1184　1325 1326　1327　1328 1405　1406　1513 1515　1599　1601 1858　2129　2131	1b 1c SD2	甕	ヨコナデ／ヨコミガキ／ナナメミガキ	ヨコナデ／タテナデ	－	黒褐(7.5YR3/2)	明赤褐(2.5YR5/8)	－	○	－	－	○	－	－	口径 37.0 cm
	75	1524　1530 1622	1c	甕	ヨコナデ／タテナデ後ヨコナデ	ユビオサエ後ナナメナデ	－	橙(7.5YR6/6)	橙(5YR7/6)	○	○	－	－	－	－	－	
	76	1180	1c	甕	ヨコナデ	ユビオサエ後ナナメナデ	－	暗赤灰(2.5YR3/1)	明赤褐(2.5YR5/6)	△	○	－	－	－	－	－	
	77	1483	1c	甕	ユビオサエ後ヨコナデ／ヨコナデ後ナナメミガキ	ユビオサエ後ヨコナデ	－	橙(2.5YR6/6)	橙(2.5YR6/8)	○	○	－	－	△	－	－	
	78	117	1b	甕	ユビオサエ後ヨコナデ	ユビオサエ後ヨコナデ	－	明赤褐(2.5YR5/6)	明赤褐(2.5YR5/6)	△	○	－	－	○	－	－	
	79	－	1b	甕	ユビオサエ後ヨコナデ／ヨコナデ	ユビオサエ後ヨコナデ	－	にぶい赤褐(5YR5/4)	明赤褐(2.5YR5/6)	○	－	－	－	－	－	－	
	80	2699	1c	甕	ヨコナデ後タテミガキ	ユビオサエ後ヨコナデ	－	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	○	－	－	－	△	－	－	
	81	1510	1c	甕	ヨコナデ	ユビオサエ後ヨコケズリ	－	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	○	○	－	△	△	－	－	
15	82	978　1056	1c	甕	ナナメナデ／ナデ	工具ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい褐(7.5YR6/3)	△	○	－	○	△	－	－	底径 9.4 cm
	83	1057　1764	1c	甕	タテ工具ナデ／ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/6)	○	○	－	△	△	－	－	底径 8.3 cm
	84	1001　1153	1c	甕	タテケズリ／ナデ	ヨコナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	○	－	－	△	－	－	－	底径 9.4 cm
	85	1339	1c	甕	タテケズリ／ユビオサエ後ヨコナデ	ユビオサエ後ナデ	木葉痕	にぶい黄橙(10YR7/4)	黄橙(10YR8/6)	○	○	－	○	△	－	－	底径 8.5 cm
	86	102	1b	甕	ヨコナデ	摩滅により不明	ナデ	橙(5YR7/6)	にぶい赤褐(5YR5/4)	○	○	－	－	－	△	－	底径 7.0 cm
	87	－	試掘T	甕	タテ工具ナデ／ヨコナデ	ユビオサエ後工具ナデ	ナデ	にぶい赤橙(10R6/4)	赤橙(10R6/8)	○	－	－	－	－	－	－	底径 8.6 cm
	88	496	1b	甕	工具ナデ	ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(5YR7/6)	○	△	－	△	－	－	－	底径 6.8 cm
	89	247　475	1b	甕	ユビオサエ後ヨコナデ	ナデ	ナデ	橙(2.5YR6/6)	橙(2.5YR6/8)	○	○	－	△	－	－	－	底径 9.6 cm
	90	975	1c	甕	タテケズリ後ヨコナデ	ヨコ工具ナデ	ナデ	橙(5YR7/6)	灰黄褐(10YR6/2)	○	－	－	－	－	－	－	底径 10.2 cm
	91	734	1b	甕	ヨコナデ	タテ工具ナデ	ナデ	明赤褐(2.5YR5/6)	黒(2.5Y2/1)	○	△	－	－	－	－	△	底径 6.8 cm
	92	1414	1c	甕	ヨコナデ後タテ工具ナデ／ユビオサエ後ナデ	工具ナデ	ナデ	にぶい橙(5YR7/4)	にぶい赤褐(5YR5/4)	○	－	－	－	△	－	－	底径 9.9 cm
	93	1267	1c	甕	ユビオサエ後ヨコナデ後タテ工具ナデ	ナデ	ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)	褐灰(7.5YR5/1)	○	－	－	－	○	－	－	底径 11.4 cm
	94	1183	1c	甕	タテ工具ナデ／ヨコナデ	ヨコ工具ナデ	木葉痕後ナデ	橙(7.5YR7/6)	黒(10YR2/1)	○	－	－	△	－	－	－	底径 7.8 cm
	95	1490	1c	甕	ヨコナデ	ヘラ状工具ナデ	木葉痕後ナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(5YR6/6)	○	○	－	－	△	－	－	底径 8.4 cm
	96	1275	1c	甕	ヨコナデ	ナナメナデ	木葉痕	橙(5YR6/6)	にぶい赤褐(5YR4/4)	△	△	－	△	△	－	－	底径 8.0 cm
	97	1656	1c	甕	タテ工具ナデ／ユビオサエ後ヨコナデ	タテナデ	ナデ	橙(2.5YR6/8)	黒(10YR2/1)	○	－	－	△	－	－	－	底径 8.1 cm
	98	1159	1c	甕	ヨコナデ	ナデ	木葉痕後ヘラ状工具ナデ	橙(2.5YR7/8)	橙(5YR7/8)	○	－	－	－	△	－	－	底径 6.6 cm
	99	1165	1c	甕	ヨコナデ後ヘラミガキ	ヘラ状工具ナデ	木葉痕	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/6)	○	○	－	－	△	－	－	底径 8.0 cm
	100	619	1b	甕	ヨコナデ	ユビオサエ・タテナデ	木葉痕後ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	○	△	－	△	－	－	－	底径 9.0 cm
	101	1581	1c	甕	ナナメナデ後タテミガキ／ユビオサエ後ナナメナデ	ナナメ工具ナデ	木葉痕	橙(2.5YR7/8)	橙(5YR6/6)	○	－	－	－	○	○	－	底径 7.2 cm
	102	973	1c	甕	ヨコナデ	ヘラ状工具ナデ	木葉痕	橙(2.5YR6/8)	黒(2.5Y2/1)	○	○	－	－	－	△	－	底径 8.6 cm
	103	263	1b	甕	ユビオサエ	ヘラ状工具ナデ	木葉痕後ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	○	－	－	○	△	－	－	底径 11.9 cm
	104	1660	1c	甕	ナナメナデ	ナナメハケメ後ナデ	ナデ	黄橙(10YR8/6)	褐灰(10YR6/1)	○	－	－	－	○	－	－	底径 9.3 cm
16	105	992	1c	甕	ヨコナデ	ヘラ状工具ナデ	木葉痕後ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	○	○	－	－	△	－	－	底径 8.6 cm
	106	1389	1c	甕	ナナメナデ	ヘラ状工具ナナメナデ	木葉痕	橙(7.5YR7/6)	明赤褐(2.5YR5/8)	○	○	－	△	○	－	－	底径 10.4 cm
	107	1378	1c	甑	ヘラ状工具ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい橙(7.5YR7/4)	○	－	－	－	－	－	○	
	108	－	1c	甑	タテミガキ／ヨコミガキ	タテナデ／ヨコナデ	－	橙(5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	○	○	－	－	－	－	－	底径 6.6 cm
	109	1374	1c	甑	ナナメナデ	ヨコミガキ	－	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄(2.5YR8/3)	○	－	－	－	○	－	－	底径 9.6 cm
	110	894	1b	壺	ヨコナデ／ナナメナデ	ヨコナデ／ユビオサエ／ナデ	－	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(10YR8/4)	◎	◎	－	－	－	－	－	
	111	849	1b	壺	ヨコナデ／タテケズリ	ユビオサエ後ヨコナデ	－	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	○	－	－	－	△	－	－	
	112	－	1c	壺	ヨコナデ	ユビオサエ後ナデ	－	橙(2.5YR6/8)	橙(2.5YR6/8)	○	－	－	－	－	－	－	
	113	266	1b	壺	ヨコナデ	タテハケメ後ナデ	－	黄橙(10YR8/6)	黄橙(7.5YR8/8)	△	△	－	－	○	－	－	
	114	119	1b	壺	－	ナデ	ナデ	赤橙(10R6/8)	橙(5YR6/6)	○	○	－	－	－	－	－	底径 3.7 cm
	115	914	1b	壺	ヨコ・ナナメナデ	ナデ	ナデ	明黄褐(10YR7/6)	黄橙(10YR8/6)	○	－	－	－	△	△	－	底径 7.8 cm
	116	1385	1c	壺	ナデ／ユビオサエ後ヨコナデ	ヘラ状工具ナデ	ナデ	黄橙(7.5YR7/8)	黄橙(10YR8/6)	○	－	－	△	－	－	－	底径 3.2 cm
	117	1050　1345	1c	高坏	ミガキ	ヨコ・ナナメナデ	－	橙(5YR7/8)	浅黄橙(10YR8/4)	○	△	－	－	△	－	－	
	118	1192　1730	1c	高坏	ヨコナデ	－	－	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	○	△	－	－	○	－	－	
	119	1408　1516　1600 1603　1604　1724 1725　1726　1760 1889　1900	1c	高坏	ヨコナデ／ヨコミガキ／ユビオサエ後ヨコナデ	ヨコ工具ナデ／ヨコナデ	ヨコナデ	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	○	－	－	△	○	－	－	口径 15.4 cm
	120	260	1b	坏	ミガキ	ミガキ	－	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	△	△	－	－	○	－	－	口径 11.6 cm
	121	1189　1193	1c	坏	ヨコミガキ／ミガキ後ナデ	ミガキ	－	黄橙(7.5YR8/8)	橙(5YR7/8)	△	－	－	－	△	－	－	口径 13.8 cm
	122	1093　1896	1c	坏	ヨコミガキ／ヨコナデ	ヨコナデ	－	黄橙(10YR8/6)	浅黄橙(10YR8/4)	△	－	－	－	－	－	－	口径 12.2 cm
	123	986	1c	坏	ミガキ	ミガキ／ユビオサエ	－	橙(5YR7/6)	浅黄橙(10YR8/3)	△	－	－	－	○	－	－	
	124	1250	1c	坏	ミガキ	ミガキ	－	黄橙(7.5YR8/8)	黄橙(7.5YR8/8)	○	－	－	－	△	－	－	口径 13.2 cm
	125	1741	1c	坏	ヨコミガキ後ヨコナデ	ヨコナデ	－	褐灰(10YR4/1)	浅黄橙(7.5YR8/6)	－	－	－	－	△	－	－	

第10表　古墳時代土器観察表（2）

挿図	No	取上 No	層	器種	外面調整	内面調整	底面調整 脚内面調整	外面色調	内面色調	石／長	角／輝	雲母	風化礫	クサレ礫	円レキ	他	備考
16	126	1397	1c	坏	タテミガキ後 ヨコミガキ	ナナメナデ後 タテミガキ	－	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	△	－	－	－	△	－	－	口径 10.0 cm
	127	1893	1c	坏	ヨコ・ナナメミガキ	ヨコミガキ	－	浅黄橙(7.5YR8/6)	灰白(2.5Y8/2)	△	－	－	－	△	－	－	
	128	－	1c	坏	ヨコナデ／ ヨコナデ後タテナデ	ヨコナデ／ ヨコハケメ後ナデ	－	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/6)	－	－	－	－	－	－	△	
	129	－	1c	坏	ミガキ	ヨコミガキ	－	赤(10R5/8)	浅黄橙(10YR8/4)	△	－	－	－	△	－	－	
	130	1421	1c	蓋	ミガキ	ミガキ	－	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	○	－	－	－	○	－	－	
	131	766	1b	蓋	ナデ	ナデ	－	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	△	－	－	－	－	－	－	
17	132	983	1c	高坏／ 台付鉢	ナナメナデ／ヨコナデ	ミガキ	ヨコナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/8)	○	－	－	－	○	－	－	
	133	125	1b	高坏／ 台付鉢	ナナメナデ／ヨコナデ	ミガキ	ユビオサエ 後ヨコナデ	黄橙(7.5YR8/8)	浅黄橙(7.5YR8/6)	○	－	－	－	○	－	－	脚径 10.1 cm
	134	1647	1c	高坏／ 台付鉢	ヨコナデ	ナデ	ユビオサエ 後ヨコナデ	橙(7.5YR7/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	○	△	－	－	○	－	－	
	135	777	1b	高坏／ 台付鉢	ユビオサエ後ヨコナデ	－	ユビオサエ 後ヨコナデ	黄橙(7.5YR8/8)	黄橙(7.5YR8/8)	○	○	－	－	○	－	－	脚径 11.3 cm
	136	776	1b	高坏／ 台付鉢	ユビオサエ後ヨコナデ ／ヨコナデ後ユビオサエ	ヨコナデ	－	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	－	○	－	－	○	－	－	

第11表　古墳時代須恵器観察表

挿図	No	取上 No	層	器種	時期	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	備考
17	137	1894	1c	坏蓋	TK10 型式	回転ナデ	回転ナデ	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	
	138	1141	1c	坏蓋	TK43 ～ 209 型式	回転ナデ	回転ナデ	灰(N6/)	褐灰(7.5YR5/1)	口径 14.0 cm
	139	1048　1338	1c	坏蓋	TK43 ～ 209 型式？	回転ヘラケズリ／回転ナデ	回転ナデ／不規則ナデ	灰(7.5Y6/1)	灰(5Y6/1)	外面に自然釉
	140	－	1c	坏蓋	TK217 型式	回転ナデ	回転ナデ	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	
	141	1587	1c	坏身	TK209 型式	回転ナデ	回転ナデ	灰(N5/)	灰(N5/)	口径 12.6 cm
	142	－	1b	坏身	MT85 型式	回転ナデ	回転ナデ	灰(5Y5/1)	灰(5Y6/1)	
	143	1911	1c	はそう	－	回転ナデ	回転ナデ	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	内面に自然釉

第12表　古代土師器観察表

挿図	No	取上 No	層	器種	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	内面色調	備考
18	144	－	試掘T	坏	－	5.2	－	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	堅緻な胎土
	145	1139	1c	坏	－	6.6	－	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り痕	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	146	2209	1c	坏	－	5.4	－	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	ヘラ切り後ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	黄橙(10YR8/6)	堅緻な胎土
	147	2352	1c	坏	－	7.0	－	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	148	1464	1c	坏	－	6.2	－	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	黄橙(10YR8/6)	黄橙(10YR8/6)	堅緻な胎土
	149	1706	1c	坏	－	7.0	－	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	堅緻な胎土
	150	1798	1c	坏	－	5.2	－	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
	151	136	1b	坏	－	5.8	－	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	堅緻な胎土
	152	2339	1c	坏	－	6.0	－	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	明黄褐(10YR7/6)	
	153	1362	1c	坏	－	6.8	－	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	堅緻な胎土
	154	1107	1c	坏	12.0	7.8	3.0	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り痕	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	
	155	2208	1c	坏	－	6.4	－	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り痕	黄橙(7.5YR8/8)	黄橙(7.5YR8/8)	
	156	－	試掘T	坏	－	6.4	－	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り後板状圧痕	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	157	1310	1c	坏	－	7.2	－	摩滅により不明	回転ナデ	板状圧痕	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	158	－	試掘T	坏	－	7.3	－	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	堅緻な胎土
	159	980	1c	坏	－	7.0	－	回転ナデ	摩滅により不明	ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	160	－	試掘T	椀	－	6.0	－	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	堅緻な胎土
	161	981	1c	椀	－	7.0	－	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙(7.5YR7/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	
	162	2177	1c	黒色土器 B 類	12.8	－	－	回転ナデ	回転ナデ	－	黒(N2/)	黒(N2/)	
	163	－	1c	黒色土器 A 類	－	－	－	回転ナデ	ヘラミガキ	－	浅黄橙(10YR8/4)	黒(10YR2/1)	

第13表　古代土器・土師甕観察表

挿図	No	取上 No	層	分類	器種	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	石／長	角／輝	雲母	風化礫	クサレ礫	円レキ	他	備考
18	165	652	1b	製塩土器	－	摩滅により不明	布目痕	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	○	－	－	－	－	－	－	
	166	－	1c	製塩土器	－	ナデ	布目痕	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/6)	△	－	－	－	○	－	－	
	167	722	1b	土師器	甕	ヨコハケメ／ナナメナデ	ヨコハケメ後一部ナデ／ ヨコナデ後ヨコハケメ	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	明赤褐(2.5YR5/6)	△	○	－	－	－	－	－	
	168	1699	1c	土師器	甕	ヨコハケメ／ナナメナデ	ヨコハケメ／ナデ	にぶい赤褐(5YR4/6)	橙(5YR6/6)	△	△	－	－	－	－	－	
	169	78	1b	土師器	甕	ヨコハケメ／タテナデ	ヨコ・ナナメハケメ	にぶい橙(7.5YR7/4)	浅黄橙(7.5YR8/6)	△	○	－	－	○	－	－	

第14表　古墳～古代須恵器観察表

挿図	No	取上 No	層	時代	器種	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	備考
18	164	1756	1c	古代	椀	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(N5/)	外面に自然釉　底径 7.6 cm
19	170	2210	1c	古墳～古代	甕／壺	回転ナデ	回転ナデ	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	内面に自然釉
	171	－	1c	古墳～古代	甕／壺	平行タタキ	同心円タタキ後ナデ	灰(N4/)	灰(N5/)	
	172	1071	1c	古墳～古代	甕／壺	平行タタキ	同心円タタキ	灰(N6/)	灰(N6/)	外面に自然釉
	173	1136	1c	古墳～古代	甕／壺	格子目タタキ	同心円タタキ後ナデ	灰(N6/)	灰(N6/)	
	174	1502	1c	古墳～古代	甕／壺	格子目タタキ後ナデ	同心円タタキ	灰(N7/)	灰(N7/)	
	175	955	1c	古墳～古代	甕／壺	平行タタキ後ナデ	同心円タタキ後ナデ	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	
	176	908	1b	古墳～古代	甕／壺	平行タタキ後ナデ	同心円タタキ後ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y8/2)	
	177	787	1b	古墳～古代	甕／壺	格子目タタキ後ナデ	同心円タタキ	灰(N6/)	灰(7.5Y6/1)	内面に自然釉
	178	1171	1c	古墳～古代	甕／壺	カキメ	ヨコナデ	灰(N5/)	灰(N5/)	
	179	568	1b	古墳～古代	甕／壺	平行タタキ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	
	180	－	1c	古墳～古代	甕／壺	平行タタキ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	
	181	2176	1c	古墳～古代	甕／壺	平行タタキ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	

第15表　中世土師器観察表（1）

挿図	No	取上 No	層	器種	時期	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	内面色調	備考
20	182	1792	1c	坏	楽畑一括④～⑥	13.4	8.6	2.5	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	183	595・668	1b	坏	楽畑一括④～⑥	－	8.6	3.2	回転ナデ	回転ナデ	摩滅により不明	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	184	1392	1c	坏	楽畑一括④～⑥	12.0	8.2	3.2	回転ナデ	回転ナデ	糸切り痕	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	185	582	1b	坏	楽畑一括④～⑥	11.6	8.6	3.8	回転ナデ	回転ナデ	摩滅により不明	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	186	1528	1c	坏	楽畑一括④～⑥	11.0	9.0	2.7	回転ナデ	摩滅により不明	摩滅により不明	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	187	824	1b	坏	楽畑一括④～⑥	11.0	8.0	3.2	回転ナデ	摩滅により不明	摩滅により不明	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	188	629	1b	坏	楽畑一括④～⑥	10.8	6.8	3.2	回転ナデ	回転ナデ	糸切り痕	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	
	189	2209	1c	坏	－	－	10.6	－	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り後板状圧痕	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	190	631	1b	坏	－	－	9.0	－	摩滅により不明	摩滅により不明	板状圧痕	浅黄(2.5Y8/4)	浅黄(2.5Y8/4)	
	191	1492	1c	坏	－	－	8.8	－	回転ナデ	回転ナデ	糸切り痕	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	192	470	1b	坏	－	－	8.8	－	回転ナデ	回転ナデ	糸切り後ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	193	1355	1c	坏	－	－	8.6	－	回転ナデ	回転ナデ	糸切り痕	灰黄褐(10YR6/2)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
	194	－	試掘T	坏	－	－	8.5	－	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	糸切り痕	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄(2.5YR7/3)	

第25表　遺構内出土須恵器・陶器観察表

挿図	No	取上No	遺構名	時代	種別	分類	器種	時期	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	備考
29	318	1968	SD2	中世	須恵器	東播系	片口鉢	－	ナデ	ナデ	灰(N7/)	灰(N7/)	底径 8.2 cm
	320	1861	SD2	中世	陶器	備前焼	播鉢	－	ヨコ工具ナデ	ヨコナデ	赤灰(5R6/1)	青灰(5PB5/1)	
	327	1944	SD3	中世	陶器	備前焼	壺	－	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	にぶい橙(2.5YR6/4)	
30	334	－	SD4	古墳	須恵器	－	坏身	TK10型式	回転ナデ	回転ナデ	灰(N6/)	灰(10Y5/1)	口径 11.4 cm
	335	－	SD4	古墳	須恵器	－	甕？	－	回転ナデ	回転ナデ	灰(N7/)	灰(N7/)	口径 12.8 cm
	343	2280	SD5	古墳	須恵器	－	坏身	TK43～209型式	回転ナデ	回転ナデ	青灰(6PB6/1)	青灰(6PB6/1)	
	344	2355	SD5	古墳	須恵器	－	坏身	TK10型式	回転ナデ	回転ナデ	灰(N6/)	灰(N5/)	外面自然釉
	349	2279	SD5	中世	陶器	常滑焼	甕	赤羽・中野6a・b	ヨコナデ	ヨコナデ	赤灰(10R5/1)	暗赤灰(10R3/1)	内外面自然釉
	354	－	SK2	古墳	須恵器	－	坏蓋	TK10型式	回転ナデ	回転ナデ	青灰(5B6/1)	青灰(5B6/1)	
	355	－	SK2	古墳～古代	須恵器	－	甕／壺	－	平行タタキ後タテナデ	同心円タタキ	灰(N7/)	灰(N7/)	
	356	－	P1	古墳～古代	須恵器	－	甕／壺	－	カキメ	回転ナデ	灰(N6/)	灰(N6/)	
31	360	1846	SK1	古墳～古代	須恵器	－	甕／壺	－	平行タタキ後カキメ	同心円タタキ	暗青灰(5B4/1)	灰(N7/)	外面自然釉
	368	1813	SK1	中世	須恵器	東播系	片口鉢	森田Ⅱ－2	回転ナデ	回転ナデ	灰(N6/)	灰(N6/)	
	369	1563	SK1	中世	陶器	常滑焼	甕	－	ナデ	ユビオサエ	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	褐灰(10YR4/1)	外面自然釉
	370	1231　1579	SK1	中世	陶器	備前焼	甕	乗岡中世3期	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	灰オリーブ(5Y5/2)	外面自然釉
	371	1561　1815　1820	SK1	中世	陶器	備前焼	甕	乗岡中世2b期	ヨコハケメ	ヨコナデ	灰赤(2.5YR5/2)	にぶい橙(2.5YR6/4)	口径 33.8 cm 外面自然釉
	372	1835　1837	SK1	中世	陶器	備前焼	甕	乗岡中世2b期	ヨコハケメ	ヨコハケメ	灰(N4/)	灰(N5/)	外面自然釉
	373	1233　1578	SK1	中世	陶器	備前焼	甕	－	タテハケメ／ヨコハケメ	ヨコナデ	灰褐(5YR4/2)	灰褐(7.5YR4/2)	
32	374	1229　1816	SK1	中世	陶器	備前焼	甕	乗岡中世2b期	ヨコ工具ナデ	ヨコ工具ナデ	灰(N5/)	灰(N5/)	口径 16.2 cm
	375	1552	SK1	中世	陶器	備前焼	甕	乗岡中世3期	ヨコハケメ	ヨコナデ／ヨコハケメ	赤褐(10R4/3)	赤褐(10R4/3)	外面自然釉
	376	714　1689 1821　2701	1b SK1	中世	陶器	備前焼	甕	乗岡中世3期	ヨコハケメ	ヨコ工具ナデ	赤灰(2.5YR4/1)	にぶい橙 (2.5YR6/4)	口径 41.8 cm 外面自然釉
	377	1551　1553　1559 1567　1568　1569 1574　1577　1830	SK1	中世	陶器	備前焼	甕	乗岡中世2b期	ヨコハケメ	ヨコ工具ナデ	灰(7.5Y5/1)	黄褐(2.5Y5/3)	口径 54.0 cm 器面・断面に漆付着
33	378	651　1122　1227 1554　1571　1575 1819　1822　1824 1826　1827　1828 1831　1836　1840 1841　1845　1915 1919　1921　1922 1923　1946　1948 1951	1b 1c SK1	中世	陶器	備前焼	甕	－	ヨコハケメ	ヨコハケメ	灰(N4/)	灰(N5/)	外面自然釉

第26表　遺構内出土鉄製品観察表

挿図	No	取上No	遺構名	時代	分類	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
29	309	1882	SD1	不明	鉄製品	釘	6.4	2.2	1.3	22.4	
	310	1878	SD1	不明	鉄製品	釘	7.7	1.5	1.0	12.3	
31	366	1228	SK1	不明	鉄製品	釘	5.0	1.1	0.9	5.9	

第27表　時期不定遺物観察表

挿図	No	取上No	層	時代	分類	器種	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	備考
33	379	－	1b	不明	土製品	焙烙	ナデ	ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
	380	705	1b	不明	土製品	土錘	－	－	にぶい黄橙(10YR7/4)	－	
	381	－	1b	不明	土製品	坩堝	－	－	－	－	
	382	1280	1c	不明	土製品	鞴羽口	－	－	－	－	

第28表　近代及び時期不定遺物観察表

挿図	No	取上No	層	時代	分類	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
33	383	－	1b	不明	鉄製品	鉄滓(流動滓)	－	5.1	3.6	2.3	41.4	磁力反応あり
	384	1655	1c	不明	鉄製品	不明	－	9.7	0.9	0.6	28.2	
	385	39	1b	不明	鉄製品	鉄滓(碗形滓)	－	6.1	4.7	2.9	129.0	磁力反応あり
	386	813	1b	不明	鉄製品	鉄滓(再結合滓)	－	7.8	5.3	1.8	129.2	磁力反応強い
	387	224	1b	不明	石器	砥石	砂岩	8.9	4.5	3.9	206.5	
	388	107	1b	近代	金属製品	弾丸	－	5.9	1.3(最大径)	－	41.4	アメリカ軍航空機装備「12.7 mm重機関銃」

第5章　総　括

第１節　縄文・弥生時代

縄文あるいは弥生時代に位置づけられる遺構は確認されず、遺物は包含層や他時期の遺構内からわずかに認められただけであった。

縄文時代の遺物について、縄文後・晩期に比定される土器が66点（包含層出土39点・遺構内出土27点）認められ、６類に細分した。それらを既存の型式に比定させると以下のとおりである。

１類：宮之迫式（１点）
２類：中岳Ⅰ・Ⅱ式（28点）
３類：入佐式（新）～黒川式（古）粗製深鉢（31点）
４類：入佐式（新）～黒川式（新）精製浅鉢（２点）
５類：入佐式（新）～黒川式（古）粗製浅鉢（２点）
６類：黒川式組織痕土器（２点）

石器は石製土堀具・磨製石斧・磨石・剥片が認められており、それらは中岳式または入佐式（新）～黒川式の時期に属すると考えられる。

弥生時代の遺物は土器のみ４点認められ、３類に細分した。それらを既存の様式に比定させると、以下のとおりである。

１類：山ノ口Ⅱ式（弥生中期後半）
２・３類：中津野式（弥生終末～古墳初頭）

出土遺物の中で、縄文土器１類のみがⅡ層から出土し、その他はⅠｂ層あるいは溝状遺構の埋土の可能性も考えられるⅠｃ層から出土している。つまり、本来の遺物包含層のほとんどは溝状遺構により削平されていると考えられる。

第２節　古墳時代

本遺跡の中心となる時代の一つである。

古墳時代後期の笹貫式土器新段階の時期が主である。竪穴建物跡が２軒検出され、集落跡であったことが明らかとなった。

１　遺構

竪穴建物跡が２軒重複して検出された。調査区外に延びていることから全形は不明だが、約5.0×5.0mの隅丸方形プランを呈すると考えられる。柱穴は４基検出でき、２基ずつそれぞれ２軒の竪穴建物に伴うと考えられ、方形４主柱型の竪穴建物となる。

新しい竪穴建物（SI ２）には貼床があり、竪穴中央付近には貼床上面が硬化した面が認められた。生活面として使用され、頻繁な踏み固めにより硬化したものと考えられる。硬化していない箇所はおそらく床板や敷物が敷かれ、寝所等に利用されていた可能性もある。

掘方はⅢ層に達しており、その底面は西に向かって傾斜している。この傾斜は地形の傾斜に沿ったものであり、水はけを考えてアカホヤ火山灰層であるⅢ層を掘方の基盤層にした可能性が考えられる。

炉やカマド等の生活施設は認められなかった。都城盆地の都城市鶴喰遺跡では本遺跡と同時期のカマド付竪穴建物が検出されている。竪穴の南壁中央付近に被熱した礫が並んでいたことからカマドの可能性も考えられたものの、カマドとは認定できず、支脚も認められなかった。

出土遺物は多く、土器・須恵器・石器・鉄製品が認められている。土器は古墳時代後期の笹貫式新段階に位置づけられるものである（中村2009a）。器種には甕・甑・壺・高坏・坏・台付鉢・坩・蓋があり、その中でも甕が最も多い。甕は口縁部にいくつかバリエーションがある一方、底部は全て平底で、底面に木葉痕が残るものがある。また内外面に粘土帯接合痕が目立ち、外面調整にはミガキ調整が行われる。なお、土器についての詳細な説明は次項で述べる。

古い竪穴建物（SI １）に伴うと考えられる遺物は少ないが、SI １・SI ２ともに木葉痕が残る甕の底部が出土していることから、両者の時期差はそれほど大きくないと考えられる。

須恵器はTK209～217型式に比定される坏身と長脚二段透しの無蓋高坏、それらよりも古いTK10型式に比定される坏身が認められる。無蓋高坏が下位のレベルから出土しており、検出された竪穴建物跡は７世紀前半頃に位置づけられる。

鉄製品では県内において出土例の少ない方頭鏃が認められており、注目できる。

２　遺物

本遺跡出土遺物の中で最も出土量が多い。そのほとんどが古墳時代後期の笹貫式に位置づけられ、中でも笹貫式新段階のものが多い。器種としては甕・甑・壺・高坏・坏・台付鉢・坩・蓋が認められる。

以下、各器種について説明を行い、その後器種組成や時間的位置づけ、他地域との比較等の検討を行う。

甕　口縁部形態に幾つかバリエーションがある。口縁部が直行する65は辻堂原式に位置づけられる。その他は笹貫式に位置づけられ、形態の違いは形式差と考えられる。

底部形態は全て平底であり、脚台は認められない。しかも、底面に木葉痕を残すものが約40％を占める。葉の樹種は、オオタニワタリ以外は同定できなかった。底面に接合痕がドーナツ状に残るものがあり、製作技法がうかがえる。

口縁部に１条の突帯を有するものが多く、刻目突帯や絡縄突帯が認められる。刻目突帯について、幅広でまば

らな刻みを有するものと細長く比較的密な刻みを有するものが存在する。報告書掲載遺物からは前者が多い印象を与えるが、未掲載遺物を含めると後者が多い。なお、口縁端部外面に刻目突帯を有するものがあり、一見縄文時代晩期末の刻目突帯文土器を思わせる。ただし刻目に布目痕があり、判別は可能である。個体数が少ないことから（全口縁部片中、約0.3%）、イレギュラーな存在と考えられる。

なお、幅広でまばらな刻みを有するものは器壁が薄手で、細長く比較的密な刻みを有するものは器壁が厚手の傾向がある。前者は73・74などで、器形の割に厚さはそれぞれ0.5cm・0.8cmであり、後者は65・68・69などで、厚さはそれぞれ1.1cm・0.8cm・1.0cmである。

外面調整は突帯上位はヨコナデ調整、突帯下位はミガキ調整、底部はタテケズリ・タテ工具ナデ調整を行うものが多い。また内外面に粘土帯接合痕が目立つものが多く、その接合痕から推定される粘土帯の幅は1.0～1.5cmのものが多い。この接合痕が目立つものは笹貫式新段階に多く認められ、65のように外面に接合痕が認められない辻堂原式のものとは様相が異なる。

甑　全て筒抜けタイプで、多孔タイプは認められない。また把手も認められなかった。

壺　中～小形のもので、無文あるいは頸部のみに突帯を巡らせるものである。胴部は細長いものと球胴状のものがある。底部は平底あるいは丸平底を呈する。

高坏　坏部が屈曲するものと椀形のものが認められ、後者が多い。赤色顔料を塗布するものは少ない。また「円錐塊充填法」により製作された脚部の「充填用円錐塊」が認められた（角南2000）。

坏　椀形を呈するものが多く、須恵器を模倣したような口縁部が短く屈曲するものは認められていない。器面はミガキ調整や丁寧なナデ調整を行う。

鉢 / 台付鉢　竪穴建物出土の１点のみ確認した。広口のもので、被熱している。

坩　竪穴建物出土の１点のみ確認した。球胴状のもので、赤色顔料が塗布される。

蓋　器高の浅いものを蓋とした。器面はミガキ調整や丁寧なナデ調整を行う。

器種組成について　高坏と坏を比較すると、両者の判別が難しい資料も多いものの坏が多く、坏主体の器種組成を示す。この様相は、坏がある程度存在するものの高坏主体の器種組成である６世紀代（辻堂原式～笹貫式古段階）の様相とは異なる点である。この他、甑が認められる一方、坩はほとんど認められない。

時間的位置づけ　最近、中村直子氏は７・８世紀代に位置づけられる「成川式土器」つまり笹貫式新段階について検討を行い、その特徴を抽出している（中村2009a）。それによると、肝属平野や都城盆地における笹貫式新段階の特徴として、①太くまばらな刻目、②器面に残る粘土帯接合痕、③甕の器面に施されたミガキ調整、④甑の安定的出土、⑤広口で浅いタイプの坏の存在を挙げている。これらの特徴は安良遺跡出土資料にあてはまるものであり、本遺跡は笹貫式新段階を中心とする時期に位置づけられる。

より詳しい年代について須恵器から検討してみる。古いものではTK10型式に比定される坏蓋（137）があるものの、全体的にみるとTK209～TK217型式に比定されるものが多い。従って、本遺跡資料は主に７世紀前半頃に位置づけられる。

なお、中村氏が挙げた特徴③のミガキ調整について、丁寧なものと粗いものの２種類があり、後者は器壁を薄く仕上げるためのケズリに近い調整ではないかとの指摘をしている。73・74のように器壁の薄いものが存在することから、氏の指摘は的確なものと言える。

他遺跡・他地域との比較　安良遺跡資料、特に甕について、志布志市内の他遺跡や他地域と比較を行う。上述したように、本遺跡出土の甕の特徴は①底部が平底となり、②底面に木葉痕が残るものが多く、③内外面に粘土帯接合痕が目立ち、④口縁部形態に様々なバリエーションが認められることである。

平底を呈する甕は、肝属平野では志布志市宮脇遺跡・上苑Ａ遺跡・仕明遺跡、都城盆地では鶴喰遺跡、加久藤盆地ではえびの市佐牛野遺跡・妙見遺跡において認められており、底面に木葉痕が残るものもある。

内外面に接合痕が目立つ甕は宮脇遺跡・上苑Ａ遺跡、鶴喰遺跡など、肝属平野や都城盆地で認められる。

宮崎平野の様相について、当地域の古墳時代中～後期の土師器の編年を行った今塩屋毅行・松永幸寿両氏はその編年の７期（TK43～209型式併行）において、甕の内外面の接合痕が明瞭になり、次の８期（TK217型式併行）までこの傾向が続くとしている（今塩屋・松永2002）。また、甕や鉢の平底となる底面に木葉痕が残るようになるとしている。そしてこれらをまとめ、内外面の接合痕が顕著で、底部に木葉痕が残り、胎土に砂粒が多く含まれる甕を７世紀代の「日向型甕」としている。このことから、本遺跡資料の特徴①～③は宮崎平野の甕にも認められることが分かる。

肝属平野や都城盆地において器面に接合痕が残ることについて、中村氏は土器様式圏を超えた近隣地域間での製作技法の共有が認められると指摘している（中村2009a）。このことは底部形態も同様であり、しかも加久藤盆地にまで広がっている。

甕の口縁部形態について、中村氏はバケツ形と「く」字状に短く外反するものの２種に分類し、後者を土師器との折衷系と捉えている（中村2009b）。「く」字状に短く外反する口縁部は、宮崎平野では６期（TK10～

MT85型式併行）に認められるものであり、その影響が考えられる。また、口縁端部に粘土紐を貼付し肥厚させるものは「く」字状に短く外反する口縁部を意識して製作された可能性も考えられる。

第３節　古代

確実に古代に位置づけられる遺構は認められず、主に包含層から土師器坏・椀・甕、須恵器、黒色土器、製塩土器などの遺物が認められている。

その中で、土師器坏の出土量が多いものの、全形が把握できるものは少ない。そのため、法量が分からず、時期比定は難しい。ただし、充実高台をもつ土師器坏の存在から、９世紀後半前後に位置づけられる。

第４節　中世

本遺跡の中心となる時代の一つである。

確実に中世に位置づけられる遺構は認められなかった。遺物は土師器坏･皿、須恵器、瓦質土器、国産陶器、滑石製品そして輸入陶磁器が認められる。

１　遺物

遺物の種類毎に時期などについて説明していく。

土師器　坏と皿が認められ、小片を含めると多量に出土している。しかし、口縁部片や摩滅しているものが多く、古代の土師器と判別困難なものが多い。

本遺跡資料の大きな特徴としては、底部切り離し技法に糸切りとヘラ切りが併存していることが挙げられる。口径について坏は、①12cm前後／②11cm前後の２つに区分でき、皿は①10cm以上／②９cm前後／③8.5cm前後／④8.1cm前後／⑤7.5cm前後／⑥７cm以下の６つに区分できた。色調及び胎土は、浅黄橙色系の粉っぽい胎土がほとんどである。

これらの年代について、志布志地方と歴史的に関係の深い都城盆地における中世土師器の編年を提示した桒畑光博氏の研究（桒畑2004）を参考に考えてみたい。

桒畑氏は一括資料を提示し、それらと共伴した輸入陶磁器や国産陶器から時間的位置づけを行っている。その一括資料と本遺跡資料（特に資料数の多い皿）を比較すると、皿①は一括資料②（12世紀前半～中頃）、皿②は一括資料③・④（12世紀後半～13世紀前半）、皿③は一括資料⑤（13世紀初頭～中頃）、皿④は一括資料⑥（13世紀末～14世紀初頭）、皿⑤は一括資料⑦・⑧（14世紀前～後半）、皿⑥は一括資料⑨・⑩（14世紀後半～15世紀中頃）にそれぞれ比定できる。坏に関しては、一括資料④～⑥に比定できる。

桒畑氏は13世紀後半から14世紀前半（一括資料⑥・⑦の時期）に都城盆地の東部ではヘラ切りが一定量を占めるとしている。本遺跡資料も口径が8.1cm前後の皿④にあたり、一括資料⑥の時期に相当する。

須恵器　東播系須恵器や樺番城窯須恵器が認められる。東播系須恵器について、口縁端部がわずかに肥厚し丸味をもつものは森田編年Ⅱ期２段階（12世紀末～13世紀初頭）、肥厚帯が目立ち端部内面に稜を有するものは森田Ⅲ期１段階（13世紀前～後半）に比定される（森田稔1995）。樺番城窯須恵器について、詳細な年代は不明であるが、操業時期は13世紀中葉頃とされている（美濃口2010）。

常滑焼　甕は口縁部が断面「N」字状を呈するもので、縁帯幅が約３cmとなり、胴部外面の押印文が帯状連続施文のものと省略したものが認められる。これらの特徴から、赤羽・中野編年６a～６b期（13世紀後半）に位置づけられる（中野1995）。片口鉢は６b期頃と考えられる。12世紀～13世紀初頭の文様技法とされる三筋文を有するものもある。

備前焼　甕は全て口縁端部が玉縁状を呈するもので、やや丸味をもつものとやや扁平なものが認められる。前者は乗岡編年中世２b期（14世紀前半）、後者は中世３期（14世紀中頃～15世紀前半）に位置づけられる（乗岡2005）。還元焔焼成により青灰色を呈するものや外面の最終調整がハケメのものが多いことなど、比較的古手の様相を示すことから、中心となるのは14世紀前半頃と考えられる。なお、櫛描波状文を施すものは中世４期（15世紀中頃）に位置づけられる。

その他　出土量の少なかった瓦質土器、瀬戸･美濃焼、滑石製石鍋について述べる。瓦質土器は三足深鉢で、15世紀後半～16世紀頃に位置づけられる。瀬戸・美濃焼は口径24.0cmの折縁深鉢で、古瀬戸中期様式Ⅱ期で14世紀初頭に（藤澤2007）、滑石製石鍋は鍔が断面不等辺台形となるもので、木戸編年Ⅲ-ｃ～ｄ類で14世紀代に位置づけられる（木戸1995）。

輸入陶磁器　分類と年代観は主に大宰府の貿易陶磁編年（太宰府市教委2000）に準拠し、その他、白磁については森田勉氏の研究（森田1982）、青磁については上田秀夫氏の研究（上田1982）を参考にした。

白磁について、玉縁口縁の碗Ⅳ類は大宰府編年Ｃ期（11世紀後半～12世紀前半）、口縁端部が屈折し内面に櫛目文を施す碗Ⅴ-４類はＤ期（12世紀中頃～後半）、口禿げの碗・皿Ⅸ類はＦ期（13世紀中頃～14世紀初頭）に比定される。この他、森田Ｄ群に比定される小形の皿は15世紀頃に位置づけられる。

青磁について、内外面無文の碗Ⅰ-１類・内面に飛雲文・花文をもつ碗Ⅰ-６類・内外面無文でベタ底状となる小碗Ⅰ-1'ａ類・内面に櫛目文をもつ皿Ⅰ-２類はＤ期に比定される。外面に蓮弁文を施す碗Ⅱ類はＥ期（13世紀初頭～前半）に、口縁端部が屈折する坏Ⅲ類はＦ期に比定される。この他、口縁部外面に雷文帯をもつ上田Ｃ類碗は15世紀前後、線描蓮弁文をもつ上田Ｂ-Ⅳ類碗は15世紀後半に位置づけられる。

青白磁合子はＣ～Ｄ期に、陶器盤１類の黄釉鉄絵盤は

11世紀後半～12世紀前半に位置づけられる。青花は漳州窯系のもので、16世紀末頃のものと思われる。

2　出土遺物の様相

ここでは各遺物をまとめ、さらに輸入陶磁器の組成を含めて、同一時間幅における出土遺物の様相について述べる。時期区分の設定は大宰府編年を援用する。輸入陶磁器組成の把握については、接合後に部位や残存度に関わらず全ての破片を１点としてカウントした。

C期（11世紀後半～12世紀前半）

土師器皿①の時期である。輸入陶磁器には白磁碗Ⅳ類がある一方、青磁はみられない。また、輸入陶器盤Ⅰ類の黄釉鉄絵盤がある。輸入陶磁器が認められる最も古い時期であるが、出土量は少ない。

D期（12世紀中頃～後半）

土師器皿②の時期である。白磁は碗Ⅴ-４類、龍泉窯系青磁の碗Ⅰ類・小碗Ⅰ類・皿Ⅰ-２類がある。なお、調査面積にもよるが、この期に存在する同安窯系青磁が本遺跡では認められないことには注意したい。この頃に三筋文をもつ常滑焼が流入した可能性がある。

E期（13世紀初頭～前半）

土師器皿②・③の時期である。白磁はみられず、龍泉窯系青磁は碗Ⅱ類のみである。この時期から東播系須恵器（Ⅱ期２段階）が認められるようになる。輸入陶磁器の出土量が最も多い時期である。

F期（13世紀中頃～14世紀初頭）

土師器皿④の時期である。龍泉窯系青磁は坏Ⅲ類のみ、白磁は碗・皿Ⅸ類であり、E期に比べると出土量は減少する。一方、国産陶器が認められるようになる。常滑焼（6a･6b型式）やわずかに瀬戸･美濃焼（中期様式Ⅱ期）があり、この時期に東海系陶器の産地との関わりがあったことがうかがえる。東播系須恵器もこの時期まで存在し、加えて樺番城窯系須恵器も認められるようになる。

G期（14世紀初頭～後半）

土師器皿⑤・⑥の時期である。輸入陶磁器は認められない。国産陶器では備前焼（2b～3期）がみられ、滑石製石鍋（Ⅲ-c～d類）もみられる。

15世紀頃

土師器皿⑥の時期である。輸入陶磁器は白磁森田D群や龍泉窯系青磁碗上田B-Ⅳ類・C類が認められるが、極少量である。備前焼や瓦質土器もあるが、これらも少量である。

以上のことから、本遺跡の中世遺物は11～15世紀のもので構成され、その中でも12世紀中頃～13世紀代が中心となる。

全国的には12世紀後半に輸入陶磁器が普及する。また、常滑焼が全国的に供給されるのは12世紀後半以降で、西日本における盛期は13世紀後半～14世紀中頃となる。東播系須恵器鉢もほぼ同じような様相を示す。ところが、14世紀中頃～後半になると常滑焼や東播系須恵器が姿を消し、備前焼や瓦質・土師質の在地鉢が増加するようになる。このような西日本の様相（荻野1995、山本・山村1997他）と比較すると、本遺跡の様相は西日本の様相に合致したものと言える。

第29表　中世前期輸入陶磁器組成表

時期	分類	数	割合	各期の割合
C期	白磁碗Ⅴ類	9	5.9%	6.5%
	陶器盤Ⅰ類	1	0.7%	
D期	白磁碗Ⅴ－４類	2	1.3%	9.8%
	青磁碗Ⅰ－１類	1	0.7%	
	青磁碗Ⅰ－４類	8	5.2%	
	青磁碗Ⅰ－６類	1	0.7%	
	青磁皿Ⅰ－２類	1	0.7%	
	青磁小碗Ⅰ－1'a	1	0.7%	
	青白磁合子	1	0.7%	
E期	青磁碗Ⅱ類	56	36.6%	36.6%
F期	白磁碗Ⅸ類	20	13.1%	20.3%
	白磁皿Ⅸ類	6	3.9%	
	青磁坏Ⅲ類	5	3.3%	
15世紀頃	森田白磁D群	1	0.7%	2.6%
	上田青磁B－Ⅳ類	2	1.3%	
	上田青磁C類	1	0.7%	
－	白磁壺	2	1.3%	－
	不明白磁	21	13.7%	
	不明青磁	13	8.5%	
	不明陶器	1	0.7%	
合計		153	100.0%	

3　遺跡の性格と流通について

本遺跡では碗・坏・皿の食膳具以外に青白磁合子・白磁壺・黄釉鉄絵盤が認められている。

ところで、山本信夫氏は南さつま市持躰松遺跡の評価を行う際に、輸入陶磁器の質の評価を行っており、器種･少数産地例・特殊品・希少品など何らかの付加価値をもつ陶磁器をA～Cの３段階に分けている（山本2003）。その中で、青白磁合子・白磁壺をレベルB、黄釉鉄絵盤をレベルCの構成品として挙げている。

このように、本遺跡からは一般的食膳具以外にも付加価値をもつ陶磁器が出土しており、一般階層よりは物質を優位に獲得できる富裕な階層の存在がうかがえる。この点については、次項でより詳しく述べる。

それでは、これら輸入陶磁器や国産陶器がどこからもたらされたのか、その流通について考えてみたい。

志布志の地名について、正和五年(1316年)11月３日『沙弥蓮正打渡状』で「日向方嶋津御庄志布志津大沢水宝満寺敷地…」とあるのが、史料上の初見である。このことから、前川河口が島津庄日向諸県郡一帯の港として機能していたと考えられている(志布志町誌編委1972)。また、島津庄内の貿易について坊津以外にも油津や志布志津も含まれる可能性が指摘されている（小山2009）。

この「志布志津」の評価について、中世前期の南九州の拠点的な港の一つとして志布志津を挙げた柳原敏昭氏は、北条氏によって行われてきた瀬戸内海から九州東岸にかけての海上交流路の整備が鎌倉時代末期になってその西端にまで到達したものとしている（柳原1999）。吉岡康暢氏は、13世紀後半～14世紀後半において西の万之瀬川湊と並んで東に位置する、南島に開かれた拠点港湾

と考えている（吉岡2011）。

ところで、本遺跡では志布志津の初見である14世紀初頭より以前の輸入陶磁器も認められる。それでは12世紀後半～13世紀代の輸入陶磁器がどこから流入してきたのか、つまり志布志津の存在がいつまで遡るのかということを考えてみたい。

堀田孝博氏は古代後半期（８世紀末～11世紀前半期）の陶磁器類の検討から、都城盆地への陶磁器類の流入ルートについて言及している（堀田2009）。８世紀末～10世紀中頃（大宰府編年Ａ期）には北部九州－薩摩国北西部－日向国諸県郡西部のルートと畿内－日向国南部－都城盆地のルートの２つが存在し、東西方向からの人・物の動きを想定している。しかし、この２ルートはいずれも都城盆地が終着点であり、その先へは延びていないとしている。

一方、10世紀後半～11世紀前半（大宰府編年Ｂ期）には都城盆地における陶磁器等の分布が南半に集中しており[1)]、その背景に商人による南島方面交易ルートの開発を想定している。そして、南九州国府勢力との富を巡る緊張関係の存在から前代の２ルートを踏襲せず、北・中九州－人吉盆地－加久藤・都城盆地のルートが人・物をもたらすとしている。

このことから、10世紀後半～11世紀前半には九州と南島との交易活動の拠点の一つであった都城盆地の港として、前川河口の「志布志津」が存在していたと考えられ、本遺跡の輸入陶磁器類は志布志津で陸揚げされたものがもたらされた可能性がある。

ちなみに流通ルートについて、山本氏は筑前・博多・大宰府を経由しない畿内・瀬戸内からの東・南回りルートを想定しており（山本2003）、本遺跡の陶磁器類もこのルートによりもたらされた可能性が考えられる。

【註】

1）12世紀代も11世紀代の傾向を引き継いで、都城盆地中南部を中心に遺跡数が急増し、特に大隅半島との窓口にあたる盆地南部における遺跡密度が注目されている（桒畑2009）

4　安良遺跡の歴史的位置づけ

本遺跡出土の中世陶磁器の年代を見ると、青磁・白磁は11世紀後半から少し認められるようになり、13世紀代で出土量がピークを迎える。一方、13世紀後半以降には備前焼や常滑焼等の国産陶器が増え始めており、国内の陶器産地と交流があったことが窺える。その後、中世陶磁器類の量は減少する。

さて、これら陶磁器の年代と志布志地方の歴史を重ねて見てみたい。志布志地方のことが、文献で初めて登場するのが12世紀後半のことである。その頃、志布志地方は日向諸県郡救仁院とされ、当時この地方を治めていたのが救仁院氏である。

救仁院氏関連の文書には、1189年頃、安楽平九郎為成が、兄である救仁院平八成直に代わって平家により救仁院の地頭弁済使に補任されていたので、源頼朝が改任し改めて成直に安堵するように下文を出したものがあり、為成の「安楽」という姓はおそらく地名よりとっていたと思われる（志布志町誌編委1972）。

この安楽という場所は、安良遺跡を含む旧志布志町の西部一帯を指し、大字として残っている地名である。安良遺跡より約1.4km 北に為成の居城とされている安楽城跡があり、その100m 南に川を隔てて、貴重な中世遺物を多数有する安楽山宮神社1）も存在している。つまり、中世初期の12世紀前後に志布志地方を治めていた救仁院氏が、この安楽地区一帯を中心に居を構えていたことが推測できる。

本遺跡で出土した中世前期の輸入陶磁器、特に貴重品である青白磁合子や白磁壺、黄釉鉄絵盤は、当時の一般階層が持ち得たとは考えにくく、在地領主など有力者の使用と考えられる。時代背景や出土遺物年代・性格をふまえると、安良遺跡を中心とした地域に救仁院氏をはじめとする当時の領主が居を構えていたのではないだろうか。

また、志布志町誌には「安楽城の南方一粁、安楽台地海岸向かって断層をなしている現在の安良部落の一角に「あんらくし」とよばれる区域があり古い寺院の跡とも言われるが、（中略）志布志関係の文書に安楽寺の記録はないが或いは安楽氏関係のものであるかもしれない」とあり（志布志町誌編委1972p108）、加えて近隣に安楽神社があること、遺跡周辺の集落を小字にはない「安良（安楽）」と呼称することも中世の名残なのだろうか、救仁院（安楽氏）の存在を彷彿させる。

13世紀代、救仁院氏は文献上では姿を消すが[2)]、その後も氏はこの地にとどまり、力を誇示しつづけたとも考えられ、14世紀代以降志布志の中心拠点が志布志城周辺の麓地区に移るまでの間、当時の有力者たちは安良の地を拠点に活動していたのではないだろうか。

今回の調査はとても狭い範囲のものであり、確実に中世に位置づけられる遺構は確認できず、集落としての全体像は掴めてない。しかし、この狭い調査範囲で多くの陶磁器類が出土するということは、安良遺跡周辺が何か重要な地であることは間違いないであろう。今回の調査により中世前期の志布志地方の一様相を窺い知ることができたのは大きな成果である。　（坂元）

【註】

1）伝承によると和銅2年（709）の創建とされており、明治26年に大楠の木を伐採した際、地下より石積みの石室が発見され、中から鎌倉前期の和鏡や青白磁四耳壺蔵骨器、青白磁合子などが出土している。

2）志布志町誌によると、1191年為成が平氏に加担したことや僧を殺したことを理由に、源頼朝により成直の地頭弁済使の職を解任され、島津荘地頭の島津忠久にこれをあたえている。

第５節　近世

確実に近世に位置づけられる遺構は認められず、遺物は薩摩焼陶器や肥前系陶磁器が包含層から出土している。薩摩焼陶器は17世紀後半の山元窯のものがみられるほかは、18世紀代のものが多い。肥前系陶磁器は17世紀代のものとして唐津焼の擂鉢や一重編目文の徳利が認められるほかは、18世紀代が中心である。

以上のことから、近世における本遺跡の中心は17世紀後半～18世紀と考えられる。なお、琉球に多いとされる一重編目文の徳利が本遺跡で認められたことは、志布志と琉球との関係を示唆するものである。

第６節　近代以降・時期不定の調査

１　遺物

近代の遺物の中で注目できるのが、太平洋戦争時にアメリカ軍航空機に装備されていた12.7㎜重機関銃の弾丸である。太平洋戦争末期には安楽川を挟んで対岸の野井倉台地には野井倉飛行場が建設され、また周辺住民によると、本遺跡の北側には陸軍の兵舎があったということである。本遺跡周辺がアメリカ軍に攻撃された際の弾丸であった可能性がある。

時期が確定できなった遺物の中には、鞴羽口や鉄滓、坩堝など製鉄関連の遺物が出土している。今回の調査では遺構は確認できなったが、周囲で見つかる可能性がある。

２　遺構

近代以降と判断できる遺構には古道がある。一方、確実な時期が判断できなかった遺構には溝状遺構、土坑、ピットがある。溝状遺構は東西方向に延びており、台地下へ下る道であった可能性がある。硬化面が認められなかったことから、それほど頻繁に利用されなかったか、流水により地表が削られたためと思われる。

土坑２は２段に掘り込まれていることが特徴であるが、用途は不明である。ピットは７基検出したが、調査範囲が狭いこともあり、掘立柱建物に伴うものかどうかは判断できなった。土坑２・ピットともに埋土中にⅡ層土を含まないことから、溝状遺構によりⅡ層が削平された後、形成されたと考えられる。

土坑１号は掘下げ中に異臭があったことや埋土内出土遺物とＩｂ・Ｉｃ層出土遺物が接合したこと、そしてＩｂ層を掘り込んで形成されたいることから、近世～近代において耕作時あるいは整地時に見つかった土器・陶器片などを廃棄した「ゴミ穴」と考えられる。

なお、これらの遺構の時間的推移を示すと以下のとおりである。

溝状遺構→土坑２号・ピット→土坑１号→古道

（引用・参考文献）

今塩屋毅行・松永幸寿2002「日向における古墳時代中～後期の土師器」『古墳時代中・後期の土師器』第５回九州前方後円墳研究会発表要旨資料集

伊藤実ほか2004「中世陶器の物流－備前焼を中心として－」『日本考古学協会2004年度広島大会研究発表資料集』

上田秀夫1982「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』２

大阪府立近つ飛鳥博物館2006『年代のものさし－陶邑の須恵器－』

荻野繁春1995「西国の常滑焼の出土状況」『常滑焼と中世社会』

金丸武司2006「土器型式の設定」『本野原遺跡三』田野町文化財調査報告書53

木戸雅寿1995「石鍋」『概説中世の土器・陶磁器』

乗畑光博2004「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究（１）」『宮崎考古』19

乗畑光博2009「島津荘の成立をめぐる諸問題」『地方史研究』340

小山博2009「対外貿易と都城」『地方史研究』340

相美伊久雄2004「成川式土器の器種組成について（予察）」『縄文の森から』２

佐藤隆2003「難波地域の新資料からみた７世紀の須恵器編年」『大阪歴史博物館研究紀要』２

志布志町教育委員会2005『志布志町郷土史年表　第二版』

志布志町誌編集委員会1972『志布志町誌』上巻

角南聡一郎2000「「円錐塊充填法」に関する予察」『永野原遺跡』高山町埋蔵文化財発掘調査報告書７

太宰府市教委2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府の文化財（49）

堂込秀人1997「南九州縄文晩期土器の再検討」『鹿児島考古』31

中園聡1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』９

中野晴久1995「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』

中村直子1987「成川式土器再考」『鹿大考古』６

中村直子2009a「７・８世紀の成川式土器」『南九州縄文通信』20

中村直子2009b「８世紀の成川式土器」『隼人、その後』隼人文化研究会400回突破記念例会発表レジュメ

中村和美1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』31

乗岡実2005「備前」『中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年』

藤澤良祐2007「編年表」『愛知県史』別編窯業２

堀田孝博2009「物の動きから見た都城盆地の境界性－古代後半期の陶磁器類を中心として－」『第60回地方史研究協議会大会発表資料』

美濃口雅朗2010「樺番城窯」『古陶の譜中世のやきもの－六古窯とその周辺』

森田勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』２

森田稔1995「中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』

柳原敏昭1999「中世前期南九州の港と宋人居留地に関する一試論」『日本史研究』448

山本信夫1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』

山本信夫2003「12世紀前後陶磁器から見た持躰松遺跡の評価」『古代文化』55-3

山本信夫・山村信榮1997「九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』71

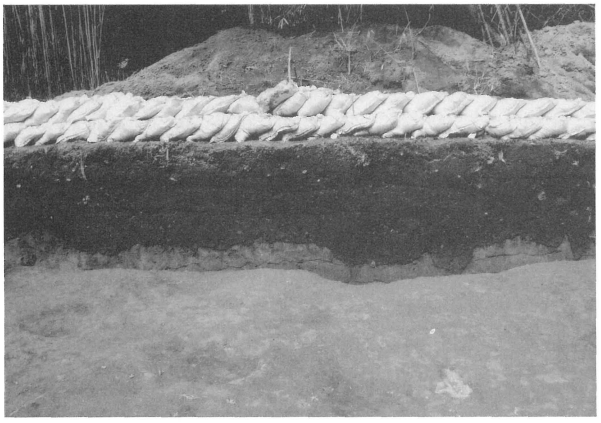
吉岡康暢2011「第３章第３節」『琉球出土陶磁社会史研究』

図　版

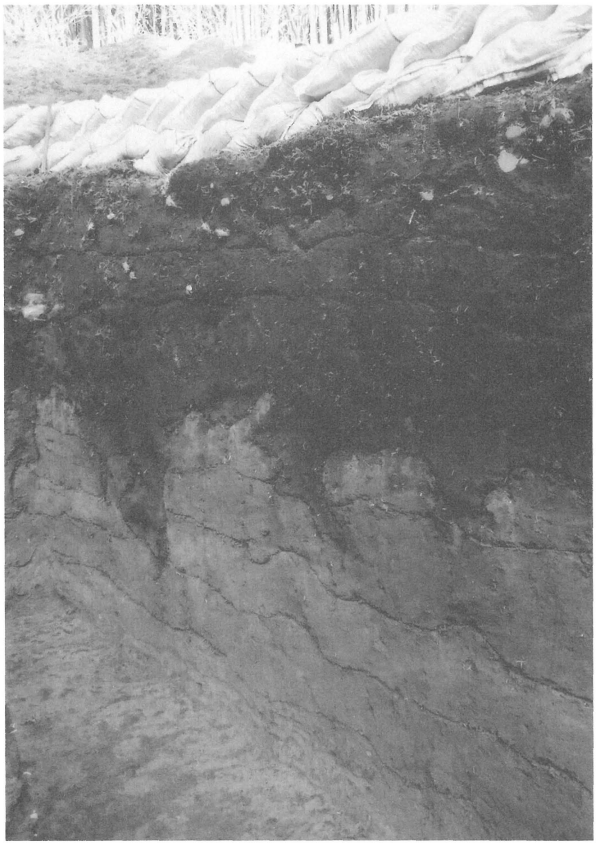
図版１

空中写真（国土地理院　1970年撮影）

遺跡近景（西から）



東壁土層断面（溝２付近）



南壁土層断面（溝１付近）

図版２

西壁土層断面（土坑１付近）

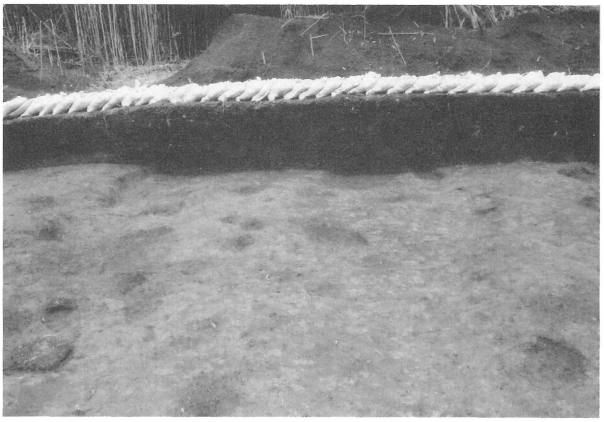
北壁土層断面（竪穴建物跡付近）

古墳時代土器（No.68）出土状況

常滑焼（No.245）出土状況

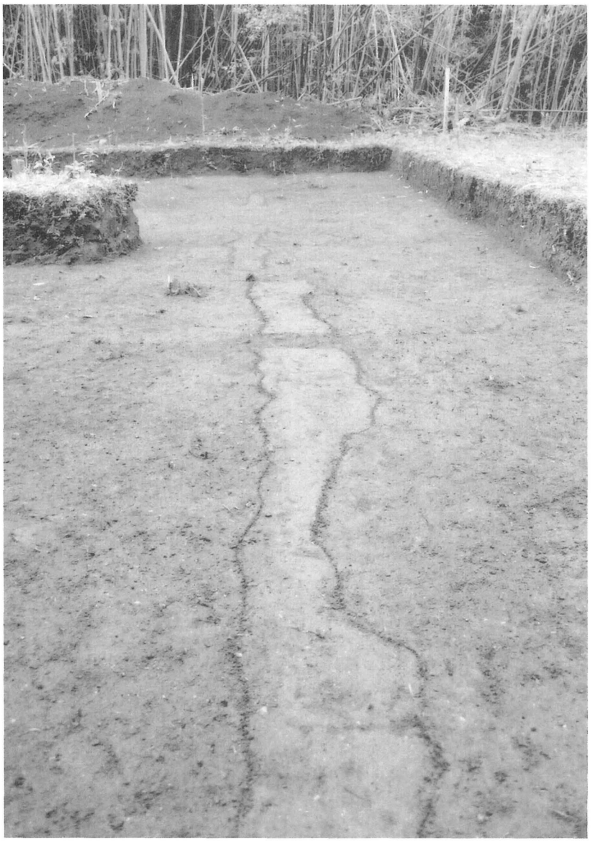
溝状遺構１～４号検出状況（西から）

溝状遺構１号完掘状況（西から）

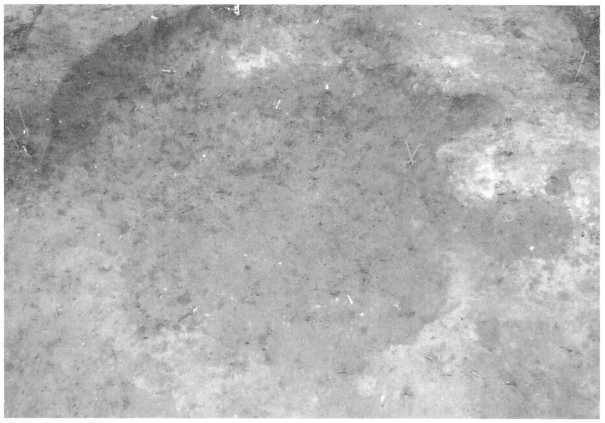


溝状遺構２号完掘状況（西から）

土坑１号遺物出土状況（南東から）



古道検出状況（北から）



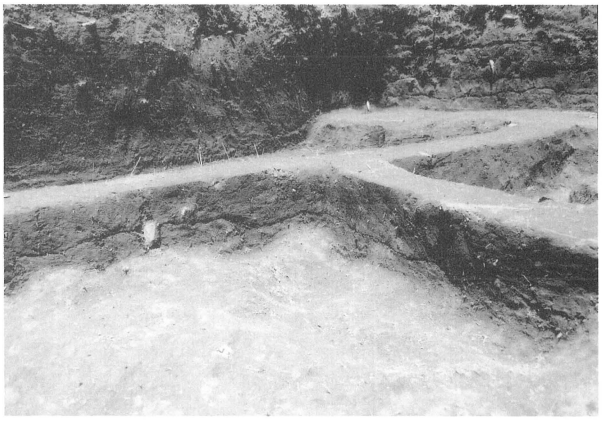
土坑２号検出状況（南から）

土坑２号完掘状況（東から）

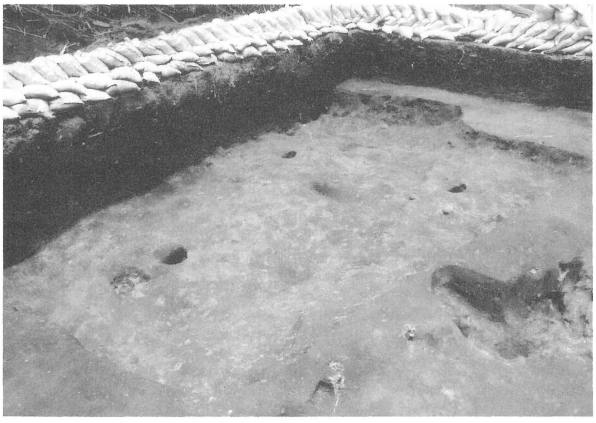
図版４

竪穴建物跡１・２号検出状況（南西から）

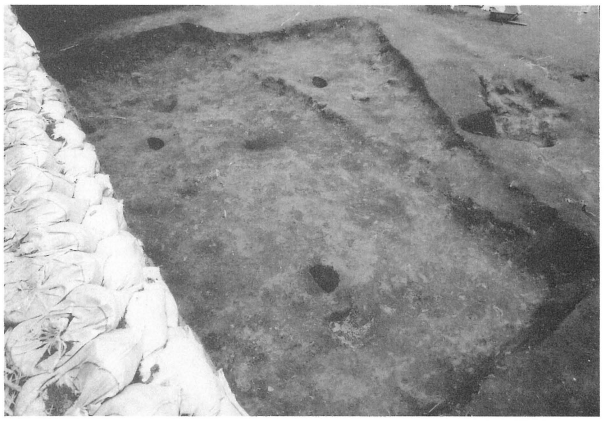
竪穴建物跡１・２号遺物出土状況（No.29）



竪穴建物跡１・２号埋土状況（南西から）



竪穴建物跡１・２号遺物完掘状況（南西から）

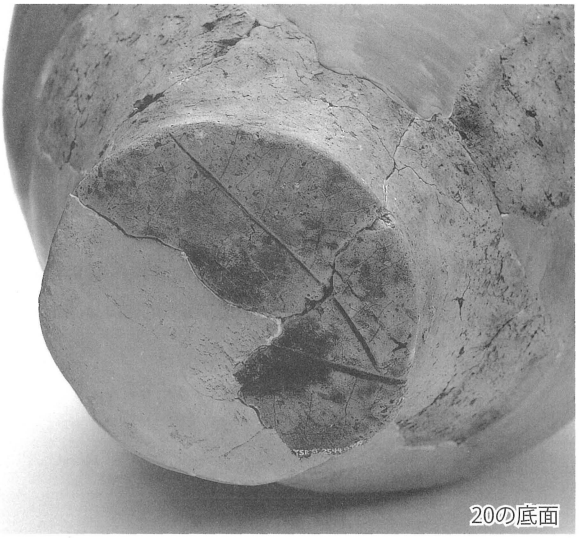


竪穴建物跡１・２号遺物完掘状況（北西から）

縄文・弥生時代遺物

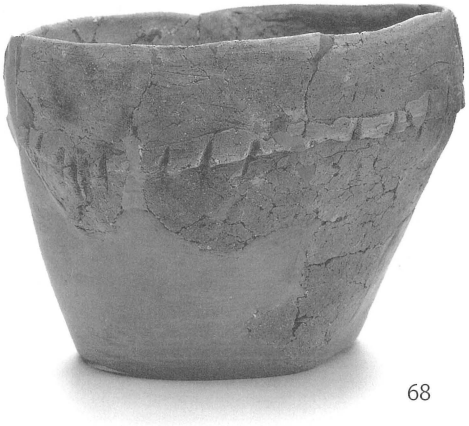
図版６

20



20の底面

119

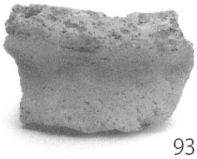


68

82

92

85



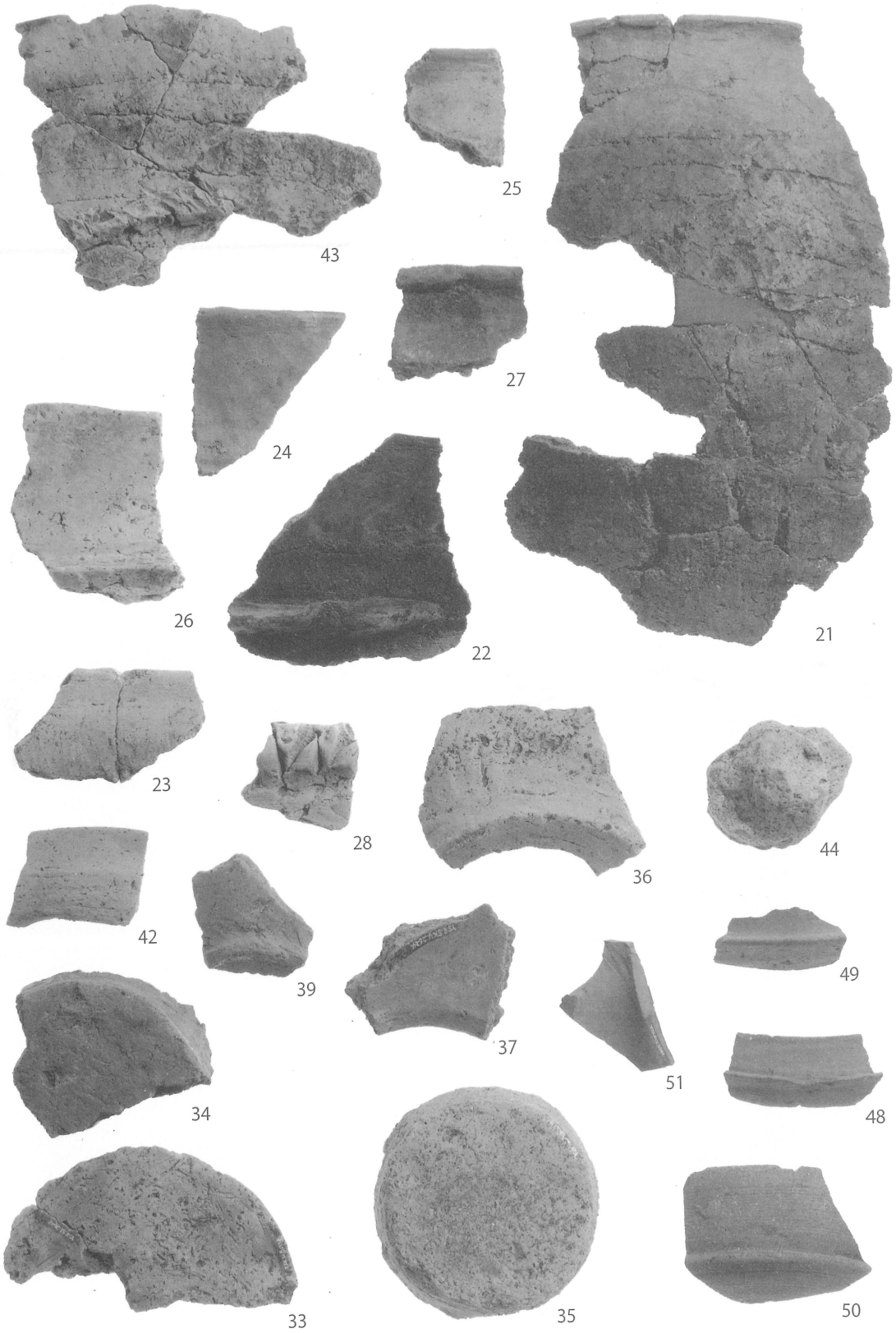
93

104

83

89

古墳時代包含層出土及び竪穴建物跡１・２号出土遺物



竪穴建物跡１・２号出土遺物（１）

図版８

29

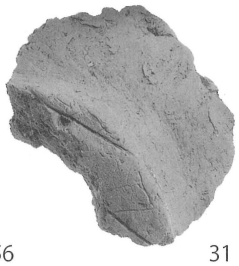
32

29

32

55

56



31

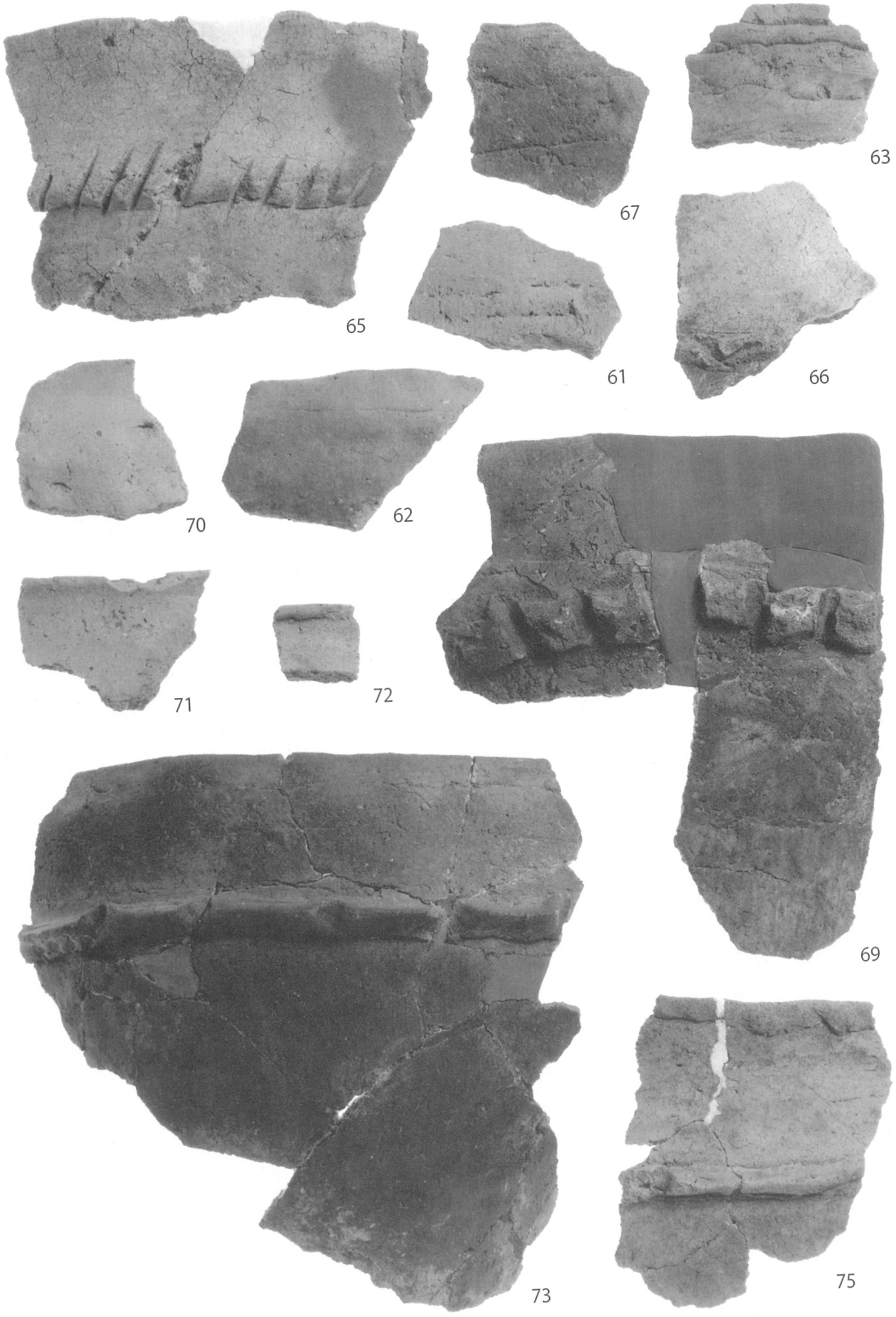
30

53

54

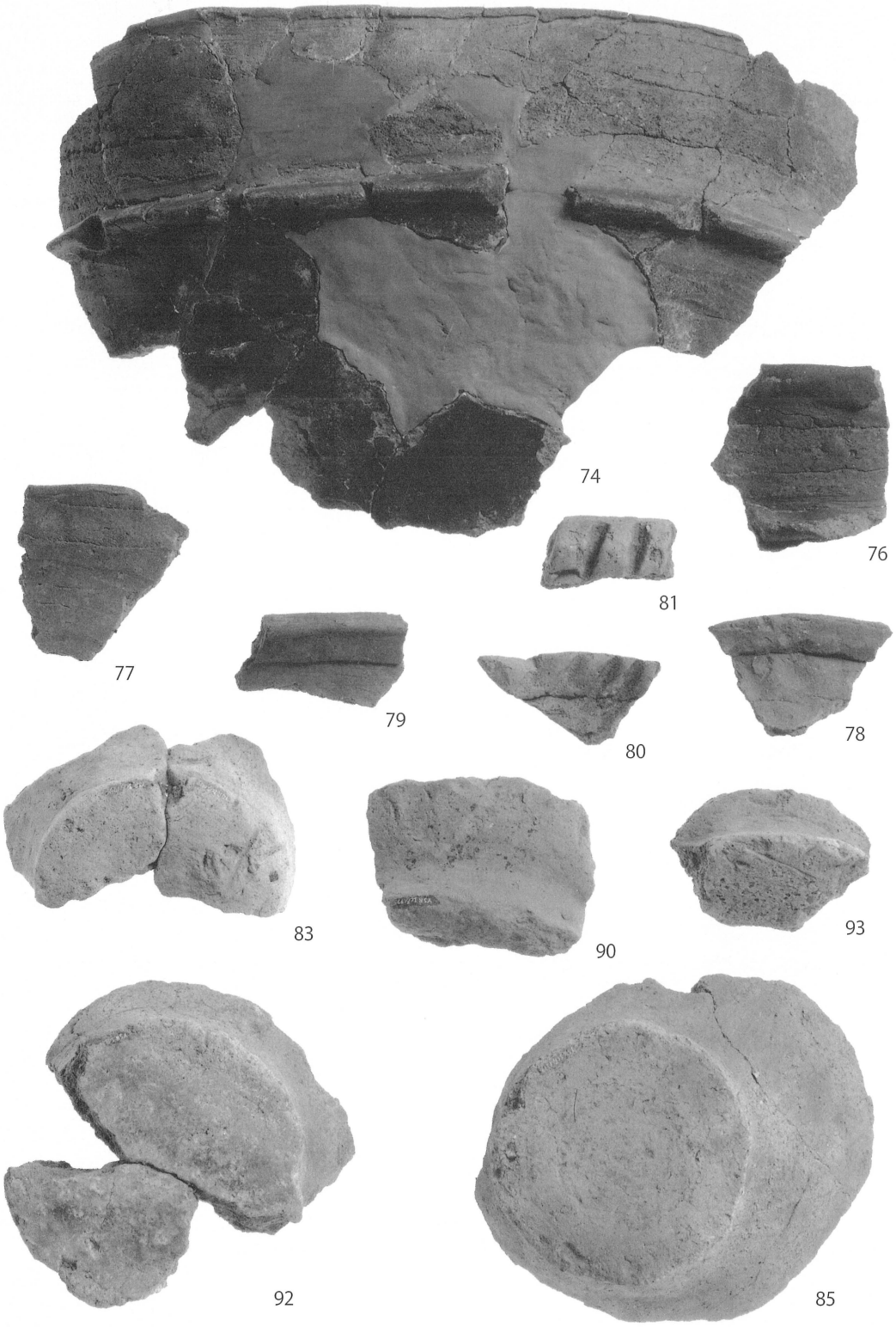
52

竪穴建物跡１・２号出土遺物（２）

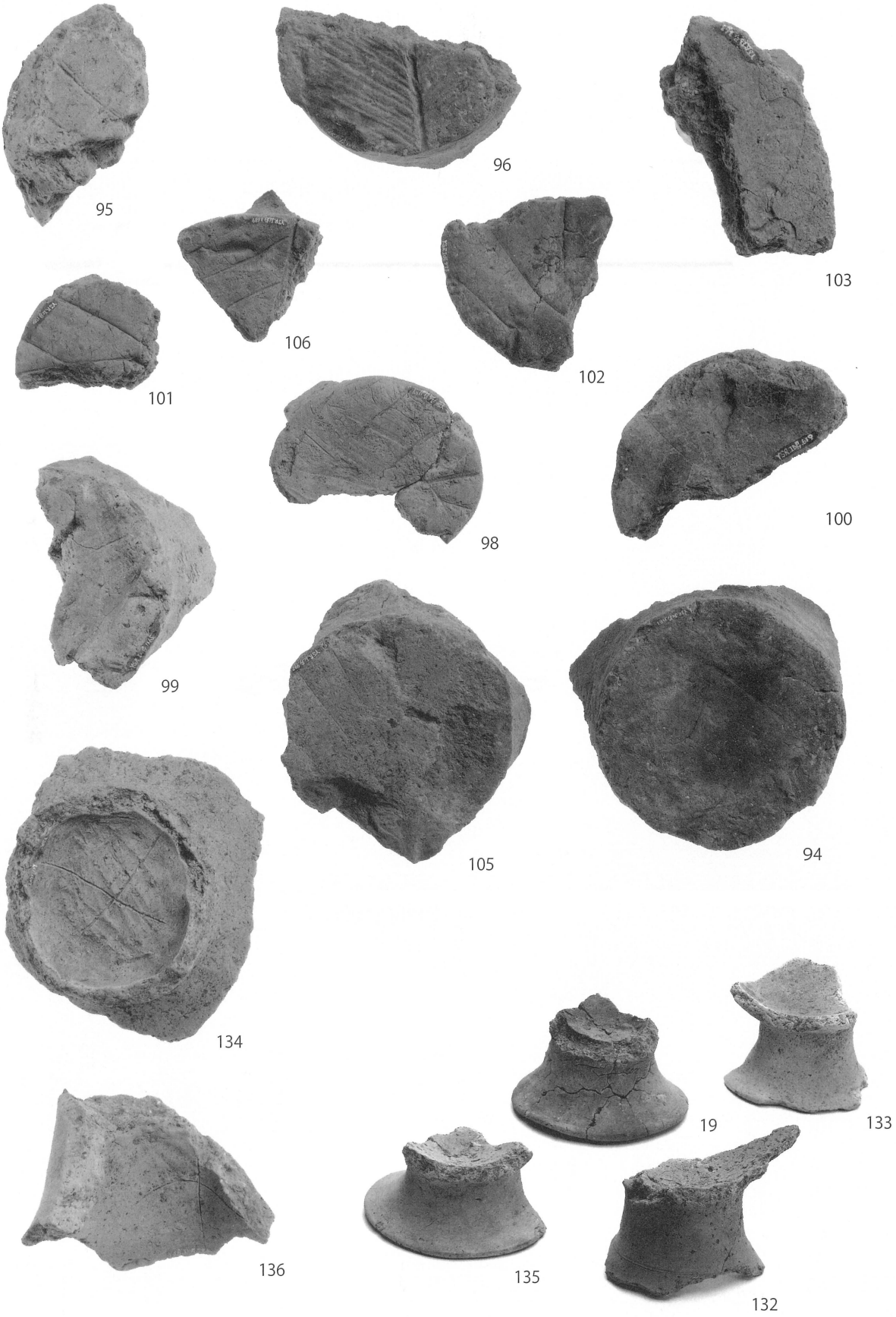


古墳時代包含層出土遺物（１）

図版10

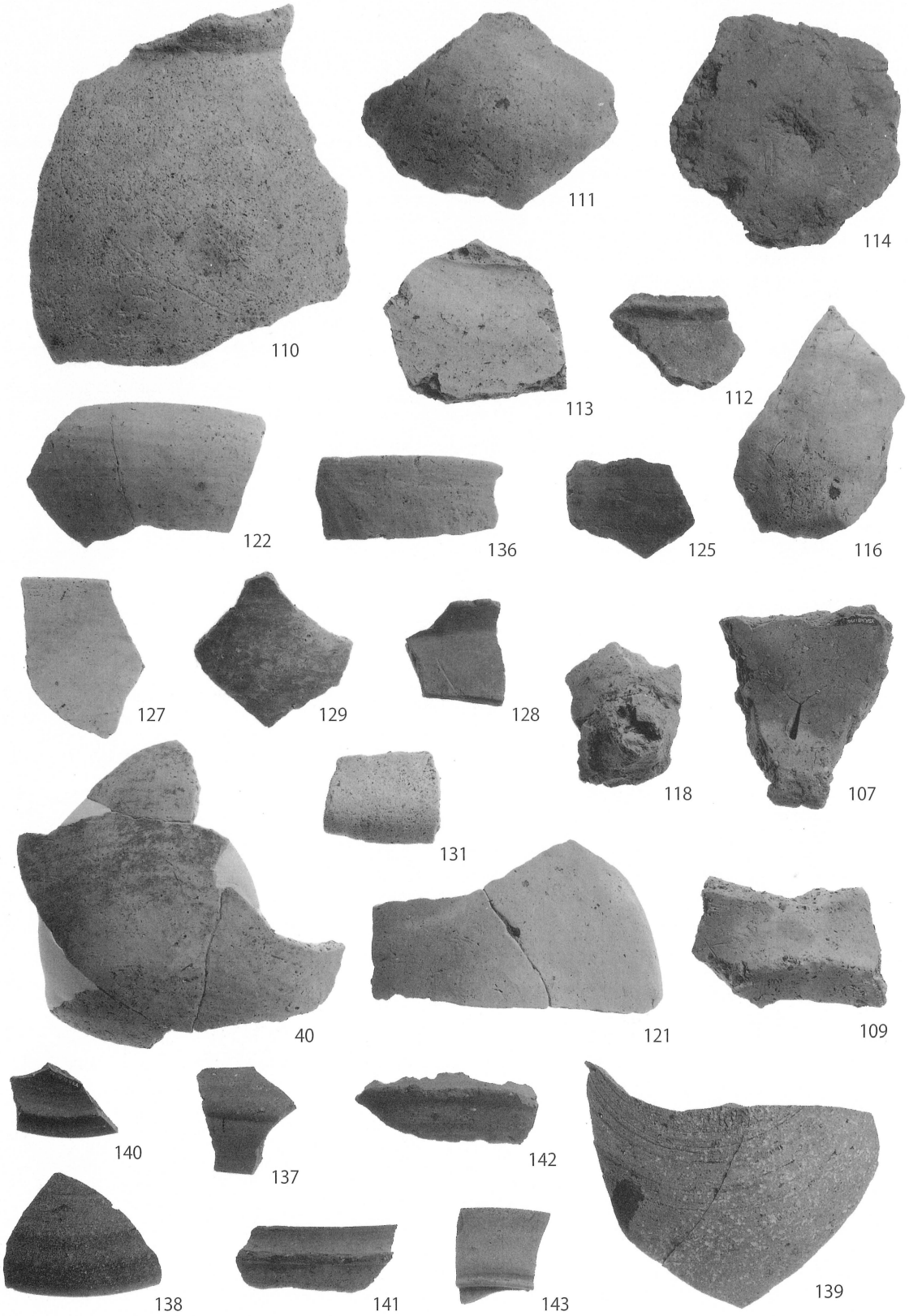


古墳時代包含層出土遺物（2）

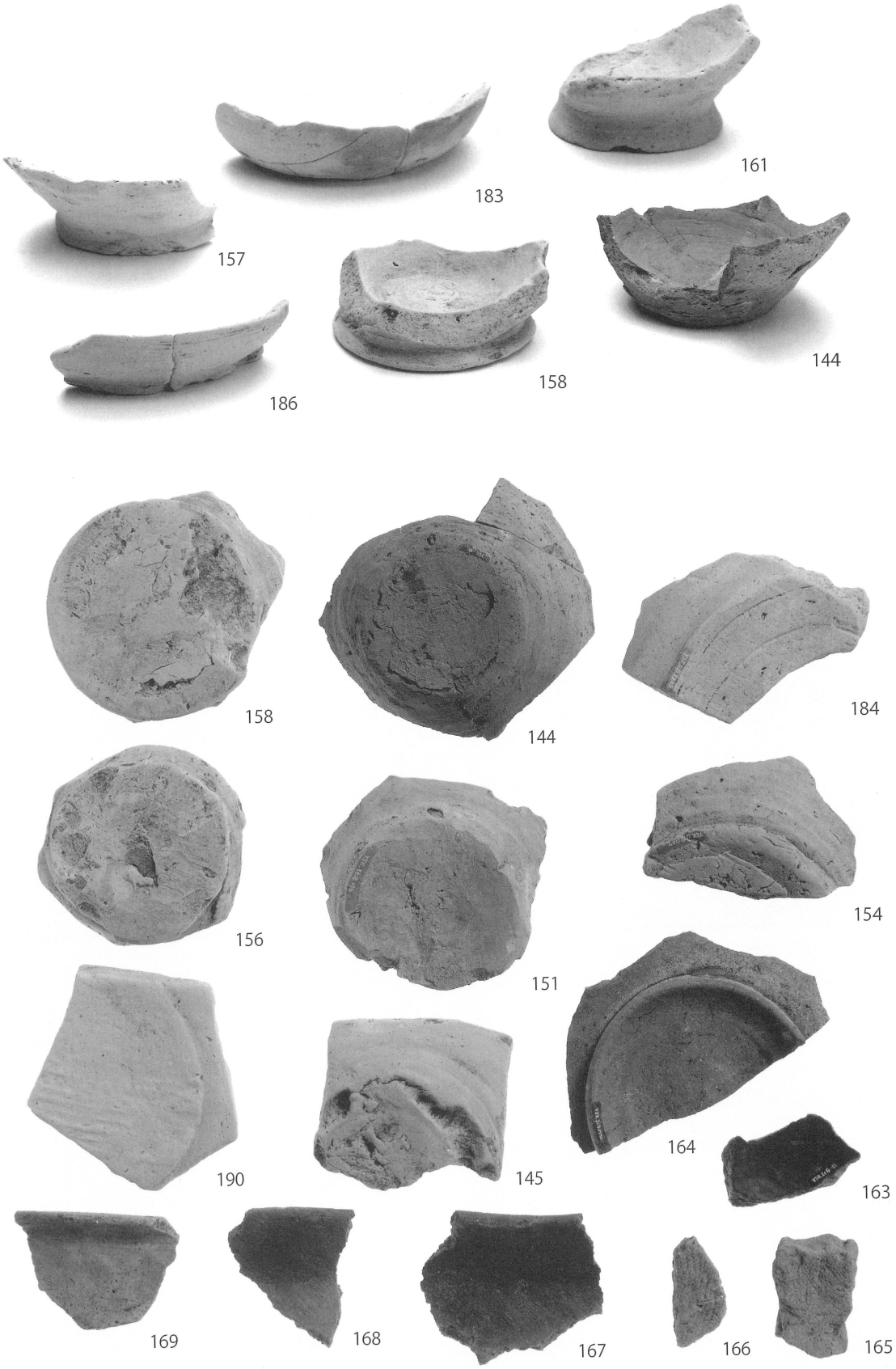


古墳時代包含層出土遺物（3）

図版12

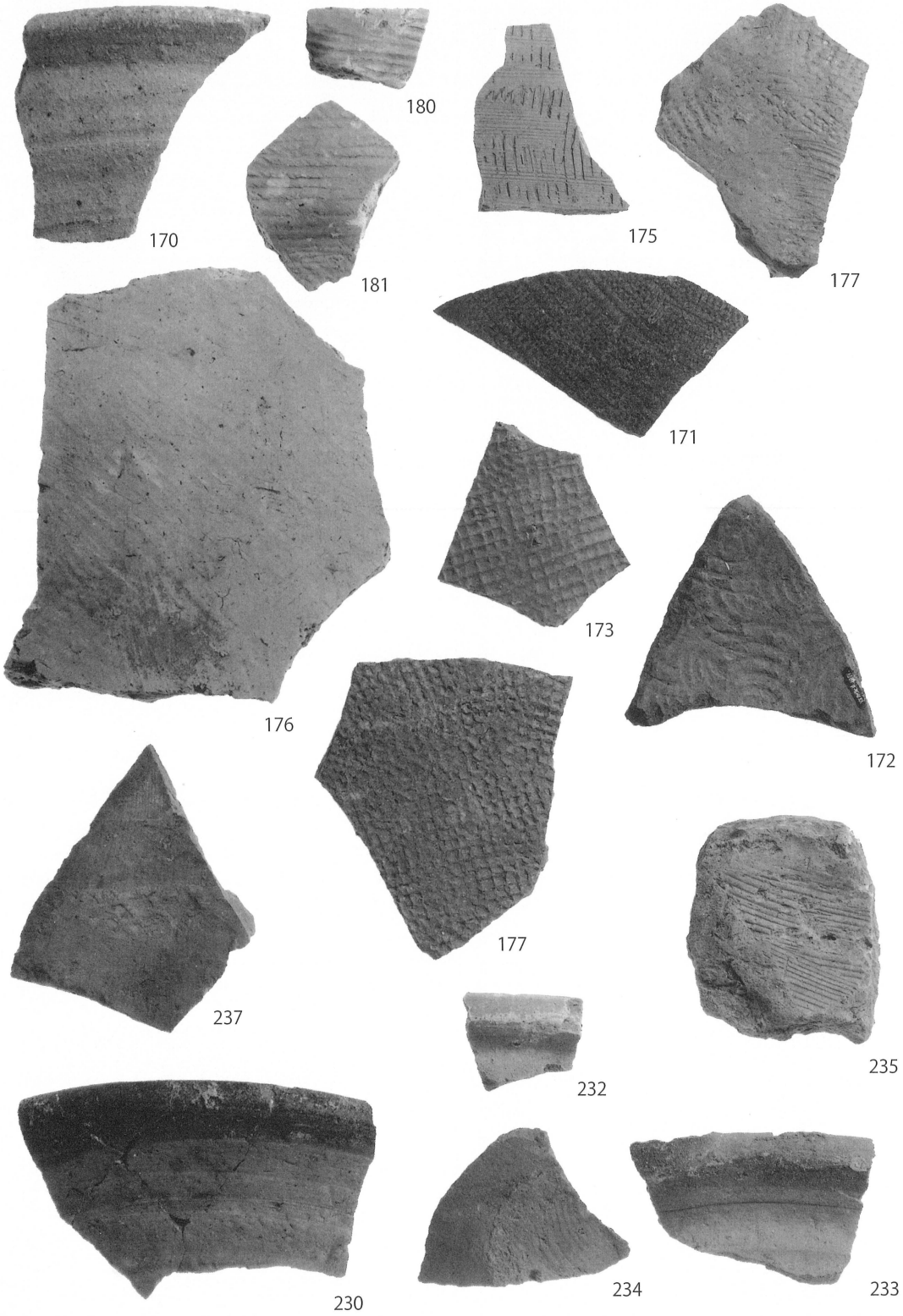


古墳時代包含層出土遺物（4）

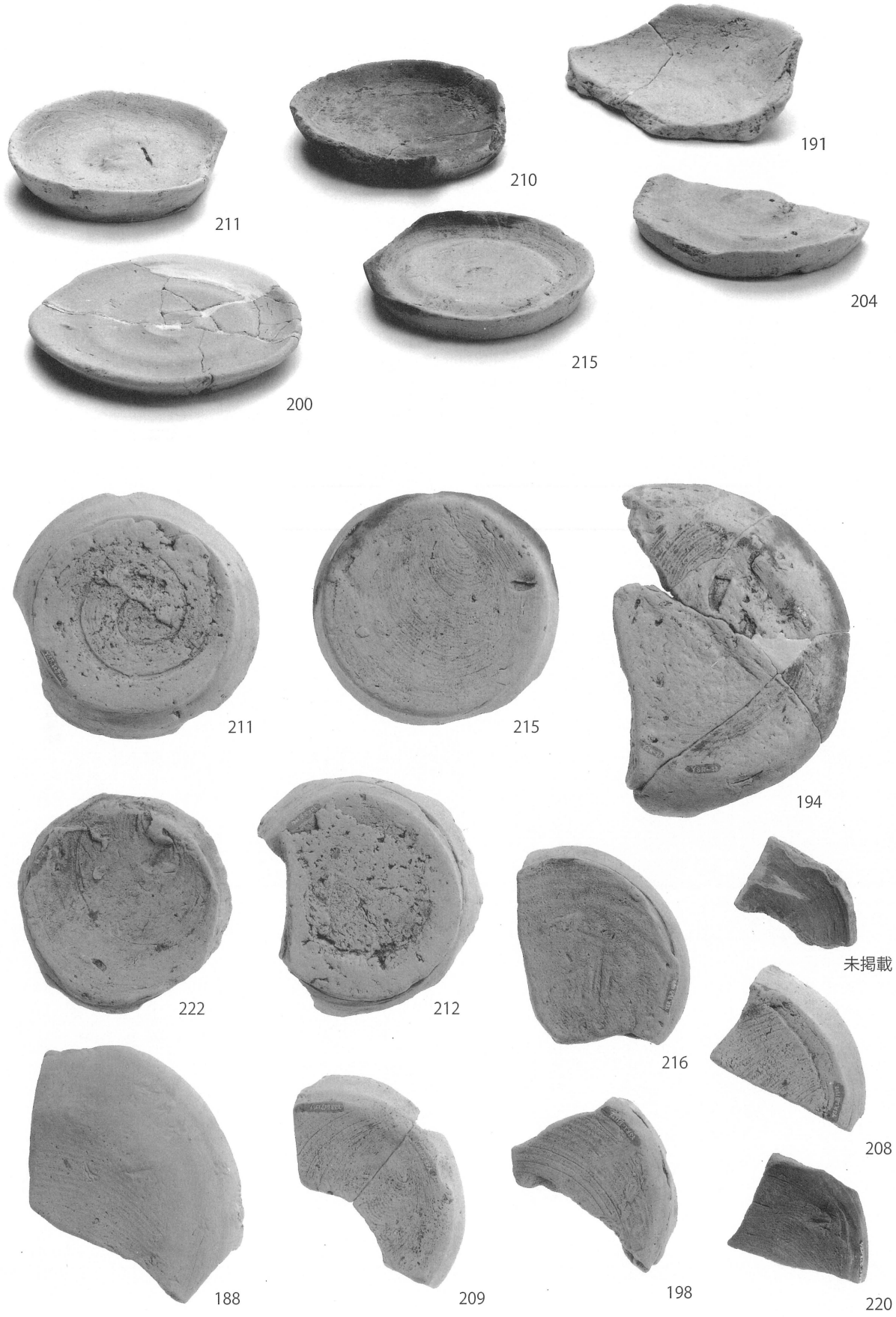

161
183
157
144
158
186
158
144
184
156
151
154
190
145
164
163
169
168
167
166
165

古代・中世遺物

図版14

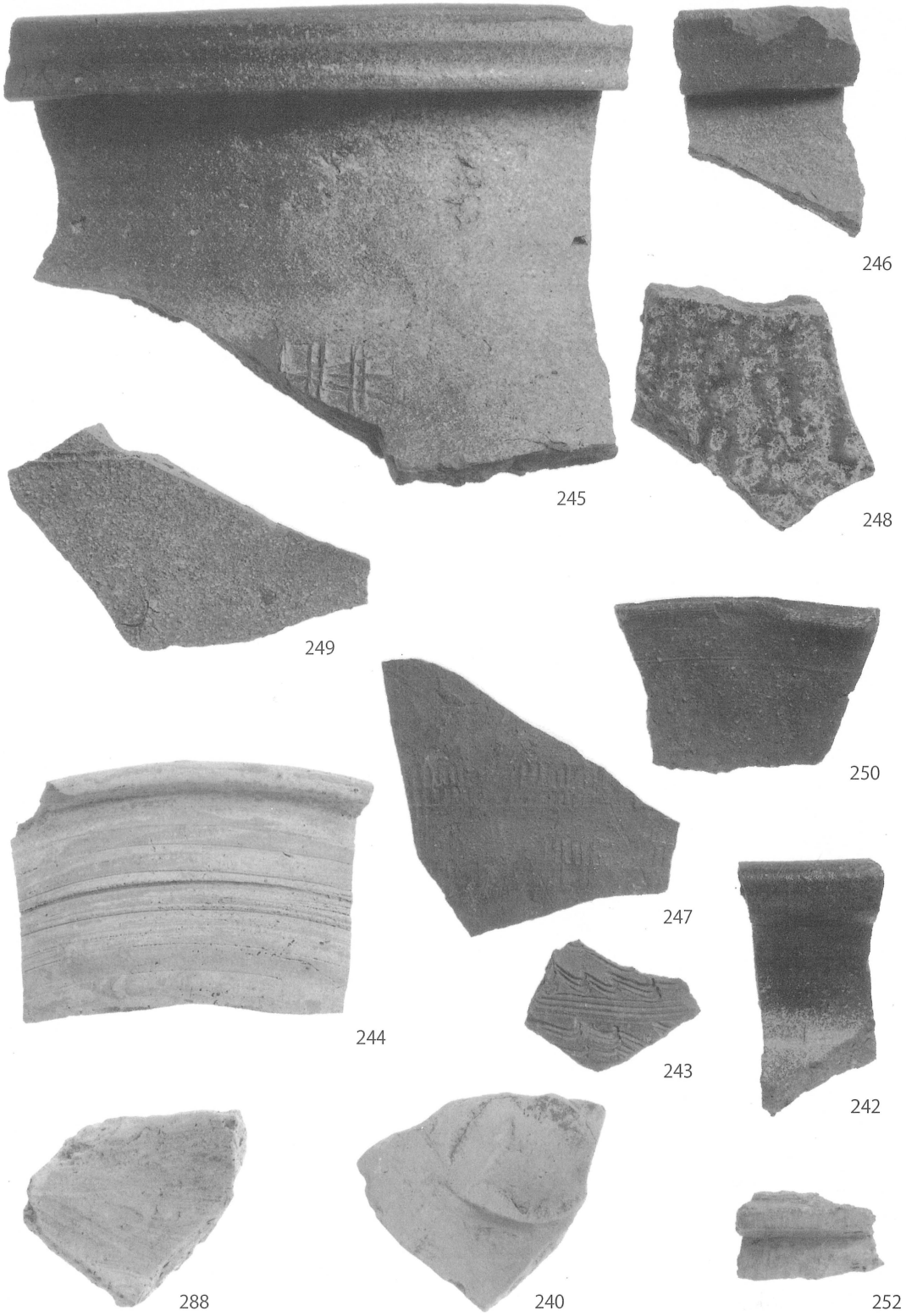


古墳時代～中世須恵器

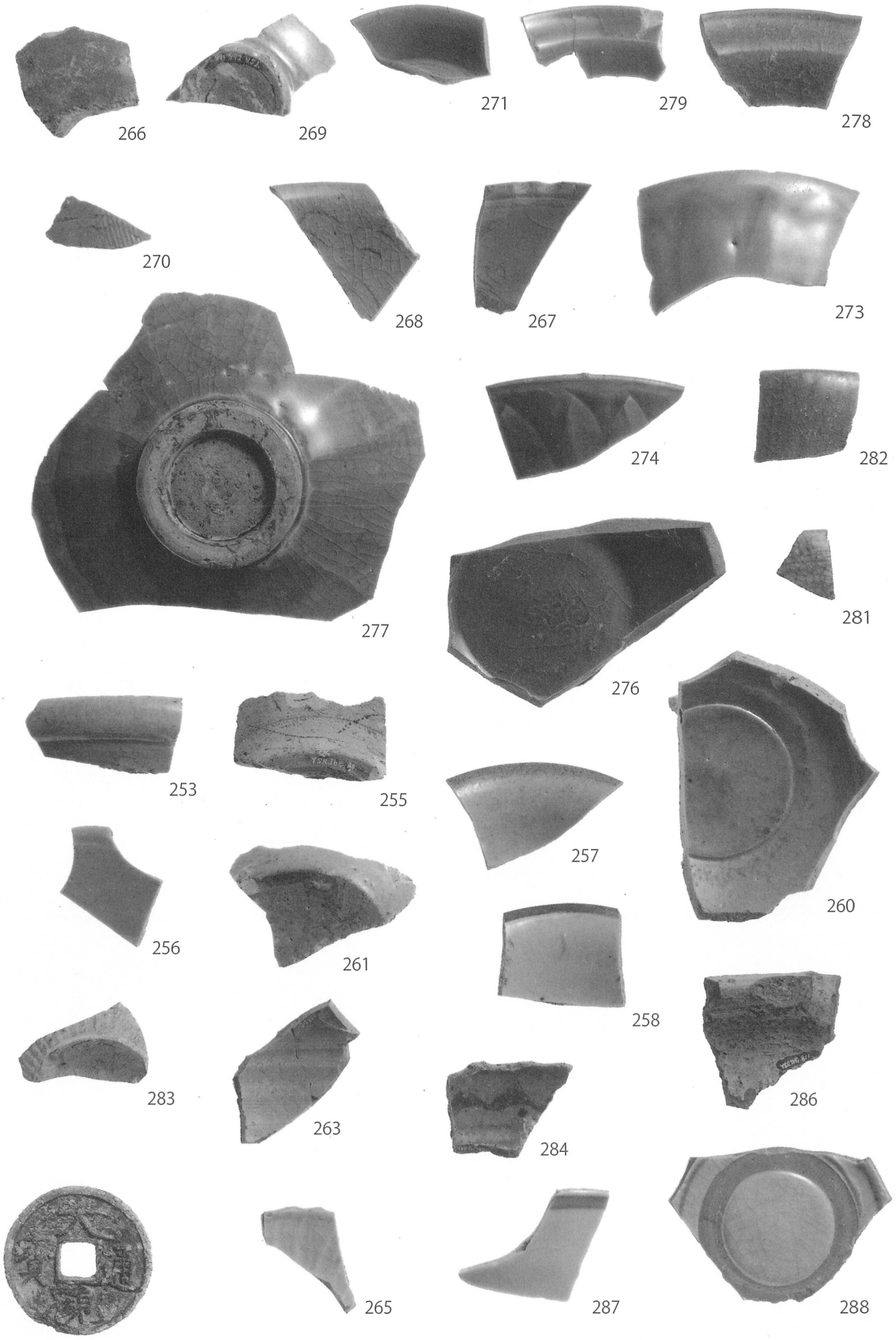

191
210
211
204
215
200
211
215
194
222
212
未掲載
216
208
188
209
198
220

中世遺物（1）

図版16

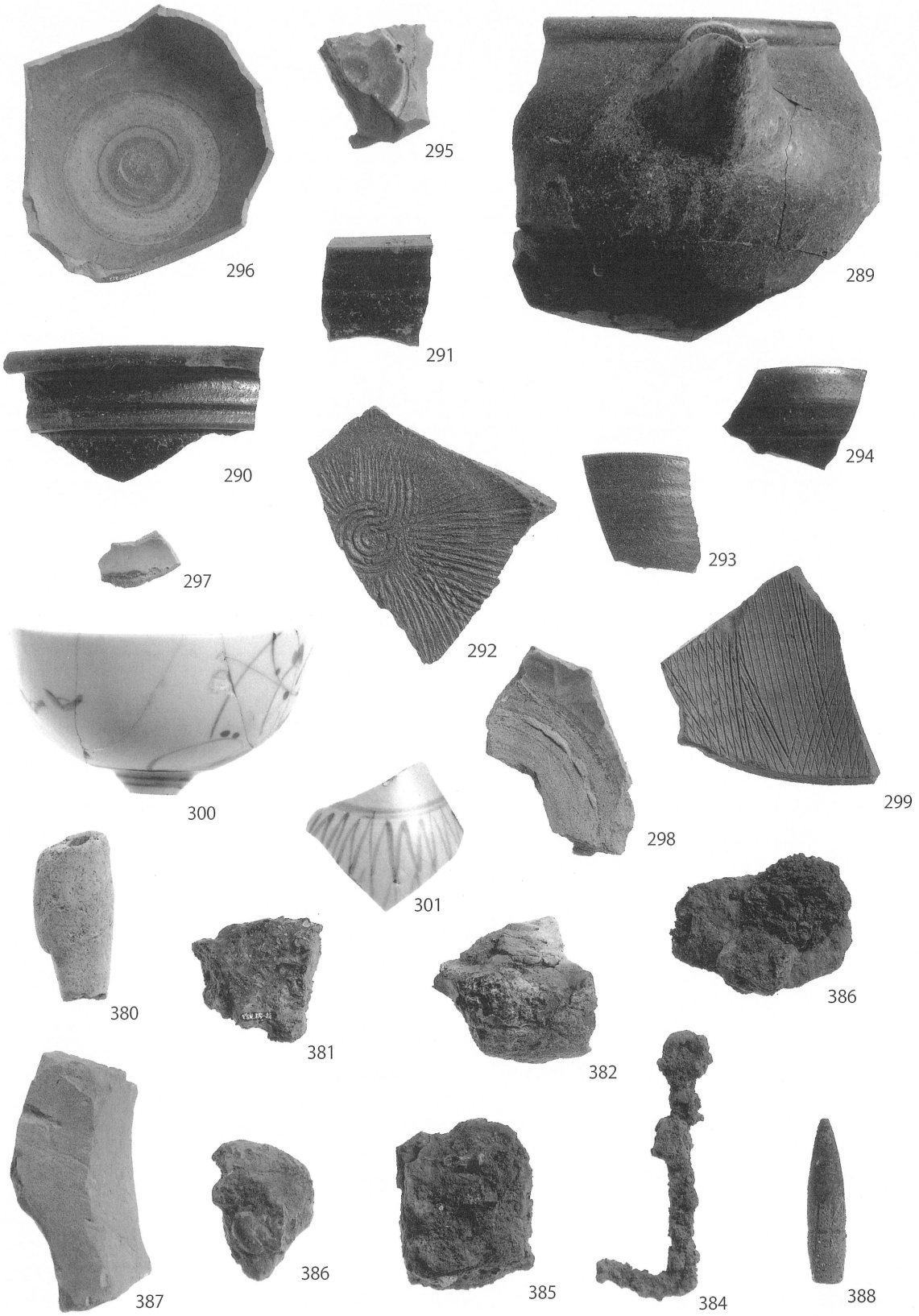


中世遺物（2）

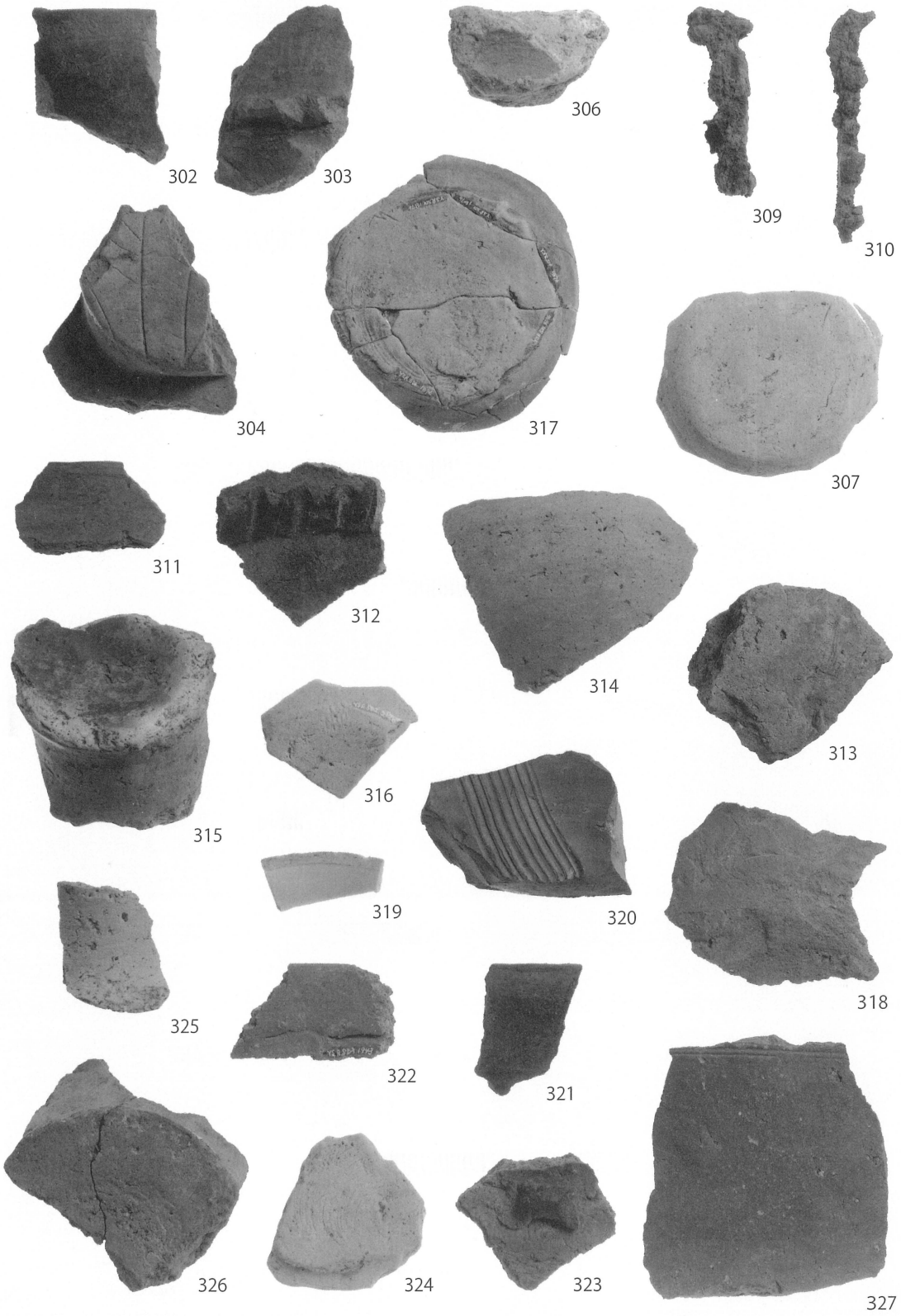

266
269
271
279
278
270
268
267
273
277
274
282
281
276
253
255
257
260
256
261
258
283
263
286
284
265
287
288

中世遺物（3）

図版18

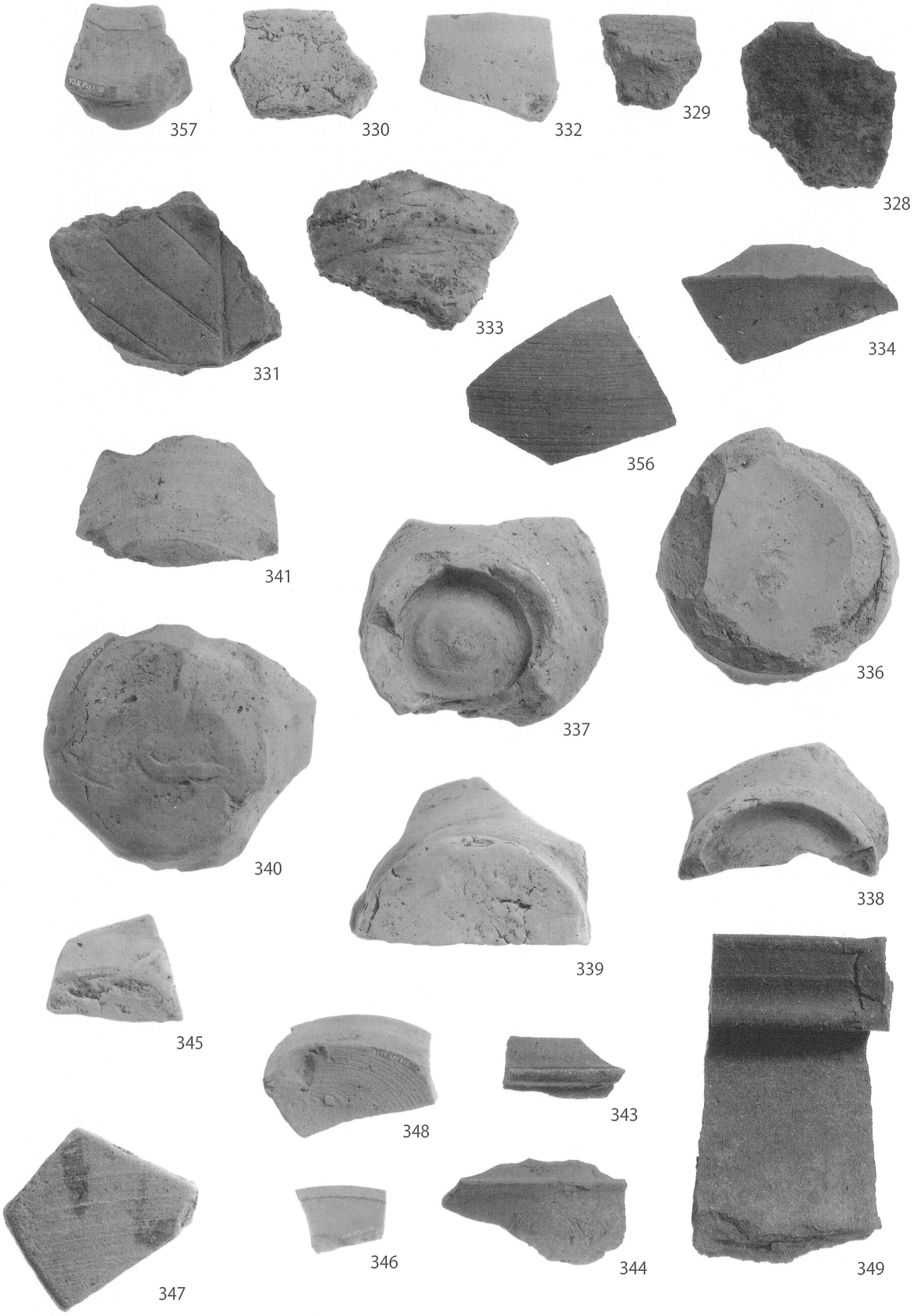


近世・時期不定遺物

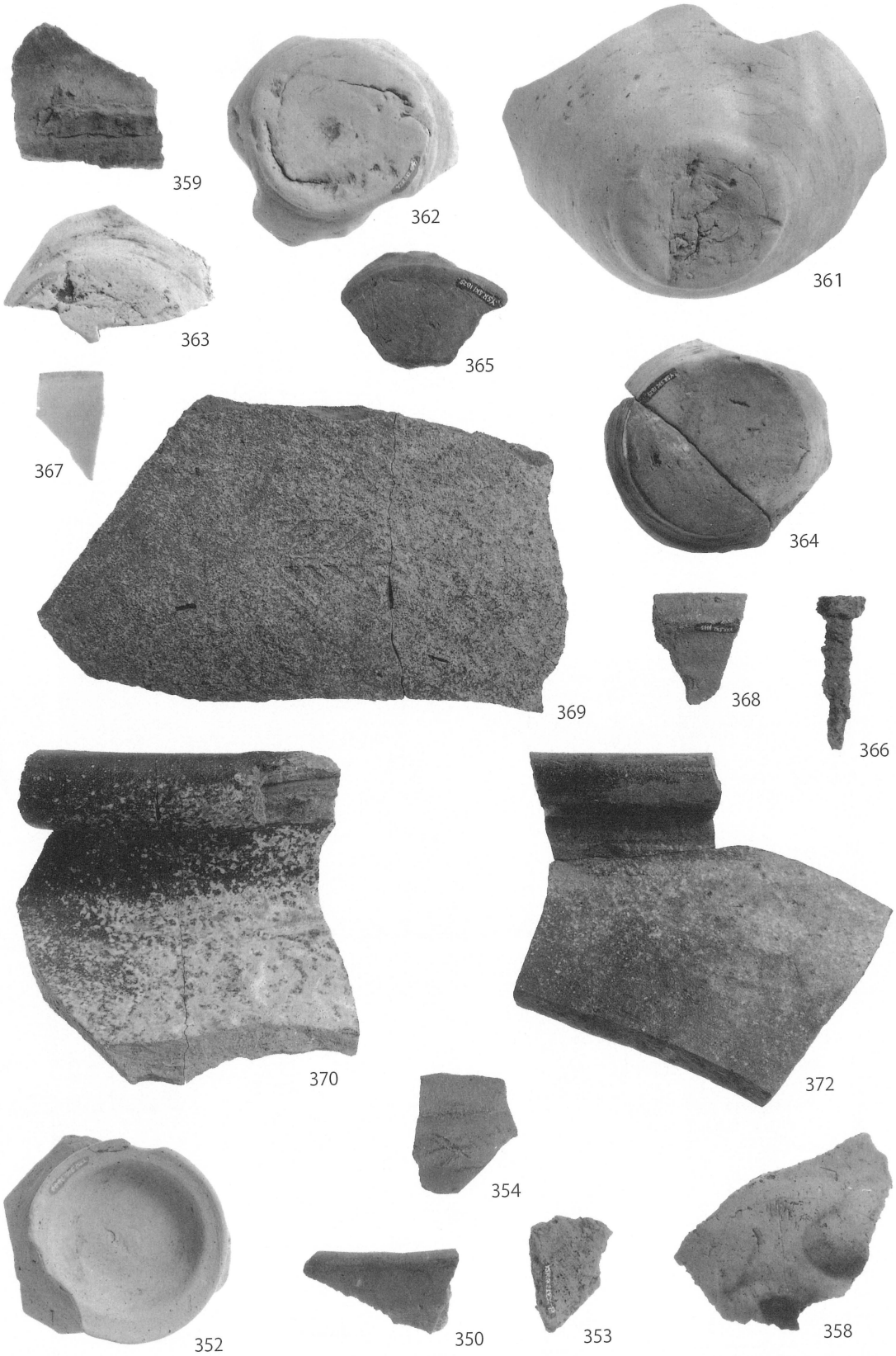


溝状遺構１～３号出土遺物

図版20

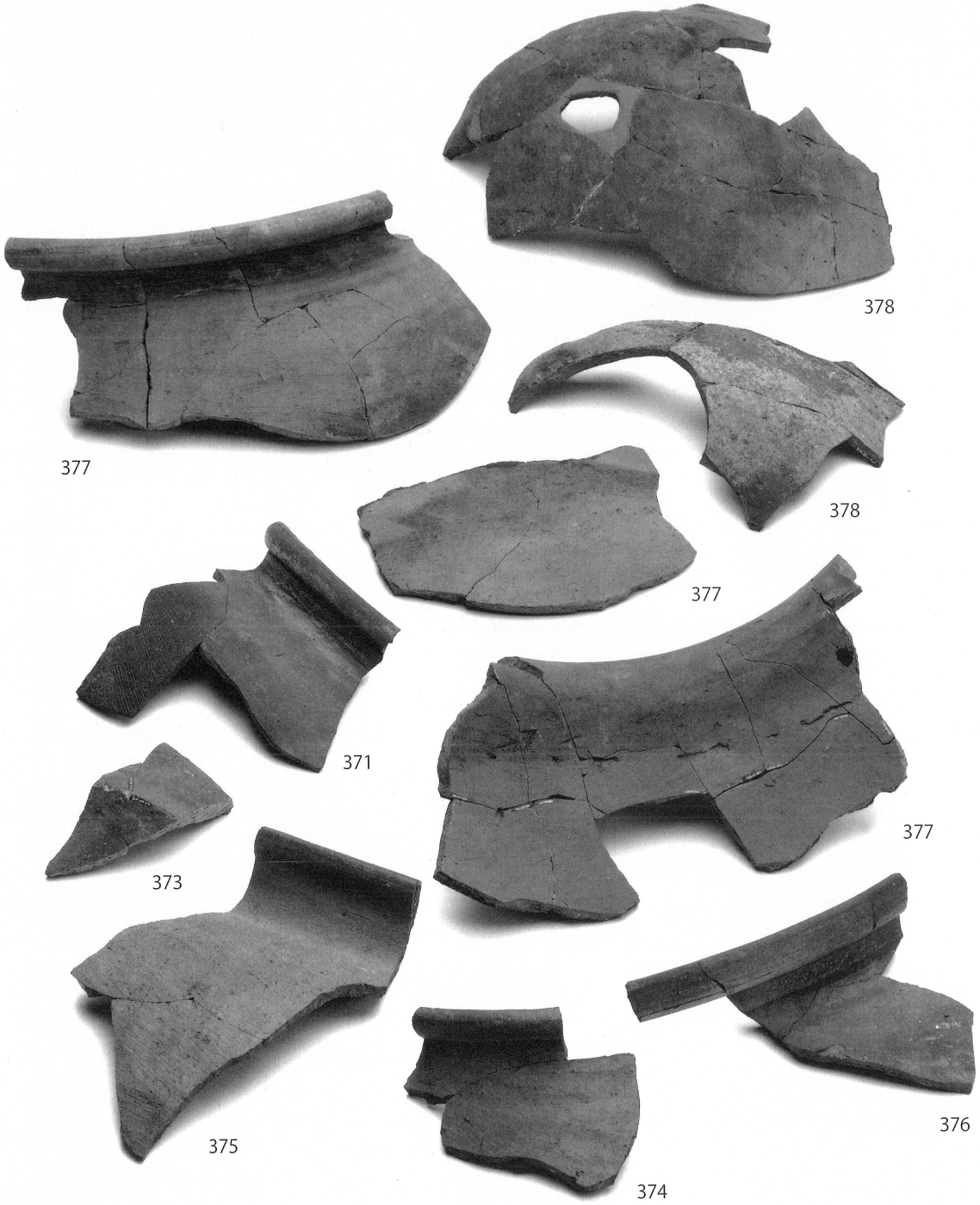


溝状遺構４・５号及びピット１号出土遺物



土坑１・２号及びピット４号出土遺物

図版22



土坑１号出土備前焼

報告書抄録

ふりがな	やすらいせき
書名	安良遺跡
副書名	九州電力株式会社鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	7
編著者名	相美伊久雄（編） 坂元裕樹
編集機関	志布志市教育委員会
所在地	〒899－7192 鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目1番1号 TEL 099－472－1111
発行年月日	2012年3月5日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
安良遺跡（やすらいせき）	鹿児島県（かごしまけん） 志布志市（しぶしし） 志布志町（しぶしちょう） 安楽（あんらく） 字勢園（せぞの）	462217	新15-192 （旧68-115）	31° 28′ 25″	131° 4′ 28″	試掘調査 20101220～ 20110105 本調査 20110518～ 20110715	120	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安良遺跡	集落	縄文時代		中岳式、黒川式、石製土堀具、磨製石斧、磨石	7世紀代に位置づけられる竪穴建物が2軒重複して検出された。また、平底の底面に木葉痕が残る甕形土器の底部が数多く出土した。
		古墳時代	竪穴建物2	成川式（笹貫式）、須恵器、鉄製品	
		古代		土師器、須恵器、製塩土器、黒色土器	
		中世		土師器、須恵器、瓦質土器、国産陶器、輸入陶磁器、滑石製品、銭貨	
		近世		薩摩焼陶磁器、肥前系陶磁器	
		近代	古道1	銃弾、磁器	
		時期不詳	溝状遺構5 土坑2	鞴羽口、鉄滓、坩堝、鉄製品	

要約

本遺跡は縄文時代から近代までの複合遺跡である。中心となるのは古墳時代と中世である。古墳時代においては、成川式土器（笹貫式）や須恵器が多数出土し、竪穴建物跡が2軒検出された。笹貫式土器は最近注目されている7世紀代のものが中心であり、竪穴建物も当該期に位置づけられる。甕形土器の底部は全て平底であり、底面には木葉痕が残るもので、宮崎平野部との関係がうかがえる。同一河岸段丘に位置する宮脇遺跡を含め、古墳時代後期の南九州周縁域の土器様相とともに、当時の集落景観を考える上で重要な成果となった。中世においては、中世前期の備前焼・常滑焼等の国産陶器や白磁・龍泉窯系青磁等の輸入陶磁器が出土した。市内において当該期の資料は少なく、古くから交通の拠点・要衝として栄えてきたこの地方の歴史的様相の一端を明らかにする上で重要な資料となった。また、青白磁合子や黄釉鉄絵盤が出土しており、本遺跡の北に位置する安楽城跡や安楽山宮神社、南に位置する安楽神社を含めて、その歴史的背景が注目される。

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
九州電力株式会社鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

安　良　遺　跡

発行年月：２０１２年3月

編集・発行：鹿児島県志布志市教育委員会
〒899－7192　鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目１番１号
TEL　099－472－1111　　FAX　099－473－1880

印　刷　所：有限会社　志布志新生社印刷
〒899－7103　鹿児島県志布志市志布志町志布志３２２３－７
TEL　099－472－2422　　FAX　099－473－3250